
パニシング・ツイン

なしか 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バニシング・ツイン

【NZコード】

N6168P

【作者名】

なしか 空

【あらすじ】

一覧性双生児の姉・明美は、些細なことから妹の宵美からイカ焼きの竹串で心臓めがけて一突きされ、危うく死ぬところだつたけど、幸い内蔵反転で心臓が逆に付いていたから助かる。

両親はいさかいの絶えない二人を引き離すため、妹の宵美を遠くに養子に出して、名前も変えて居所もわからないようにする。

成人した二人は拘置所で出会うことになる、明美は検事、宵美は殺人犯として。

ある種の鳥において、先に孵化した雛が、兄弟の卵を巣から蹴り出

す習性がある、親を、そして、Hサを独占するための本能として。同じことが双子にも起こる、母親の胎内で、あるいは出産後にも。それをバーシング・ツインといつ。

プロローグ（前書き）

この小説は拙著「続・ティー・ミスの像」（連載中）との姉妹作であり、双方の登場人物が入り乱れて同じ事件を追い駆けることになつたりします。

双方とも一覧性双生児を題材にして、一律背反した世界の葛藤を描こうとした筆者渾身の野心作であります。

プロローグ

- - - 一〇〇九年 平成二一年 八月三日。

東京拘置所。

午後一時。

時ならぬ開扉の音に、水上弥生は午睡から叩き起こされた。

「1025・面会だよ」

「面会?」

担当看守をぼんやりした眼で見上げたまま、つぶやくように聞く。
それから水上弥生はのろのろと体を起こした。

(誰だろう?)

面会といえば、このところは養母の貴子が、弁護士の山田ぐらいなもの。だが、二人とも月末に来たばかり。寝覚めのボーとした頭で、ほかに思いをめぐらせる。

「誰?」

豊満な制服姿で仁王立つ看守は、まるでムチでも持っているかのよう胸を張り、肩を怒らせて、ことさらに一重アゴを引いている。規則に従つて、余計な口はいっさい利かないぞ——とばかりに唇を引き結んでいる。

のぞき窓からのぞいて、水上弥生は我が眼を疑つた。透明のアクリル窓の向こうに、意外な人物が座つていたからだ。

その人物に会うのは何十年ぶりだろう。

縁日で買った焼きイカの竹串で心臓を一突きしたのが——あれが十一の時だから……かれこれ十八年ぶり、か。

やつが死なかつたのは、悪運にも心臓が反対側に付いていたからで、刺し傷は深々と肺腑を貫くほどに満足すべきものだった。

おかげで自分は何千キロも離れたところの遠い親戚 といつて

も一世紀も遡らなければならぬルーツの、子供のいない夫婦に養子に出された。

それ以来やつは、両親のもとでのうと暮らしてきたわけだらうけど、こつちは片時も忘れたことはない。憎しみの炎をほかに転化して、狂おしく生きてきたのだ。

水上弥生は異常な興奮に打ち震えた。ほとんど叫びたい気分だった。全身を4秒サイクルで血液が駆け巡る。

担当看守の高木が、閉経前のかさついた顔を向けてきた。面会に応じるかどうかここで相手を見てから決めることになつてゐる。ズボンと一緒に見舞われた者がいたからだ。

水上弥生はうなずいた。

高木がドアをノックする。中からドアが開けられ、立会いの男性刑務官に引き渡された。

ひがしままあけみ
東浜明美は入ってきた妹に素早く眼を向けた。

片時も忘れたことのない十八年ぶりの妹。一挙に時間が十八年前に遡り、小学生だった可愛い妹の面影を引き連れて舞い戻つてきた。十八年ぶりとはいへ、部屋の中央にふてぶてしく佇立する、すらりと長身の、黒い化纏のトレーニングウェア姿の妹に、戸惑いは感じなかつた。

立会いの刑務官が一人を交互に何度も見たのとは対照的に、二人はまるで鏡に向かうように静かに見つめ合つた。

東浜明美が実直そうな中年の係官に眼を向ける。手錠を外せとその眼がいつている。あわてて伊崎は未決囚の手錠を外した。

そして、未決囚の腕をとつて椅子に座らせた。自分は隣の椅子に着座する。

いや、そうしようとして、東浜明美の眼に追い払われた。弁護人でもなく、担当警察官でも、担当検事でもない相手に位負けしたよう、しぶしぶ出て行く。

アクリルの窓を挟んで一人は無言で向かい合つた。

部屋の外では、追い出された伊崎と、担当看守の高木が、なんと
ウリー一つな美人姉妹かよ、と話している。あれが一卵性双生児とい
うやつかいと。どれどれと、高木がまたのぞき窓をのぞいて納得し
ている。

だが、当人たちにすれば、お互の違いばかりが目立つ——とい
うか、何から何まで、まるで正反対なのだ。

髪の分け方から顔つきまで　ツムジの位置と渦巻きが逆なのだから
当然のこと。聞き耳・利き眼・利き手も逆だし、内蔵さえも一
方は逆転している、精神的にも、人格や、考え方、嗜好、睡眠、パタ
ーンに至るまで、絵に描いたように対称的な二人であった。

子供の頃は親のなすまさに一人ともツインーテールであったが、
今はウエーブのかかった長い髪の明美に対し、宵美は短く刈り込ん
だ、ボーリッシュな髪形。

だが、二人が向かい合えば、みごとに一人が一人になる。鏡文字
を鏡に映したように。

こういう左右対称的な双子は、その名もミラー・ツインと呼ばれ、
双子の中でも珍しい存在。原因は受精卵の分裂時期が関係している
のではないかといわれている。

「何よ、あんた」妹の弥生のほうが先に口を開いた。「今更あたし
に何の用なのよ」

これに対しても明美のほうは穏やかに妹を見つめるだけだった。

「ふん！ そういう顔、あたし、大嫌い！」

「……相変わらずね」ようやく明美が口を利いた。「わたしはあん
たが好きだけど」

「やめなよ。あんたまだ懲りないの。あたしに殺されかけたのに」

「……いつも、あんたのことを考えてた」

「今だつて自由の身なら殺してやるよ。だつてあたしがこの世で一
人。二人とはいらないんだよ！」

「あんたとわたしは違う。あんたはわたしの可愛い妹。かけがえの
ない妹。今でも愛してるわ」

「そんな歯の浮くようなセリフがよくいえるね。ハイテンションな歐米人じゃあるまいし。だいたい何なのよ、そのケバイ衣装は。宝塚に憧れてた、あの頃のまんまね。あたしはあんたの草の一オイのする息が嫌いだつた」

「でも、仲良かつた時期もあつたじゃない」

「いつておくけど、あんただけいい子だと思ったら大間違い。あたしはあんたなのよ。嫌らしい偽善の陰に、あたしが潜んでることを忘れないことだね」

「そうね。ことさら悪い子ぶつてあんたの、ほんとうの心根がどこにあるか。どっちみち、あんたとわたしは、同じ受精卵から分裂した分身なんだもの。DNAも全く同だし。なのにどうしてほかの双子のように仲良くできないのかしら……ほかの双子がうらやましい。マナ・カナなんて、あんなに仲いいもの」

「食べるものから着るものまで一一もしかして男の好みまで？ 気色悪いんだよ。それで何、どういう気まぐれからあたしに会いに来たのさ。よく居所がわかったね。どうやって捜したの？」

「あんたが頻繁に事件を起こしてくれたからね。でなきゃわからなかつた。苗字も名前も変わってるし。ほんとうはね。わたしたちは離れているほうがいいのかも知れない。顔を合わせれば、ケンカばかり。でも、仕事の関係から、どうしてもあんたの力を借りたくて。九州の大分から。親には内緒でね」

「へえー！ こいつは驚いた。こんなあたしでも、人様のお役に立つことがあるのかねえ。へへっ。あんた今、大分県にいんの。仕事つて、どんな仕事をしてるんだい？」

「検事」

「ケンジーーって？ あの、検事？ 檢察官のこと？ ちょっとやめてよ。この世であたしが一番嫌いな人種じゃないか。まさかあんたがーーははん、そういうことかい。どうりで官のやつ、あんたに頭が上がらないわけだ」

「まだ、新米だけどね」

「ねえ、ねえ。タバコ一本吸わせてくんない?」

「ダメよ」

「ケチ」

東浜明美が、赴任地の大分地検で担当している殺人事件の被疑者も双子だった。

双子 자체今や——いや、昔から、どこの国の神話や物語にも出てくるし、珍しくもなんともない。

特に昨今では、芸能・スポーツ・政治・文化の、あらゆる分野で双子の有名人が活躍している 珍しいところでは、野球選手・監督だった王氏にも双子の姉がいた。

とはいっても、周辺に双子がいるかということになると、いるという者は少ないだろう。その程度のマイノリティーであることにには違いない 日本では現在約1パーセントの確率で生まれている。

その中でも、二卵性の男・女という組み合わせが全体のほぼ四割強を占め、一卵性の男・男というのが一番少ない。

けど、不思議なことに、一卵性双生児の場合は、時代や人種に関係なく、おしなべて約〇・4パーセントの出生率である。

被疑者はその男・男の組み合わせの一卵性双生児であった。それも、ミラー・ツインに劣らぬ特異な形態の双子で、事件自体もきわめて特異な事件であった。

東浜明美検事は、事件の内容については触れずに、「あんた今でもわたしを憎んでる?」と、宵美にきいた。

宵美というのが本当の名前で、水上家に養子に出され、そこで弥生に改名されていたのである。

「おやつの串焼きイカをあんたに食べられた恨みならもうないけどね」

「あれは、あんたがそう仕向けたんじゃない。いつだってそう。わたしが食べ終わるまで待っていて、さもいらない素振りで放つておく。あの時だって、わたしが食べなきゃ、猫が食べてたわ」

「猫が食べようとしたネズミが齧るうと、あたしのなんだから。ひとのものを勝手に食べないでよ。あたしのものに手をつけたあんたが断然悪い！」

「あやまつたでしょ。髪をつかんで殴ることはないと思ひけど」「その何倍もの力強さで親父に殴られた。だから親父の一一番大事なあんたを、イカのように串刺しにしてやつたのさ」
「パパやママにとつては、あんたもわたしも同じ可愛い娘。ビーナスちゃんって呼ばれて、一人とも可愛がられたじやない。名前も、宵の明星と、明けの明星から取つたつて。パパはあんたの意地悪を叱つただけだよ」

「ふん！ 古代人はビーナス 金星 が一つあると思つてた。親父だつてそuds。何かといえど、あたしづかり叱つた」

「あんたが悪さばかりするからよ。本気でもないくせに」

「本気でないつて！ あんたまだわかつてないね。竹串の先が背中から突き出したことを忘れたのかい」

「それなんだけど……わたしのこと、少しば心配した？」

「全然」

「死んでたら、悲しんでくれた？」

「せいせいしただらうね」

「……」

「何だい？ 涙なんか。心氣くさいね」

「……あんたには、憐れみや、愛しみの心はないの？」

「何？ それ。 それよか、早くしなよ。時間が来ちゃうよ。何を教えて欲しいんだい。悪党のウソを見抜く方法なら教えてやつてもいいよ」

「……」

東浜明美はまじまじと妹を見た。担当事件の被疑者と向かい合っている時に感じた戸惑いを、今、妹に対しても感じている。

「それならたつた今、訊いた」

「え？ あたしのこと？ 憐れみや愛しみが何だつて？ そんなこ

とを訊きに、はるばる九州くんだりからやつて来たつての。バツ力
じゃないの」

水上弥生こと宵美は鼻に皺をよせて憫笑した。^{びんしょく}チャーミングな白く大きい前歯一本をのぞかせて。皮肉にもそれが彼女一番のオチャメな表情であり、愛くるしくさえあるのだ。子供の頃と少しも変わつてない。

「そんなの近場の動物園にでもいつて、ライオンだかトラだかにでも訊ねたほうが早いんじゃないの。こつてり脂ののつたイボイノシシに情けをかけて、ヨダレを垂らしながら頭を舐めるだけにしどうなんて、そんな奇特なライオンがいれば別だけど」

「茶化さないで！ ほんとうのところを訊きたいのよ。わたしは一体あんたの何なの！ —— ほんとうは独占欲なのよね。そつなんでしょう。パパを独占したかった」

恐怖と激痛にパニックになつて差し伸べた手を、平然と見つめていた時と同じ顔で、宵美はいった。

「そしてこの世界をね」

「……」

明美は言葉を失つた。

「んじや、今度はあたしの頼み、聞いてよ。このままだと三年の実刑食らいそうなんだ。能無しの弁護士ばかり。ましなの、いないかねえ。あんた検事なら、ヤリテの弁護士の一人や二人、知つてんだろ？？」

「執行猶予は無理。三年は妥当な線だわ。人を殺したんだもの」衝動的な傷害事件を繰り返すうち、とうとう宵美はつまらない諍^{いさか}いから男を刃物で刺し殺していた。

「向こうが仕掛けてきたんだ。仕方ないじゃないか」

「動物の世界じゃないんだから。トラブルを避けようと思えば、ほかに方法がいくらでもあつたでしよう。いい、悪あがきはしないで、反省の色を見せて、できるだけ遺族に補償をして、早く裁判を終わらせることね。あんた、前が多いから、未決拘禁の分、全部は算入

してもらえないと思つ。

結果そのほうが早いのよ。いい子にしていれば、一年ちょっとで、

仮釈で出られる

「一年も辛氣くさいムショに我慢してろってのかい。薄情者！ 兄弟のよしみで、何とかしてくれたつていいじゃないか！」

「反省するには足りないくらいの時間だわ」

宵美の犯歴を考え、明美は泣きたくなつた。三十にもなるとうのに。この先どんな幸せが彼女に望めるのだらう。悲しみは苛立ちに変わつた。

「どつちみちまた、面倒を起こして舞い戻つて来る」とになるんだから

「あんたねえ！」

「そのうち、終の棲家になつてしまつよつたことヒーちよつびよい機会だわ。この際、じつくり反省しなさい！」

「チクショウ！」宵美がいきなり立ち上がつた。激しく窓を両手で打つた。「あんたはいつも陽の当たるところにいて、あたしはいつも日陰にいる。あんたを殺すしかないんだ！」

刑務官一人が雪崩れ込んで来て、体格のいい女性看守の高木が宵美を羽交い絞めにした。

それを振り飛ばそうとするが、何せ粗暴な囚人用の重戦車。びくともしない。猪木にバックをとられたほうがまだましだ。急所を突こうにも急所がないと来ている。

とうとうねじ伏せられて、伊崎に後ろ手に手錠を打たれた。

「殺してやる！」なおも、もがきながら宵美は叫び続けた。「きつと殺してやる！」

東浜明美は両親の戒めを破つて妹に会いに来たことを激しく後悔した。向かい合つてはいけない一人なのだ。

(遠くから恋焦がれているだけの姉妹なんて、これは一体何者のいたずらなの！)

その奇怪な事件は一年前に起きた。

魚市場からフェリー乗り場にかけての広大な岸壁上空を、ピーヒヨロローと、長閑に、高く低く舞つていたトンビの群れの中の一羽が、どういうわけか須崎の海岸防波堤上空にやつてきて、しきりにカラスと空中戦を演じている。

午前九時をまわった頃のことだ。

これを祇園洲の住人の品川薰老人が、祇園東の防波堤から無心に見上げていた。

B29のようなトンビも、零戦のように果敢に挑みかかる三羽のカラスを、小づるさいチビ助どもがと、最初は余裕をかましてあしらつていたが、そのうち、素早い動きで執拗に上下左右から攻撃してくるカラスを持て余し、怯みを見せるが、今度はカラスが嵩にかかつて攻勢に転じた。

体当たりを食らつて羽根を散らしたトンビは、とうとう、あたふた翼を動かし、制空権のある岸壁のほうに逃げていった。

フオツ、フオツ！

こけた頬の合間から墓石のよつた門歯一本を見せて、この日初めて品川老人は声を上げて笑つた。

天使のような笑みを振り撒いて歩く老人ではあるが、声を出して笑うことは滅多にない。この空中戦には、つい声を漏らしてしまうほど感じるものがあつたのだろう。

フンドシを洗つてくれていた連れ合いを失つてから、トランクスとかいうハイカラなパンツを穿かされて、元帝国陸軍伍長は心もない日々を送つていた。

自分のことは「カオルちゃん」と認識しており、齢は八十七から先はわからない。何年経つても人に聞かれたら、「八十七」と答える。

朝食のあとに「はい、カオルちゃん」と一々幾種類かのクスリを飲まれたのちのことだが——右手の平に、ニッケのアメ玉ひとつが、オカアチャン 長男嫁 からのせられる。

それを落とさないように、キャバレーのボーアイが銀盆を片手にさげ持つようにして持ち、ネジを巻かれた兵隊人形のように、木綿の日本タオルの上から草色のツバ広幅を被り、草色の半袖シャツと、草色の半ズボン姿で、草色のリュックを背負い、日課の散歩に出かけってきたのだ。

リュックの中には彼の大事なお宝が入っており、外付きのポケットには、迷子になつた時のために、住所と名前と電話番号、それに血液型を書いた手帳が入れてある。

アメ玉を口に含む時期も、それを右頬から左頬に移し変える時期も、そしてまた散歩コースも——冬眠中のロシアのクマが寝返りをうつ日が決まつていてるよう——ちゃんと決まつていてる。

だけど歳を重ねることに、股関節や膝関節のチヨウツガイが錆び付いてきていて、さすがに背筋をピンと伸ばした元帝国陸軍兵士も、歩幅はきわめて狭く、膝が曲がらないから、麦踏みの要領でチヨコチヨコ歩きに歩く だから首振りになり、天使のような笑みを振り撒くことになるのだ。

なので、いつも船着場にやつてきて石段に腰をかけ、いつものように入り江の向こうを眺めるか、防波堤に寄り掛かつて田杵湾を眺める頃にはもう、アメ玉はコンタクトレンズのようになつているのだった 家に帰り着くまで残つていて、それをベロの上にのせてオカアチャンに見せたものだが。

今日はどこかいつもと違つていい——と、カオルちゃんは思っただろうか。

空も海も島も入り江もいつもと変わりない。満潮なので七段ある石段の下一番目からスロープにかけて波が洗つていて。セミもうるさく鳴いている。高い石壙を廻らした大屋敷の庭木のおかげで、そこは日陰で涼しくもあつた。

いつもの風景と違うところは、小型船舶用の船着場の右側壁

そくへき

幅五十センチ前後 の突端の上に、黒いゴム長靴が一足、湾の外に向けてそろえて置いてのことだった。

そこに一羽のカラスが舞い下りたのが九時前くらい。

これはカオルちゃんの証言ではない。そこから北東に少し離れたところの、須崎御台場付近の防波堤や、波消しブロックの上などで遊んでいた、近所の子供たちの証言だ。近頃では小学生でも携帯電話を首から提げている。時々それで時間を見るのだろう。

須崎お台場 というのは、鎮国政策を押し進める幕府の命により、臼杵藩が湾岸防備のために構築した砲台、の跡の石垣のことである。彼らは満潮だというのに、四、五列に敷き詰められたテトラポットの上や、あらうじとか、高い水門の上などを、危なつかしくも、絶妙のバランス感覚で、上り下りして遊んでいた。足を滑らせて高い水門の上から落ちでもしたら、またテトラポットの間に落ちても大変。子供というのは、親が見てないところでは、なんと危なつかしいことか。

彼らの証言によれば、この時カオルちゃんは船着場から南西に少し離れたところの防波堤に寄り掛かっていた。つまり船着場を挟んで、彼らとは反対側にいたわけだ カラスにとつても、両者は安全距離であった。

たちまち一羽が二羽になり、三羽になつた。

そして、三羽のカラスが一斉にスクランブルし、領空侵犯のトンビとの空中戦が始まったのである。

トンビを追つ払ったカラス三羽が、再び側壁の上のゴム長靴のところに舞い下りたのが九時半頃だろうか。

いずれにしても、ゴム長靴の一つが倒れ、カラスがそれに集つているのを不審に思ったカオルちゃんが、指差して騒いだものだから、そこら辺で遊んでいた子供らが、棒を持つて追い払いにやってきたわけである。

なんでカオルちゃんが不審に思ったのかはわからない。ひょっと

して、嘴太力ラスのクチバシに付いた血肉が見えたのかも知れない。なにしろ修羅場を潜つてきた元兵士である。空中戦に興奮してもいただろう。落ち窪んだ眼窩の中のトビ色の円らな瞳が、ジャングルの向こうを見透かすようにして、それを見逃さなかつたのだ。

ゴム長靴の中には一一一足とも一一人間の膝関節から下の脚が入つていたのである。

この一大事を、すぐ近くの警察署に駆け込んで報せたのは、現場近くの中学校で野球をしていた生徒たちである。

小学生から中学生へとリレーされて、所轄警察署が事件を認知したのが、午前十時十一分であつた。

かわいそなのは、第一発見者の小学6年生の男児。彼は長靴を逆さまにして、出てきた腐乳しかけた脚をモロに見ている。

そのショックもさることながら、発見時の模様や、不審人物を見なかつたかなど、性急な質問を、長時間にわたつて受けることになつた。

なにしろ、その場に居合わせた中では、彼が一番しつかりしていだからで、品川老人などはてんで話しにならないし、ほかの小学生らはまだ我こともよくわかつてない低学年であつた。

臼杵小6年2組・出席番号1番の足立明君はしかし、気丈にもしつかりした口調で、訊かれたことにテキパキ答えた。聞き手の刑事が、交通安全教室などで顔なじみのおつちゃんだつたこともあるのだろう。

それになにより、「名探偵コナン」などでおなじみの刑事 残念ながらおつちゃんは警部ではなかつた——実物の刑事と話していくことに、メチャ興奮してもいた。明日学校にいつてみんなにいいふらして自慢しよう——と思つたけど、残念ながら今は夏休みに入つたばかりなのであつた。

おつちゃんが、喧^{やかま}しいチビたちはわけて、少し離れたところのソファーで大人のように扱つてくれるのもうれしかつた 頭の大きさではすでに大人に負けていなかつた。

急にチビたちがあとなしくなつたと思つたら、婦人警官のおねえさんらが、ご褒美の菓子を振舞つているとこだつた。

そのうちのひとりが、オレンジジュースの紙パックと、ロールケ

一キを持つてこっちにもやつてきた。

「食べなさい」少年の前にそれを置いて、いった。ロールケーキは厚切りにしたのがふたつ小皿にのつていた。プラスチックの小サジがついている。おねえさんはそのまま、彼の横に座つて、「君、よく見かける児だわね」と顔をのぞきこんだ。

足立少年のほうも、よく見かける婦人警官のおねえさんだと思つた。駅の自転車置き場や、通学路の交通整理などで。

お互いに、人一倍、目立つ存在だったのだ。

まず、足立少年は児童にしては頭が大きく、三頭身といつてもさしつかえないくらいの肥満児。上体に比して、下半身がぶつ切りにされたかのように短い、マンボウのような体型。

なので、人生の大半を、ずり落ちそうになるズボンをチチの辺りまで引き上げることに費やしている少年だった。

運動会の徒競走などは彼の独壇場。そのユーモラスな体型や動作が観衆の大爆笑を呼ばずにはおかなかつた。

走る時には鍋を持つように運動パンツの両側を持って、文字通りパンツごと大きなお尻を抱えて走らねばパンツがずり落ちてしまう。けど、彼にも自尊心があるから、そんな格好悪いことはできない。片手でつかみ、片手で引き上げしているうち、波のように上下左右にうねる尻肉によって收拾がつかなくなり、半ケツになり、後ろと前を押されて内股で走つてしまふとするも、短い脚がもつれて、ついには鉄砲で撃たれたイノシシのように大袈裟に倒れる。

そんな道化を演じることによつて一一脚がもつれたように倒れることによつて一一走りが誰よりも遅いことを、ドンケツを走るはめになつたことを、正当化し、羞恥心と、自尊心と、呪わしい現実とに、折り合いをつける。

彼がさいわいなのは、そのキャラクターが誰からも好感をもたれ、愛され、人々をなごませる、好ましい存在であることだった。

彼の動作はいちいち可笑しく、その愛嬌のある体型と合わせて、どこにいても目立つた。声変わりしてない澄んだボーカルの

嬌声が、よほど離れたところからも聞こえた。

一方、若い婦人警官のほうは肌の色が黒いので目立つた。黒いといつても、運動部の女子中学生のように、日焼けと、垢と脂で、黒光りしているような黒さではなく、青と黄色と黒を混ぜたような奥深い黒さだった。顔つきもエキゾチックなので、外人に違いないと子供らしい合っていた。

道行く臼杵市民らも、きっと振り返って彼女を見る。大分県警はついに外人を雇い入れたのかと。

年寄りらは、「ある見よまあ」「土人じやなからうか」「いんね、インド人じやろう」「いんねとなあ、黒人の混血じやろうがええ」と勝手なことをいつて通る。

若者らは、その「」のようにしなやかな、メリハリのある肢体に眼を奪われるけどーーあらゆる分野において、いろんな国の人々や混血が、流暢な日本語で活躍している時代であるーーさほど珍しくもないのだろう、振り返って見るにどどまる。

髪の色は天然の茶髪。ストレートパーマでもかけているのか、真ん中から分けたのを後ろでひとまとめにして、緑と黄色のチエックの布で縛っているーーが、それから下は馬脚を現して、形状記憶合金のように、あるがままの姿を主張し合い、己がじし、てんでんばらばらに、本来の天然パーマ状態で肩にもたれかかっている。

手を加えてないゲジゲジ眉がむしろ新鮮で、眼も鼻も口も整然と、小振りの丸い顔の輪郭の中に行儀よく納まっている。引き締まつた端正な顔立ちである。とりわけ、白目の白さと、歯の白さがまぶしいほどだった。

そんなキュートな婦人警官を見つめられて、足立少年は緊張し、顔が赤らんだ。

幼女がすでにシナを作るよう、思春期にさしかかっている彼も男だ そのシルシはまだないようにしても。照れ隠しに、彼女の腰の拳銃に眼を向けた。

意外と小振りなんだなあと思う。

辛抱強く待つていたおっちゃんも、ついにシビレを切らせていつた。「みんなが見てちや、喉を通らんわなあ。持つて帰つて食うかうん?」

そうではない。たつた今、腐りかけた人間の脚を見てきたばかりなのだ。むつとする嫌なにおいを嗅いだばかりなのだ。ゲが出そうになつたのを必死でこらえたばかり。チビたちと一緒にしてもらつては困る。

おっちゃんも色は黒いほうだと思つ。突きん棒漁師だつたじいちやんよりは黒くないけど。背はそう高くないけど、横幅があり、ハンマーのようなデコチンをして怖い顔だけど、笑うとやわしい顔になる。

それが頭を反らせて、自分より背の高い者でも見下ろすように見る。だから鼻が上向いて、柿の種のような鼻の穴が見える。鼻毛にシラガが混じつている。

「そうしなさい」と婦人警官もいつ。

やつと帰れると思つたら一チビたちはもつ解放されたのに——おっちゃんはまた同じ質問を始めた。

「何度もきいて悪いけど、君がそんケータイをカチャリと開けて見たんが?」

「八時二十八分」うんざりして答えた。

「うんそうか。それで、ややあつて船着場のほうを見た。けど、そんな時は、まだ、長靴はなかつたんだな?」

「はい」

「ところが九時前頃、ふと見ると、そこにカラスが一羽舞い下りていた。そのそばに黒いものがふたつ見えた。そのあと、ややあつて、またケータイを見た。それが——」

「九時三分」

「だから、そん、やや——を差し引くと、九時前頃になるといつわけか。つまり、八時半頃から九時頃の間に、何者かによつて、長靴が置かれたちゅうことになるな」

「はい」

「その間、君らは遊びに夢中で、なにも見てない」

「見てません」

交通安全教室の時は、ひょうきんな顔で、面白いことをいつぱい
いつて、みんなをグラグラ笑かしたのに、今は恐い眼をしている。
「その時カオルちゃんは？」

「向こうで塔のほうを見てたです」

「諏訪山の仏舎利塔だな。ふうん……」吉賀巡査部長はしばらく考
え込んでから「すると、品川老人、はいつ船着場にきたんだろうな
？」とつぶやいた。

「いくらなんでも、係長。老人が船着場にいたら、カラスは舞い下
りてきませんよね」吉賀巡査部長の横には、先ほど息を弾ませて帰
つてきた、ふたりの刑事が立っていた。そのうちの中年の小太り、
中津留刑事が口を出した。「石段からは眼と鼻の先、五メートルと
離れてませんからねえ」

「だな。どうか。そうすると、老人と遺棄者が遭遇した可能性
があるな」

「でも、あの通りの人ですからね。三、四歳児と話すほうがまだま
いですよ」もうひとりの、若い、大柄の伊東刑事がいつ。

「老人自身が遺棄した可能性はありませんか？」婦人警官の佐藤が
口をさしはさんだ。ブルーのシャツと、紺色のズボンという制服姿
が凜々しい。

「まさか」ジーパンの上に縦縞のシャツの裾をだらしなく垂らした
伊東刑事。

「足立君ちょっと、ケータイの時間を見せてくれんか」

足立少年は首から下げた子供用のケータイを開いて見せた。吉賀
巡査部長は自分の腕時計と、壁の時計とも見比べて、「時間は合っ
てるな」といった。

刑事は細かいところまで気を配るんだなと、足立少年は感心した。
「ナンもそうだ。『ナンならこいらでなにか気の利いたことをいつ

て、警部たちを驚かせるけど、なにも思いつかない。

「船着場に行く路地はひとつですよ」中年の中津留刑事がいう。

その路地と通じているのは、小学校からの路地か、それにトの字型に交わった中学校からの路地しかない。ほかからは行けません。防波堤の上を歩いて行けば別ですけど」

小学校からの路地がクラシックになつた先で、中学校からの路地が交わっており、それを過ぎて更に行つたどんづくに、小型船舶用の船着場があるのだった。

その路地の右側はずつと高い石壙で、まだ藩の重臣が住んでいるのではないかと思わせるような古い建物と、広い日本庭園がマキの木の茂みの中に隠れている。左側はブロック壙の民家と、菜園。

その船着場も昔はプライベート用だったのかも知れない。

「その手もあるか」と吉賀巡査部長がいう。

「でもその一方には足立君らがいた」中津留刑事がいつた。

「反対側は？」

「ずっと防波堤に沿つて民家がぎっしり並んでますからね。次の船着場からでないと、防波堤には上がれないですよ」と若い伊東刑事がいう。

その辺りには大小の船着場が幾つかあった。テトラポットではなく、幅五十センチ前後の防波堤には、フックが点々と打つてあるところもあり、小型船を舫えるようになつていた。

防波堤に密着した民家からは、満潮時なら釣りができるのではないか。部屋の中から夕飯のオカズが調達できたら便利だろう。足の指に釣り糸を巻きつけておいて、寝転がつてテレビでも観ながらーいや、実際そういう者が多いらしい。あの辺りは臼杵川と末広川が出合つところでもあるから、いろんな魚が釣れるらしい。ウナギも釣れる。

などと、三人の男連中が話をそらしているので、「だとすると、民家から目撃されているかも知れませんね」と、オボンを抱きしめた佐藤巡査が話しう元に戻すようさえぎつた。ミステリードラ

マの進行には欠かせない、お馴染みの、チョイ役のおねえさん約う。たう。

「それは連中の聞き込み情報待ちだな」といつて吉賀巡査部長は、ひとり置かれている足立少年を思い出して、「ところで、君が見たという不審人物だがな」と、ようやく肝心なことを訊いた。

さつきから同じ質問ばかりでつとぎりしていた足立少年は、これから自分がいかに捜査に役立つ証言をするか、ぜひとも婦人警官のおねえさんに見ていてもらいたいと思った。

まだそのシルシはなくても、彼ももう男の端くれだった。

その男は白っぽいつば広帽を被り、白いマスクと、上のほうだけ青いぼかしの入ったメガネで顔を覆い隠して、市役所裏の防波堤の内側に立っていた。

港町に住む足立少年は、兄がいる中学校野球部の練習を見るために、七時半ごろ家を出た。

いつもの公園下の歩道を通りて、警察署前の大好きな交差点を渡り、警察署から一本西の水路沿いの道路を——満潮だったので水路に入り込んだ魚を追いから——市役所の駐車場脇まできて、そこから駐車場内を通り抜けて、水路と防波堤どがぶつかる開口部までやつてきた。

開口部は防波堤の下に口を開けている。そこまできて、右手の防波堤下に佇む、その男と眼と眼が合つたのだと足立少年はいう。家からそこまで十分前後かかるとみて、七時四十分前後のこと。

男は比較的大きな濃い緑色のリュックを背負っていた。背は高く——子供目線であることを考慮にいれなければならないが——骨張つた感じで、腹なんか出ていないで、すらりと脚は長かった。着衣についてはカーキ色のジャケットと、同じ色のズボン——どうもサファリーハーフパンツに近いものと思われる。髪は黒で、短髪でないことだけは確かなようだ。

男との距離は対象物があるわけないからわからない。そう遠くではないらしい。一瞬時間が止まつたように、ふたりは見つめ合つたのだという。男は湾の方に体を向けたまま振り向いた様子で。

それからその男の姿を少年は見てない。野球部員の中学生も、見学していた女子中学生や、そこで遊んでいた小学生らも見かけてない。その界隈の聞き込みによつても、そんな不審人物は目撃されてなかつた。

ともあれ、初動捜査における第1号の不審者を提供してくれた足

立少年は、婦人警官の佐藤巡査によつてミーパトで家まで送り届けられた。

ところが家人は誰もいない。父親も母親も仕事で家を空けていた。佐藤巡査は少年に訊いて、新地のスーパーで働く母親のもとに少年を連れて行つた。

母親を呼び出して事情を説明し、少年を独りにしないように。母親は、佐藤巡査の顔を珍しそうに見つめてから、歯茎を出して笑い、「そげな心配いらんよう」といった。

「でもおかあさん、大変なものを見てしまつたんですよ」

「心配いらん、いらんぢや。犬猫ん死骸があると、じきじやあ、カラスより先に飛んで行つて、棒でつくじりまわして見るよつな子じやけん」と鷹揚に構えてい。

動物の死骸に興味を抱く年頃には違ひない。恐いもの見たさで少年らはよくそういうことをする。

「でも、人間の脚ですよ、おかあさん」佐藤巡査はあきれて、「精神的ケアが、きっと必要になつてきます」厳しい口調でいった。

母親は明のほうを見て、「ほな、叔母ちゃんのとこへいっちょりよ。おかあさんが迎えに行くまで、そこにおりよ」といつて、佐藤巡査のほうに向き直り、「近くで妹夫婦がパーマ屋をしてるんやわあ、そこに連れていっちょきますわ。これがいまだに子供ができる夫婦だから、こん子を、とおん可愛がつちよるんじ。

いんね、ウチの兄弟はみな子宝に恵まれてねえ、芋蔓をたぐるようになつて、グワラグワラ子沢山。旦那のほうに問題があるに決まるけん、はよ病院で診てもらいんさい、排卵があるうちに、はよせにやゆうて、しちくじゅういよんのじやけんどこれが」

「ですからおかあさん。心配なのは明君のほうです」凜々しい顔をした佐藤巡査は、小鼻を膨らませて声を強めていた。

明少年の肩に手を置いて、顔をのぞき込み、「なにかあつたらケータイに電話してね」といつて、少年のケータイに自分の番号を打ち込んで記憶させた。

姿勢を正し、「そういうことでしたら、自分はこれで署に戻りますけど、くれぐれも、当分の間、明君を独りにしないように願います」と、強く念を押して、去った。

その夜。

明は眠れなかつた。眼を瞑つむるのが恐かつたのだ。眼を瞑れば、途端にあの男の顔がマブタの裏に現れる。

首を捻じ曲げてこつちを見つめる怪人のような姿の男。つば広帽の下の青く曇つたメガネ。その奥で光つてゐる双眸。白いマスクが微妙に動き——“おまえ、見たな。生かしてはおけない”というのだ。

だから眼を閉じられない。だが、睡魔は襲つてくる。寝返りを打つたり、ほかのことを考えたりしながら——婦人警官のおねえさんの顔を思い出していると、少しばらつきが安らいだ。

岩の裂け目からチロチロと褐色の水が流れ出している。

それは幾筋にも分かれて、血管のようにわかれ、岩肌を這い、湯気に煙る池に流れ込んだ。

泡立つ血色の池に。

人間の足が浮いている！ 白い骨の見える人間の脚が！

振り向くと、つば広帽を被り、鼻までお湯に浸かつた青メガネの男が、バスタブの湯気の中からこつちを見て、嗤つてゐる！

うああつ！

明は跳ね起きた。いつの間にか眠つていたのだ。

あのなんともいえないイヤな臭いが鼻腔に充満している。吐き気がこみ上げて、吐きそうになる。

人が一生に一度も、まず嗅ぐことのない、人間の腐敗死臭。明は不幸にもそれを嗅いでしまつたのだ。それは鼻腔の粘膜と一緒になつて拭い去れない。

心の奥に押し込めていたそれらのことが、夢となつて溢れ出てきたのだった。

明は恐怖に震え、泣きしながら一段ベットから這い下りて——下段には中学生の兄が寝ている——子供部屋を出て階段を下りた。居間の隣が父母の部屋である。そこには三歳の妹を真ん中にして父母が寝ている筈だつた。どこでもいいからもぐり込もうと思つた。ところが幸運にも妹は母の後ろに寝ていた。父母の間に隙間があつた。少年は泣きながらカブトムシのメスのようにその隙間に頭からもぐり込んだ。

「なんね？ どうしたん？」母親が驚いて声をかけた。

少年は声を殺してうつ伏せに泣きじやくつた。声を張り上げて泣く年齢ではなかつたからだ。

父親も田覚めている風だつた。夕飯の時、母親から事情を聞いて、「そりや明日は大騒ぎになるぞ」といつた父親は、「はよ寝よ。バカたんが」といつて背中を向けてしまつた。

母親は自分のタオルケットを息子に掛けてやりながら、「なにが、おじい 惨い ことあるもんね」と艶を帶びた声でいつ。

それ以上の言葉はどちらからもなかつた。また、期待もできなかつた。タイミングが悪かつたのだ。

長距離貨物運転手の父親は、地場企業の調味料を積んで北海道までのひと航海を控えていたし、母親は五時にはその父親に食事をさせ、弁当を持たせて送り出さねばならない。ふたりとも熟睡が必要だつたし——その妙薬ともいえる行為を、今までに始めようとしていた矢先だったのである。

従つて明は、それだけの言葉から恐怖心を溶かし、安心と安眠の滋養をすくいとらねばならなかつた わずかな水分を求めてさまよう砂漠に棲むヘビのように。

しかし、有難いことに、ぬくもりと一緒に体から伝わつてくるものがあった。それは熱力学の法則のように、体の隅々にまでいきわたつた。

同じ大きさの頭が三つ並んで、それぞれにうごめいていたが、やがて三つとも、畠のスイカのように動かなくなつた。

果たせるかな、翌朝から、この県南の閑静な城下町は、降つて湧いたような獵奇的事件の幕開けに、西郷軍が攻め寄せてきた明治以来の大騒ぎとなつた。

城址公園を扇の要に、古い寺社や、歴史的建造物や、由緒ある屋敷や蔵や、城下町特有の迷路になつた家並みが、褪せた藁を連ねる街に、騒々しいサイレンの音が鳴り響いた。

国道・県道・市道の要所・要所には、パトカーと白バイが見え隠れしていた。市街にはやたら警官が目立つた。ふたつある駅には私服が鋭い眼を光らせていた。フェリー乗り場もそうだつた。

警察署の出入りは激しく、警察署がある臼杵から祇園地区にかけては、社旗を振るわせたマスクミ車が走りまわり、警察の聞き込み部隊のあとから、現場付近の住人にコメント取りに歩く記者たちの姿が方々で見られた。

現場に通じる唯一の路地は、大分県警の黄色いテープで規制、封鎖されていて、警官がひとりつくねんと立つていた。テレビ局の力メラマンは、そこから野次馬の頭越しに、青いテントで覆われた船着場を撮影している。

気の利いたテレビ局は漁船をチャーターして、海から迫つてはし、対岸の昭和地区の岸壁から望遠レンズで安上がりに済ませている局もあつた。さすが全国紙はヘリを飛ばして、空から現場を撮影している様子。

無論、警察署に張り付いている組もいて、署長の記者会見を今か今かと待ち構えいた。

臼杵警察署では、刑事生活安全課も交通地域課もない、非番の者も緊急招集されて、総出で事件対応に当たつていた。

午後になつて、ようやく下川署長の記者会見があり、詳しい事件

の概要が述べられた。

「遺棄された脚にあつては、膝頭から下左右一脚、ゴム長靴の中から発見された。生前に切断されたものであり」――で記者団はどうめいた。「中年男性のものと推定される。推定身長は一七〇センチ前後。肥満度はマイナス二〇パーセント前後。外傷は見られない。動脈硬化がかなり進んでいて、爪水虫あり。やや〇脚氣味に歩き、筋肉の具合から、肉体労働者ではなく、ホワイトカラー、もしくは、ブルーカラーでも比較的軽度な作業員または管理職員が想定される。足のサイズは25・0センチ。体毛は一一剃っているが、薄いほうである」

と、検死官の所見が披露されたところで、記者の質問に遮られた。

「足の毛を？ それは、本人ですか？ それとも遺棄者が？」

「たぶん、遺棄者　いや、解体者だろうね。本人だと、ああも完璧には剃れないだろうということだ。どこかに剃り残しができる筈だというんだ。断定はできないがね」

「だとすると、それは解体者の趣味ということになりますかね」

「さあ、どういう意図があるのか……もともと変質者の仕業だろうから」

「死因は？」ほかの記者からの質問。「いや、まだ生きている可能性もあるんですね」

「ガイシャがすでに死亡していると仮定した場合、死因特定には、頭部がないとね。脳がないと、病死なのか傷害致死なのかわからぬいのだそうだ。死亡時刻の推定もむずかしい。ドライアイスかなにかで冷やされていた形跡があり、死後だいぶたつてるようだけど。少なくとも、ここ一週間以内でないことは確からしい。くわしくは大学での司法解剖待ち。

「断つておくが、ガイシャはまだ生きているということを前提に捜査する。諸君らもそのつもりで報道するように。あとで面倒になくなつてもよいという覚悟があれば別だけど」

「ほかに身元を特定できそうな遺留物はないんですか？」ゴム長靴

からは？」

「ないね。ちなみにゴム長だが、中国製の合成ゴム製品で、色は黒。一九九〇年代から出まわっている。用途は、建設業・農業・薬品製造業・メック塗装業などの作業用。かなり褪色たいしょくし、硬化もしているから、新しいものではない。寸法は27・0センチ。丈が40・0センチ」

「切断は？」前出の記者がまた質問 地元新聞臼杵支局の記者だつた。「切断に使用された刃物はどんなものだと？」

「鋭利な刃物と、ノコギリだね。ノコギリは刃の細かい、金切りノコのようなもの」

「身元確認のための捜査は、ほかにどのようなことがなされているんですか？」別口が質問した。

署長は喉が渴いたのか、用意されてあつたコップの水を飲んでひと息入れた。でっぷり太つて貫禄はあるが、要觀察と 要治療の生活習慣病を幾つも抱えて、肩で息をしている。

隣には刑事課長が同席。課長の山崎警部はよつやく発言の機会を得た。

「病院をあたっています。死亡診断書を書くのは医者ですからね。それから遺体を受け取る葬儀屋。死亡届けを受け取り、代わりに火葬許可証を発行する市町村役場。最終的には葬祭場ですな。両脚のない遺体の火葬がなかつたかどうか。管内だけではなく、他の市町村を管轄する署の協力も得ているから、この方面はおつつけはつきりするでしょう。あくまでもガイシャは生存しているという前提においてだけどね」記者団から失笑が漏れた。「一方では、情報による——最近急に姿が見えなくなつたり、連絡がとれない、居所がわからぬなど、これはみなさん方からも呼びかけていただきたいのだが——所在不明者との照合だね。血液型など、条件が合致した者の捜索を行う。一ヶ月以内という制限付きでも、問い合わせは結構多い。これはヒマがかかりそうだ」

山崎警部が口を滑らせその上で、下川署長はあわてて記者会見

を打ち切ろうとした。

「まあ、今日のところは、こんなところだな」

「ちょっと待つてください。肝心なことをまだつかがつていません」と地元新聞の森本記者が食い下がる。

「第一発見者は誰なんですか?」

「それはいえない。その子に危害が及ぶ恐れがある」と署長のまつが口を滑らせた。

「その一一子ですか?」

山崎警部は苦々しい顔をした

交通係係長の吉賀虎子^{ヒコ}巡査部長と、部下の佐藤メグミ^{サトウメグミ}巡査も、初動捜査からそのまま捜査本部に編入されて捜査に加わることになった。

吉賀巡査部長はベテラン刑事でもあったので当然だとしても、まだ警官になつて三年と経たない新米で、刑事試験も受けてない佐藤巡査は、人手が足りないことによる大抜擢であった。

本人は刑事に憧れて警察官になつたようなものだから、それはもう大喜び。そのまま口煩い親父とのコンビだけど、加齢臭も全然ノープレブラム。この際手柄を立てて、上にアピールする絶好のチャンスだと、心躍させていた。

しかし『えられた任務は、ムダに靴をすり減らして、ムダな汗をかき、あらゆる方面に手を尽くしたといついわけのためのような、業務成績を上げるチャンスからはほど遠い、しょうもない仕事。応援だから致し方ないとはいえ。

管内の病院を隈なくまわり、医師や看護師らに、両足のない患者はいなかつたか、湯灌^{ゆかん}の時、脚のない遺体はなかつたかどうかなんて、バカな質問をして、「ええ、勿論、脚のない患者さんはいませんでしたよーー？」足の爪を切りましたから、足のない遺体も」とバカにされた眼で見られる。

四軒ある葬儀屋にも同じ間抜けな質問をして、「そりゃあ刑事さん、旅支度^{たびじたく}の足袋^{たび}を穿かせますからね。納棺の際にも、遺族の方々に頭も脚も抱えてもらいますから、はつきりしていますよ。何年も前に遡つてもしかりです。足がなくて、どうやって足袋を穿かせるんです？」と、冷笑される。

そして今度は葬祭場である。制服姿の佐藤巡査が運転するミニパトで、同じバカな質問をしに臼津^{きゅうづ}葬祭場に向かっているのであった。臼杵市及び津久見市内での 病死・事故死・変死 遺体は、すべ

てそこで荼毘に付されることになつてゐる。法律に基づいた手続きはそこで完了するのである。

従つて、ここ一年間 長めにみて の「死亡診断書」及び「死体検案書」と死者の員数、「火葬許可証」の交付数と「火葬證明証」これは火葬場が交付、これが「死体埋葬許可証」となる の数が一致しておれば、そしてそれぞれのプロセスにおいて、脚の紛失事故がないとなれば、彼らの任務は完了する。

「火葬場でもなにもなかつたら……」と、はりきつていた佐藤巡査も、さすがに氣落ちした声でいう。臼津トンネル内の淡い光の中で、彼女の顔が青みを帶びて見える。

「……まあな」

氣の毒なことに、刑事志望の夢を抱く乙女は 昨日の大雨で溜まつたばかりの池で釣りをしていることにも気付かず、可愛い小鼻を膨らませ、眼を輝かしていたのだ。

大分商業高校を卒業して銀行勤めをしていたのが、ある日漫然とサスペンスドラマを観ていて、女刑事のあまりのカッコよさに、デンキクラゲにでも刺されたような衝撃を受けたのだ。

発作的に辞表を職長に叩きつけて、半年浪人してまで刑事に憧れてこの世界に入ってきたほどの入れ込みようなのだ。

佐藤巡査には半分黒人の血が混じっている。

なので 肌の色は幾分薄まつてはいるけど 外見は限りなく黒人ぽい。だけど、日本語しか喋れないし、あらゆる面で日本人的である。少し話すと、すぐに違和感がなくなる。

なぜなら、日本人の祖父母に育てられ、厳しく躾けられたからである、イジメられたり、疎外されたりしないように、色が黒いだけの日本人に成りすませるために、それはそれは手塩にかけて育てられた。

なので彼女は自分に黒人の血が流れているなど、夢にも思わなかつた。どうして肌の色がほかとちがつて 日焼け色でなく 薄青墨色をしているのだろうという素朴な疑問は抱いていたものの。

そのため、「インド人の黒んぼ」と呼ばれて そういう遊びがあつた、本当はダルマサンガコロンダというのだけれど イジメられたけど、並外れた身体能力と、彼らが手袋をした手より大きい手を武器にして、年上の男の子にも負けてはいなかつた。

外国人が流暢な日本語を話すと、それだけで吉賀などは親しみを覚える。なにかと面倒を見ているうち、隔意なくなんでも話せる仲になつていた。佐藤も人懐っこい性格で、同じ婦警の吉賀の次女ともたちまち仲良しになつた。

佐藤巡査の父親はヒスピニック系アメリカ人。いきなり佐伯市蒲江の漁村に現れて、片言の日本語で「アメリカから亡命してきました。××さんと結婚したい」と、素朴な漁人に迫つたのである。

無論、陽気な彼ら一流のこんなジョークが日本人に通じるわけがない。「きっと脱走兵か、お尋ね者か、宣教師崩れか、マフィアに追われている者に相違ない」と、家族をあげて反対。

ところが世間知らずの娘はその気になつていた。知り合つたのは勤めていた佐伯市内のデンタルビデオ店。家族の心配をよそに、その近くにアパートを借りて同棲生活に入つてしまつたのだ。

その結果、娘は身ごもる。

それを恥じらいながら彼に打ち明けたとたんに、アメリカ人は影响力のように墨を吐いて、第三国に亡命して行つてしまつたのである。その時はもう墮胎の時期を過ぎていた。初めてのことだし、肥満のゆえに気付くのが遅かつた。

大きな腹を抱えて十九歳の娘は途方に暮れる。

そして生まれたのが佐藤メグミであった。

よくあるバカな女の話には違ひないが、そんな父母のことを他人にあつけらかんと話す。

黒人を生んでしまつた母親は、ショックで放心、海に身を投げてしまつたといふのだ。「そんなことあるかい！」と吉賀は声を荒げたものだ。

なろうことなら抱きしめてやりたいほどブルーズな話なのに、彼

女にかかるたら、軽いノリの、ヒップホップ。

これが新人類というやつだらうかと、吉賀は自分の娘を見ながら思つたものである。こいつは食い意地が張つてゐるだけのやつ、いつこも進化してない。

吉賀巡查部長はもう新たな可能性について考えをめぐらせていました。バカバカしい作業は今日でおしまい。

あの屁こき虫 山崎警部のこと と糞転がし 柳井警部補、彼の上司 らの思うようにはさせない。この俺様を使い走りにしやがつてーーと舌打ちした。

長いトンネルを抜けると、そこは雪国ではなく、いきなり雄大な石灰岩の山が現れる。

異邦人は息を呑み、エジプトの古代遺跡が眼前に立ち現れたかのような錯覚を覚える。

見慣れている吉賀でさえ、見るたびに気持ちが昂り、晴れ晴れした心持になる。

それを見ながら少し下ったところでコーラタウンして戻り、トンネルの手前で左に折れて、山の斜面をくねくね上つてゆく。

左手は青江ダムがある深い谷。

その向こうに、むき出しの切り立つた白い石灰岩の山肌が、圧倒的な存在感で、青空をバックに日の光りを受けて遺跡のようにきらめいているのだ。ピラミッドはもとより、万里の長城も、石灰石による建造物ではなかつたか。

吉賀が子供のころからすると、石灰岩の山は随分小さくなつたが、それでもまだ百年は尽きないといふ。切り出された石灰石は、巨大な管の中をベルトコンベアで海岸のセメント工場などに運ばれる。

そして、そこらに点在する工場で精製処理された石灰石は、大分の臨海コンビナートに、特殊ダンプでピストン輸送されている。石灰石は製鉄には欠かせないアイテムである。鉄鉱石・コークスから不純物を取り除くために。

佐藤巡査の伯母はセメント工場で働いているというし、吉賀の長

男は製鉄所の厚板工場で働いている。

石油・石炭と同じく、石灰石 炭酸カルシューム もまた太古の動植物の遺骸がもたらした尊い遺産である。その恩恵は計り知れない。

なのに、人類は、その遺産を消費するばかりで、自らの人体エネルギーを後世紀のために蓄積・循環させることなく、熱エネルギーに変換して、地球温暖化に拍車をかけている。バクテリアや、ウジムシに、ひもじい思いをさせているのである。

そんなバカなことを考えていて、思いもつかなかつたある考へが、微弱電気を起こし、老化した脳をかけめぐつて、その一部に、熱を帯びさせた。

おりしも山道は緑葉に覆われて涼やかであった。吉賀は車の窓を半分開けた。熱気と一緒に気持ちよい風が入る。

親父臭が気になつてもいたのだ。小便の切れが悪いし……皮膚の毛穴からも加齢臭が漏れ出ているというし——情けないことに、ビニール袋に入つた生ゴミとたいして変わらない存在に成り果てる。

そこへいくと若い女の匂いはいい。若葉の匂いがする。森林の匂いと一緒だ。癒される。

「……これが終わつたら、あたしどうなるんです？ ルーチンワークに戻るんですか」 いい匂いがきく。

「いいや、そうはならない。おまえさんは、明日から私服を着て、覆面車で、わしと行動を共にすることになる」

「えー。本當ですか！」 佐藤巡査はうれしそうな声を上げた。「やつたあ！」

「頼りにしてまっせ、相棒！」

ミニパトは勢いよく急坂を上りつめて、タイヤをきしませながら葬祭場の駐車場に入る。

車がいっぱい停まつてゐるところをみると、火葬が幾組があるの

だろつ。煙突からは煙が出ているし、待合室に喪服を着た黒い人影がうごめいていた。

さすがに風が通る高いところにあるせいかーー以前は臼杵の柳原交差点下の谷間にあつた一人が焼ける酸ぽいにおいが鼻を突くことはない。

ここには何度も足を運んでいる。この歳になると、まわりがバタバタ死んで逝く。つい一ヶ月ばかり前にも、嫁の兄弟氏がここで荼毘にふされたばかりだ。

だからもう係員にたずねるまでもなく、火葬現場の内容はわかっている。わかつてているのだが、富使えの悲しさ、報告書を書くために、形通りのバカな質問をしなければならない。

「順番待ちの時、棺は？」事務所の中で、ふたりの係員に向かって、吉賀がきく。

「炉が塞がっている時は、控えの間に。炉は三つありますけん、まづそういうことはないですけど」顔馴染みの、年配のほうが答える。頭蓋骨が透けて見えそうな透明感のある顔。

「何分か、何十分か、何時間が、控えの間に、棺だけ放置されることは、あり得るんだね？」

「それは炉が塞がつてなくても、何分何十分単位ならあります」係員は怪訝な顔で吉賀を見る。「それがなにか？」

「いや、いいんだ」その間にシコシコ遺体の脚を切りとるやつがいなかつたかどうかなんてきけたものではない。「部屋に鍵は？」

「カギはかけてません」

「じゃあ、誰でも、誰にも気付かれずに、その部屋に出入りすることは、不可能ではないわけだ」

「ええ……まあ」いよいよ、不審な顔をしてくる。

「あんたら、棺桶の中の遺体を見たりすることはあるのかね？」もうひとりの初めて見る顔。若いほうを見てくる。こつちはのっぺりした顔の実直そうな青年。髪も染めてない。「近頃じや棺に止めクギは打たない」

「そ、そげなこと!」青年は憤慨したような声を上げた。なにか勘違いしているようだ。ご法度の副葬品が入れ込まれてないか点検するのかどうかただしたのに、くすねるとでも、とったか。「さ、最期のお別れに、棺の窓を開けて遺族に見せるだけですよ。ねえコキさん」

「の間、佐藤巡査はせつせと手帳にメモっている。鼻の頭に汗の玉を浮かべて。

再び吉賀は、年配係員のほうを向いて、きいた。

「ところで、仮に両足のない遺体を荼毘に付した場合、お骨拾いの時、どうだね? 質問の意味はわかるね」

「わかります。事件のことですね。そりやあ、わかりますよ、刑事さん。脚の骨があるか、ないかぐらいい」

バカな質問だつた。

バカついでに、「素人にも?」と、愚問を重ねた。

うんざりしたように年配係員は腕時計を見て、「もうあと二十分もすれば、一号炉が焼き上りますけん。見ていくますか?」といつた。

「いや、いい」と吉賀は恥じて、照れ隠しにどうでもいい質問をした。「いろんな珍しいものが焼け残るんじゃないのかい。家の母女はあじょの時は、膝の人工関節が出てきた。野球のボールよりちょっと小さめの金属製の半円球なんが。大腿骨の一部も焼け残つていて、骨にボルトがさしてあるんだ。あんたら磁石で金属類を探しているね」「もうクギ類はないんですけどね。確かに信じられないものが出でますよ。三十センチくらいの長さのハリガネがあつた。ちょうど腹部の辺りに。金属類はご法度ですけん、副葬品ではない。体から出てきたのは間違いないですよ」

「ほう」

「ハサミが出てきたと、きいたこともあります。小さい鼻毛カット用くらいのハサミ」

「あまり変なのが出たら、我々に報告してもらいたいね。

お宝

は？」

「金歯なんかは、昔はあったけど、今はもうないですね。指輪も。お守りの中にはそりガラス製品や、やうじつものが入れ込んであることがありますたけど」

「まだ生きているうちから、金歯を抜こうかどうか相談している輩がいたりして。金田のものは遺族が剥ぎ取ってるんだひうねえ不景氣だから」

「ははは」とガイコツが嗤うように年配係員は笑った。

「ところで、あんた方は、七月一十六日の午前八時半から九時の間はなにしてたかな？」

「なんですかーそれ？『ぼくらを疑つてるんですか！』若いほうがまた憤慨した。どうも一々過剰反応するやつだ。

「いやなに、これは我々の常套句。気にせんでくれ
わたしは勤務中でした。調べてもうれば」

「君は？」

「ぼくは有給休暇でしたから、アパートにいましたよ
「なにしてた？ 有給とつてまで」

「CD聴きながら、寝転んでましたよ。悪いですか」

「悪かない。悪かないーーけど、テレビかラジオのほうがよかつたかな。それを証明する者は？」

「いませんよ。窓辺の小屋根の上に野良猫が一匹いただけで」

「その野良猫はしゃべれんのかね」

ふふふつと、佐藤巡査は思い出し笑いをして、いった。「係長さんて、ほんと、怖い人なんだか、クソ真面目なんだか、お調子者なんだか……」

ミーパトは帰途についていた。今度は西田に輝く石灰岩の山を右手に見ながらの、下り坂である。

「気に入ってくれたかい。なあに、いついかなる時にも、ほんのちよつとの、心の余裕を持つように心掛けている」と吉賀は咄嗟に出

たジョークに満足しながらいう。「なかなかそうはいかないけどな」
ジョークは気持ちのゆとりの現れである。またゆとりをもたらす
ものもある。洒落たジョーク操るアメリカ人は、経済的にも余
裕があると一々たとえ賭博で儲けた金であっても一一独り占めしな
いで、その一部を奨学金や恵まれない者への施しとして、しかるべき
機関に寄付しようとする心の余裕を持つている。

あの文化は見習わなきやと吉賀虎子は思つてゐる。余つた爆弾を
やたらばら撒く悪い癖もあるけど。

日本人では中曾根元首相の「日本列島不沈空母発言」は秀逸なジ
ョークだった。同盟国宰相の頼もしい洒落たジョークに、レーガン
大統領及び 日本を属国のように思つてゐる アメリカ国民を大い
に喜ばせて、株を上げた。

ついでに本場のアメリカン・ジョークのひとつでも披露しようか
と、レーガン大統領の爆裂ジョークを思い浮かべたが、やめた。あ
の時以来、佐藤メグミの前では「アメリカ」は禁句にしていた。
あれで吹っ切れたのかと思っていたが、カーラジオからジャズな
んかが流れてくると、唇を引き結んで、遠くを見るような眼差しで、
黙りこくつてしまつ。ヒスピニックの陽気さは消え、らしからぬ、
物静かで、耐え忍ぶ女の表情が、その顔に張り付いていた。

その辺はまだまだナーバスなようだ。

「事情聴取の時は相手の眼を見るんだ」吉賀はいった。「メモは頭
の中に書く」

佐藤巡査は、今は石灰岩より輝いている顔を吉賀に向けた。古き
よき時代の女優のような濃い眉を片方上げて。

「復習もしない成績の悪いやつほど、熱心に黒板の字を一語も漏ら
さず書き写そうとする、消されないうちに。成績のいいやつは、涼
しい顔で教師の話に耳を傾けながら、それを頭の中に書いている」
吉賀は先の口だった。まかれた工サに群がつて、ひたすら頭を上
下する二ワトリの組だった。

教材用のテキストを、そつくり黒板に書き移して教えたつもりで

いる教師と、それをまた「丁寧」にノートに書き写して覚えた氣でいる生徒　　という滑稽な構図が見えてきたのは、大人になってから。この世界に入つてからといつてもいい。

最高の教育を受けて、頭がいいと自他ともに認める連中が——確かに並外れた記憶力と理解力を備えて君臨しているが——猿よりも知恵がない。そんなキャラリアや準キャラリをうんざりするほど見ていた。自分は頭がいい——とうねぼれているから始末が悪い　たまたま主要領がよかつただけなのに。

佐藤巡査は小鼻を膨らませて、「どういう意味ですか」といった。「いいか、佐藤。相手の表情、眉目、顔面筋の動き、小皺一本の動きも見逃すな。それから手だ。内心の動搖はきつとそれらの動きとなつて外面に表れる」

また講釈が始まったかと、佐藤巡査は頭を横に小さく振った。年寄りは理屈つぽくて嫌だ　いう通り、彼女も先の口だった。だが、それは親父のヒガミというものだわ。どうしようもなく、頭のいい者はいるのだ。

「これは動物も同じだ。ストレスを受けると、猿は頭や脇の下を搔き、猫は寝た振りをする　尾っぽの先を持ち上げて、微妙に動かしながら。犬は——犬は口からケツの穴を通して向こうが見えるくらい単純なやつだから、思つたことは全身で表わしてしまつ

(　もう!　)

「人間様はだな。ウソをつく時は、下手な役者のように所作がぎこちなくなる。手を動かすにも、意識して動かす。猿と同じだ。あつちこつち、触る。搔く。顔は心と反対の動きをしようとする。目玉は動いてあたりまえなのに、あえて動かさないようにする。それも変だと思えば大袈裟な言動で誤魔化そうとする。ひつた張本人が屁をあげつらうように」

「わかりました。今度からそうします」

「相手にプレッシャーをかける意味もある」

「はい。　で、係長はあの人たちから、なにを読み取つたんです

か？ アリバイまできいて」

「うん。あの年寄りのぼうは——あれはもう二十年以上も前から見かける顔だ。歳はわしとあまり変わらんだろう。あの男が急に思い立つて、遺体の脚をちょん切り、仏舎利塔に供えたとは思えん」「アリバイも主張していますしね」

「アリバイは崩すものだぞ、佐藤。ミステリー作家と計画的犯罪者は、まずアリバイから先に立てる」

「はい。はい」

「あの若いぼうだ。去年転職してきたといつたな。あいつはなにか後ろめたいことを隠している」

「そうは見えなかつたですけど……真面目そうでしたよ」

「変質者だからといって、特別な顔をしているわけじゃない。若い女性を四年間に三十人以上も犯して殺し、死体も犯して切り刻み、切り取つた頭部も口を変えて犯した、あのテッド・バンディーなんか、警察を手玉にとるほど頭がよく、見てくれも知的でハンサム、口も巧い、女にモテルタイプの青年だった」

「いやーっ」佐藤巡査は顔をしかめて、吉賀巡査部長がそのテッドであるかのように、体をよけた。その拍子に車もふらつく。「ちょっとやめてください！ 気色悪い！」

「あははは。こりやあ、例示が少々ござつかつたな。そんなのはまだ可愛いほうなんだが。アメリーいや。だからといって、あの係員から変質者の二オイを嗅ぎ取つたわけじゃない。なにか後ろめたいことを隠しているような気がするだけだ」

「でも、一般の人間だつて、いつてたように、遺族に混じつて部屋に出入りできただんでしょう？ 火葬が一組以上あれば、もつ誰がどちらの遺族かもわからないから、怪しまれない」

「それだと、お骨拾いの際に、係員がすぐに気付くぞ。そういうつただろう」「ううう」

「ああ、そうかあ……」

「係員なら、遺族を呼ぶ前に、ほかの骨で適当に誤魔化せる。おま

けに、遺体が控え室にどれくらいの時間放置されているかも——いやいや、その時間さえ意のまま。鍵をかけて、誰も入つてこれないようにもできる。なにを持ち込み、なにを持ち出すか、疑う者はいない

「なるほど。読みが深いんですねえ」

「現実味は薄いが、可能性が少しでもある限り、それを追求するん

が、わしらの仕事」

「こんな場合のことを、いつてたんですか」

「いや、いや。これは別。思つてもみんかつたこと。あれやこれと、れど、忙しくなるだ

「まかしといてください。ボス！」

彼らが捜査本部に帰還したのは五時過ぎだった。

山崎警部と柳井警部補が顔を突き合わせて話し込んでいた。ほかにはパソコンに向かっている事務職の女性がひとりと、遊軍がひとりいるだけ。

正面の長机の一角に山崎警部が座つてあり、柳井警部補は、その前に椅子を持ってきて、背もたれを抱くように座つていた。

女性職員は側面の長机でパソコンを操作している。遊軍の刑事がその横に立つて、プリンターから出てくる書類を手に取つて見ている。

彼らの背後には白いボードがあり、その白いボードには、現場写真やなんかがベタベタ貼つてあって、「ゴチャゴチャ不審人物名やら不審車両名やらが書き込まれている。それにバツテンやら線引きによる消し込みやらがなされていた。

苦戦しているのが一目でわかる。遺棄遺体の身元がわからないうちは、事件の構図さえ見えてこない。

不審人物で生き残っているのは、足立明君が目撃した人物と、小学校の校庭で遊んでいた小学生らが見たという白衣を着た男だけになつてている。品川薫老人は早々に名前の上にバツテンがつけられたいた。

彼のリュックの中味は、彼のお宝の黄色いヘルメット 安全帽であった。造船所に勤めていた頃のものだが、彼にとつてそれは天皇陛下から拝領の、命より大事な鉄カブトだった。リュックにゴム長が入るほどのキャパはなかつた。

それでも線引きで消されてないところをみると、まだわずかな疑いが残されているのだろうか。脚が入ったゴム長を両方に抱えて、天使のような笑みを振りまきながら歩いているカオルちゃんの姿を佐藤巡査は思い描いてみる。

(バカバカしい)と思つ。

足立少年の描いた不審人物像は公開されたけど、それについての目撃情報は皆無だった。

捜査会議では、少年のウソか、マコトかで、白熱の論議を呼んだ。マコトなら、該当者が名乗り出ないといつのはおかしい。それが遺棄者である可能性が出てくる。

しかし、そこで少年を疑えば、ゴム長靴が置かれた時刻も疑われてくる。彼しか証言者はいないのだ。それは早朝からすでにそこに置かれてあつたのかも知れない。夜半から。

だつたら住宅地なのに目撃者がないのもうなづける。午前八時半から九時に至る時間帯に、住民の誰にも見かけられなかつたといふのは、ちょっと考えにくい。

そのほうが理に適つてゐる。危険を冒してまで日中の人人が動く時刻に遺棄する理由があれば別だけど。そんな危険を冒す必要がどこにある?。

「のや、おまえらもそう思つだろ?」と、署長が論議に駄目を押した。大勢がうなずく。

これに対して後方から、「足立君が、ありもしないウソをいうとは思えません」といった者がいる。「田代といカラスが、そんな時刻までご馳走を放つておくでしょ?」

今いつたのは誰か? というような顔で、署長はゾウガメのように首を伸ばした。捜査員らも後ろを振り向いた。

そこには署長と同じ青空のようなシャツを着た佐藤巡査がいた。佐藤は立ち上がった。

「あの時刻は、ちょうどエアポケットのようになつていたのではないでしょ? 今は共稼ぎが多いですから。大人はみな勤めに出払つてしまつて、老人と子供だけになつていた」

「君は?」

「交通係の佐藤メグミです」

「それはわかつてゐる。君らは街の警戒にあたつてなきゃならんは

「すだぞ。どうしてここにいる」

署長に睨まれて、佐藤メグミは粘土のように光沢を失った顔で、立ち尽くした。恐れ多くも、署長様に反対意見を述べてしまつた一ばかりか、捜査員の大半を敵にまわしたようなもの。

「自分が呼んだんです」吉賀捜査部長が中ほどの席から弁護の声を上げた。「自分が免停中なのは署長もご存知でしょう。運転手がいるんです。相棒ですから、いろんなことがわかつていたほうがよいと思ってですな」

「トライちゃんか。そうだな。あんたはもうP-Jの運転はせんぼうがいい。あんたが事故を起こす度に、わしの寿命は一年は縮まる。道端の地蔵様を突き倒すくらいですんでいるうちばいいが——」

「ここでドツとみんなが笑う。吉賀は、プライベートでも、バツクしていく前隣の家の門柱を押し倒しているのだ。本人は娘の車のオートマのせいにしているが。

「そうか。いい運転手を見つけたようだな」署長はペットボトルの深層水をあおつてから、「続けなさい」と佐藤にいった。

「ですから、遺棄者は老人と子供に警戒されない人物ではないかと思います。わたしたちは、不審な人物を見なかつたかどうかきいたわけですから。普段見慣れた人物なら。いいえ、尊敬、信頼されるような職業の人物でも——たとえば教師、医者、我々警察官」「おいおい穏やかじゃないな」

「ほかにもいっぱいあります。市の職員だつてそうです。郵便局員や銀行員、スーパー店員……」

「土地勘があることから、見慣れた人物というのは、いえてるなあ……」署長は感心した様子だ。「リュックは——リュックを背負つた人物、ということで聞き込みをしたんじゃないのか

「リュックはもうよして、目立たないほかのものにしたかも知れません。身なりも普段通りに」

「遺棄者は身元を隠すための扮装を凝らしていた。けど、少年に見られてしまった。遺棄しようとしていた矢先かも知れない。だから

車に戻つて、^{装い}を変えたということだな」「吉賀が佐藤を援護した。

「素面をさらけ出してか。普段のなりで」少年の証言が事実だとすると、そういう考え方成り立つには成り立つ。「ふーむ」署長は腕を組み、今思い出してもおかしいくらい、みんなも佐藤メグミの推理に考え込んだ。

しかし、「ひとつ間違えば重罪で監獄ゆきだぞ」と山崎警部はつぶやき、捜査主任の柳井警部補は「あり得ん!」といった。だが臆面もなく、佐藤メグミはなおも続けた。

「それになにも、どうしてもその日に遺棄する必要もなかつたんじやないかしら。誰かに出会つたらやめればいい。本当は足立君に目撃された時点でそう思つたかも知れない。でも、目的がつまらないことで頓挫した時つて、悔しいじやないですかあ」

みんな啞然としていた。吉賀は（それはどうかな?）と思つ。「でも、運よく誰とも行き会わず、見かけられもせず、現場までやつてきた。そして遺棄した。わたし、あの時間帯に、三度小学校前から実験して、三度成功しました。遺棄できたんです。

ところが帰りはそうはいきませんでした。帰りには小学生の女の子ふたり組に見られてしましました。観光客にも。あの近くには、成城から移転した野上八重子の家がありますよね。『海神丸』を書いた文豪の家を見ようと、ときたま観光客がやつてくるようです。二度目の時には、帰りに品川老人とクランクのところで出くわしてしまいました。家族にきいたら、いつときひかえていた散歩をまた始めたんだそうです。

もしかして品川老人は、遺棄者と出くわしているかも知れません。素顔を見ているかも知れません。最初はゲーム感覚で始めたことであつても、遺棄してしまつてからは、もうそういうわけにはいきません」

素人の大胆な推理が ゲーム世代ならではの 手詰まりだった検査に新たな方向性を与えた。

早速その方向から聞き込みのやり直しがなされた。

もう一度品川老人にもアタックした。足立少年が描いた絵を品川老人に見せて反応を見たのである。老人は奥まったところから、トビ色の円らな瞳でじつと見入っていたが、フクロウのように小首をコクンと傾げた。

それをどう解釈したらよいのか、遺棄者が装いを変えていたと取るべきか、全くそんなものは見てないと取るべきか。悩ましいところであった。

あらたな聞き込みの効果はそれなりにあった。

三人の不審人物が浮かんだ。

うちひとりは、その界隈に住んでいる一三才のプレー太郎。その日も同時刻頃そのあたりをうろついていた。けど、これはすぐに嫌疑が晴れた。

もうひとりは、これはとんだトバツチリを受けて、下着泥棒が御用となつた。三十七歳のシロアリ駆除業者の営業マンで、社名の入った軽四を小学校グランド脇に駐車して、同じ日の同じ時間帯に、仕事と趣味を兼ねてその界隈を物色して歩いていた。

それを近くの住人が覚えていた。捜査員が大分市南津留の会社を訪れてご当人に職務質問した。拳動不審が見て取れたので、そのまま住居のアパートに案内させ、部屋に踏み込むと、押入れの中は女性の下着の山だった。

三人目はまだ確認がとれてないけど、薬剤師のような白衣姿の長身の男でメガネもマスクもしていないけど、長髪に隠れて顔はよく見えなかつたと、校庭にいた小学生らはいつ。

白い普通車でやってきて——小学生らの目撃証言なので、車種や排気量はわからない——広いほうの道路に駐車したことだけは確かなようだけど、それからどうなつたかわからないという。時間もあやふやだ。

帰還した吉賀と佐藤巡查を見て、「お疲れ！」と山崎警部が声を

かけた。柳井警部補はニヤニヤしている。彼がさいわいなのは、自分の後頭部が見えないことだ。もじやもじや頭のそこだけ、崖崩れのように大幅に禿げている。

それが彼のビジュアル的価値と品性を著しく下げていたが、本人がまだ女に充分モテルと思つていてるのに、端からとやかくいう筋合のものではないから、みんな見て見ぬふりをしている。

山崎警部のほうは苦笑走つたいい顔をしている。欲をいえば、もうひとまわり顔面が小さければ、それはもう申し分ないのだが。なしろ顔がデカイ。だから声も太く大きい。

人のことはいえない吉賀は、山崎警部の前に行き、「一応、帳尻は合いました。あとで報告書で」という。

「ご苦労でした」と柔軟な顔で手を揉みながら警部は労をねぎらう。口を開いて歯の噛み合わせを見せるのは彼の癖であり、他意はない。それと手揉みはセットになつている。

「それじゃあ、ゴム長のほうの応援を願いましょうか」と柳井警部補は吉賀を見ないでいう。「ねえ、課長」

吉賀は山崎警部が口を開く前に憮然としていた。「きいてなかつたのか。一応」といったぞ」

佐藤メグミは、柳井警部補の後頭部にポツカリ開いた、アワビのような形をした地肌が赤く染まるのを見た。

「というと?」ムツとした顔を吉賀巡查部長に向ける。

まがりなりにも俺のほうが階級は上だし、上司だぞという怒りが露わである。正確には元上司。今年の春の移動で吉賀は刑事課主任から交通課係長になつた。

「法的手続きがまだすんでねえ場合が残つちよんのじや、バカたれ

が

「どういう意味か? そら?」

「入院も通院もせんと、自宅療養しよる者がおろうが。その中には定期的に往診を受けている者がいれば、不定期に往診を頼む者もある。中には一年以上、往診も通院もしどらん寝たきりもあるじやろ

う。そげな者んが死んだらどうなる?」

「病院の先生を呼ぶわい。死亡診断書を書いてもらわにゃ、火葬許可証が下りん。まあ、一年以上も医者に見せちよらにゃ、変死や事故死と同じようじ、うちらの管轄になるけど」

「どつちにしてん、医者に診せるわな。医者を呼びもせず、役所に届け出もせんじゃつたら」

「なにや?」

「死亡から七日以内に届け出らにゃならんことになつちよるが、そん法的手続きを怠つち、ミイラになりかけちよるのに、まだ死んじよらんとか、それが定説じゃなどと、屁の舞もつたよつな」という輩があつたるうが。

それとか、年金の給付が打ち切られるのを恐れるあまり、遺体を押入れに隠しちよる者もあつた

「おおー!」山崎警部が声を上げた。「そつか。おるおる。おるなあ……葬式代がないからと、勝手に埋葬した者もあるわ」

佐藤メグミもうなずく。

「防臭・防腐剤が手軽に手に入る時代ですからね。出生届けが出されない無戸籍者が結構いるくらいです。死亡届けがなされん戸籍上の幽靈も、おらんとも限らんですよ」

「その辺から変質者が出たか!」

「そげな者んまで調べ出したら、きりねえで課長」

「それに、火葬場の兄ちゃんもなんだか怪しかつた。これも調べてみんと。応援なんかしどころか。手はなんぼあつてん足りん。力カシの足も借りてえぐらこじや。おまえんとこの兵隊を少しまわせ!」「あーもづすかん! あげんこといよんので、課長」

「うーん」山崎警部は腕組みをした。「もつと手勢が欲しいなあ……かといってこれ以上割いたら、通常業務に支障が出る。本部に応援を要請できないか、署長に掛け合つてみるか」

「そり、ムダでしょう。署長の嫌いな本部のケツの青いのが、大けな顔して乗り込んでくる。しかも飲み食いの経費はこっち持ち。遺

体損壊・遺棄程度の落ちだつたら、格好がつかんことに

「——そげんことによつち、バラバラ殺人だつたらどうえすんのか

！」

「そりだな。署長はあれで負けず嫌いなところがあるからなあ……。
手勢で、優先順位をつけてかかるしかないか」

本部が乗り込んでこないのは、ガイシヤがまだ生きているのか死んでいるのかわからないからである。ハツキリ殺人事件となれば当然、特別捜査本部が設置されて、本部刑事部主導になる。所轄は手足のようにこき使われる。今や県警本部はこいつらの様子をじっと見守っているのである。

吉賀と柳井は睨み合っている。

佐藤メグミはこの仲の悪い兄弟が、同じ警察署で顔を突き合わせているのは不幸なことだと思う。こんな仲の悪い兄弟は見たことがない。兄弟がいなくて淋しい思いをしているメグミであった。

そういうつじて、続々と捜査員が帰還してきた。二十時まで帰還が原則だ。

みな疲れた顔を警部に見せて、決して喫茶店などでサボつてなかつたことをアピールした。

柳井班の小太りの巡査部長らも、日焼けした顔をテカらせて帰つてきた。

二十時からは署長抜きの捜査会議が開かれる予定だつた。

佐藤はそれまでの時間を、報告書の作成と、通常業務の仕掛けりに費やした。市役所駐車場内での当て逃げ事案をひとつ抱えていて、あと一步といふところで立ち往生している。

会議は十分送れて始まり、画期的な展開を見せて、二十一時半に終わつた。

寮に帰つた時にはもう二十一時半をまわっていた。

食事は会議が終わつてから弁当が支給されたので——裁判官や検察官なんかは冷酒でしめるところもあるようだが——あとはシャワーを浴びて、ビールを飲んで寝るだけ。

このところそんな親父のような生活をしている。会議がなくても、帰還が遅れると、事務処理やなんかで、すぐにそれくらいの時刻になつた。

それが刑事の常態であり、昼夜を問わない、不規則・長時間労働の刑事に、女が進出しにくい要因のひとつであつた。

それでもメグミは満足だつた。好きな仕事ができる充実感と、心地よい疲労感に、喉越し爽やかな冷たいビールは最高だつた。大人になつたという実感が湧く。

出会いがなく、彼氏はまだないけど、親、彼女の場合祖父母と、地元から離れた開放感だけで、今はまだ充分満足だつた。友達はいるし、スイカもひとりで丸ごと食べられるし。

あの口煩いジジ・ババからはもう電話も滅多にかかるこないのは有難い。公務員になって、寮に入つたこともあり、まわりは堅い人間と彼らは思つてゐるばかりなので、安心したのか、死にかけていいるのか。

思春期には、インターネットの競売にかけて、ふたりとも売り飛ばしてしまいたいくらいだつた。実際イギリスでは、憐れな祖母が十歳の孫娘に鬱陶しいからと、オークションに出されて、危うく落札するところだつた、競売元が中止しなければ。

台風で持ち船が壊れたり、怪我をしたりする度に一一とにかくしよつちゅう怪我をする人だつた一一借金と、酒量を増やした祖父は、将来を悲観していだし、祖母は祖母で、“女は男で決まるんだ”と口酸つぱくいい続けた。

祖父の焼酎をきりすことは一日たりともなかつたけど、船のアブ
ラはしじゅつちゅう「つきらせ」で、漁に出られない日が多く、その上、や
れ日が悪いだの、低気圧が不穏な動きをしてるだの、転けて膝のサ
ラをちち割つただと、とにかくなんやかやいつて漁に出るのを勿
体いぶる漁師だったから、「海にや魚はなんぼでんあるわい」とい
いながら毎日中から酔いたくれている祖父だったから——一家は蒲江
一、いや大分県一の貧乏だつた。

「ハラ減つた。ジイちゃん、メシが食いたい」「メシは昨日きのよう
食つたらうが」「みんな毎日、朝・昼・晩と食よんので」「魚を食
え。魚なら防波堤からなんぼでん釣れる」「魚はもう飽いた」「ほ
ならジイジが山芋を掘つちきちゃん。タマゴかけとうろ汁はうめえ
ぞ」「あげんツルツルした歯ごたえがねえのは、食つた気がせん」「
「バカんじょういう！　あとから腹がふくれちきり、しまたつかん
のじやが」

というのが、幼い時分の、ウソのよつな本当の話だつた。釣り船
をやるよつになつてから少しさは楽になつたけれど。

祖母は祖父がいないところでこう。「女はのう、男で決まるんだ。
これでもわしは女学校を出ちよる。貧乏しよるんは、みんな、あん
ジイのせいじや」「ほんならなんでわかれんかつたん？」「
さつちよんのじや。運命ちゅうやつは、どげんもならん。それが出
来りや、とうに、ブイをつけち沖に流しちょるわい」

年老いた祖父母のことを考へると、やはり心が痛む。股の間から
後ろが見えるほど腰が曲がつた祖母と、傷めた脚を引きずるように
歩いて釣り船を出す祖父。ふたりとももう平均寿命を超えている。
あと何年動けるだろうか。

そこから逃げるよつに出てきたのだ！

アルコールによる浮揚感に揺らめきながら、メグミはノートパソ
コンを立ち上げた。

今日はまだ眠るわけにはいかない。捜査会議によつて、新たなピ
ースが二つ加わったからだ。

『メモ帳』を開いて、書き加える。

一、科捜研の微物検査により、ゴム長に付着していた土の中から純度九十六パー セントの炭酸カルシュー ムを抽出。つまり、石灰石の粉が混じっていたということ。ゴム長靴は太古の珊瑚の化石を踏んでいたのだ。

一、大分大学・医学部による 組織や細胞を調べる 病理検査でも、死因は特定できず。その代わり、かなり高度なエバーミング死体防腐処理 が施されていることがわかつた。

本部に出向いていた連中によりもたらされた以上の報告により、ゴム長の出所確認範囲がぐつと絞られて喜んだのも束の間、ききなれない『エバーミング』とかいう高度な防腐処理によつて、遺体の長期保存が可能したことから、所在不明者の時期的範囲を更に広げる必要が生じた 下手すれば何年も前に遡つて。

インターネットで検索してみると、『エバーミング』とは、死者の体内からの防腐処理で、死者復活を教義とするキリスト教文化圏、特にアメリカ・カナダ・イギリスなど土葬の国では一般的な行為であるらしい。

共産圏では、指導者の遺体を生前の姿のまま永久保存するために用いられているとか。驚いたことに、レーニン廟びょうにいけば、いつもレーニンに会えるというのである。

現代版ミイラであるうかとメグミは思った。

早い話が、血管から血液を抜いて防腐剤を注入し、魚のハラワタを抜くように、腹部に穴を開けて内容物を吸引・除去して、代わりに防腐剤を注入する。定期的にそれを繰り返せば、半永久的に遺体の保存が可能なのだという。

わが国は、遺体を傷つけること自体違法だし、火葬もあるので、そういう文化はない。外面だけの防腐処置だから長持ちはしない。

そのように、エバーミングは高度な技術を要するので、医師など

「ごく限られた医療関係者か、葬儀関係者の中でも、専門技術を持つた者の関与が疑われる。

遺棄遺体の身元はともかく、おぼろげながら犯人像が形を整えてきた。

会議の席では、「それなら、まだほかのパートが出てくる可能性がありますね」と若い捜査員がいった。「いっぺん、こっちから刺激してみたらどうでしょつか」と、それに続いて別の若い女性捜査員が提案した。「そんな高度な技術を持った者なら、きっと、インテリの、自己顯示欲の強い——その半面ちょっとしたことも傷つきやすいタイプの——社会病質的^{ソシアル・バス}な愉快犯が考えられます」

「たとえばどんな風にだ?」と警部がきけば、その者はこういった。「記者会見で発表してみたらどうでしょうか。脚が入ったゴム長が放置されていた経緯を。どうせ頭のいかれたゲームオタクかなにかですよ。田中に、堂々と放置したことを持ち上げてやり、自尊心をくすぐつておいて、もうそんなゲームに賭ける度胸はないだろうと、こきおろす。遺体も腐敗してしまつただろうからと、エバーミングの事実に気付いてないことに満足させ、遺体の身元確認に全力を擧げている——とかなんとかいつて」

「上げたり下げたりか。ふーむ……ゲームねえ。どうも君ら若い者んにはついていけんなあ。トライさんはどう思つね」と吉賀巡査部長にきく。

「面白いじゃないですか。それが当たつておればホシは、くそう! と頭にくるだらうし、ハズレていればいたで、調子に乗つてまたなにかのリアクションを起こすかも知れない

(いいぞ、親父!) とメグミは心の中で叫んだものだ。

捜査会議は吉賀巡査部長と佐藤メグミ巡査コンビの独壇場だった。メグミはそのことを思い出しながら心地よい眠りに着いた。

翌日、佐藤メグミ巡査と宮崎芳樹刑事の提案が受け入れられて、下川署長が午前一〇時の記者会見で次のような発表をした。

「大胆にも遺棄者は、陽が上がるのを待つてから、住宅地において、誰にも怪しまれずに、素面を晒しさえして、堂々と遺棄するという危険なゲームに成功した。

だけでもうそんな危険なゲームはできないだろう。ふいを突いたからできたことであり、また、途中で引き返すこともできるという安全フレーム内でのゲームだつた。

よほどのバカでない限り、もうそんなリスクを負うゲームはしないだろうし、手持ちのカードも、もはやドライアイスによる冷凍保存の限界を超えていく。腐敗してしまつただろう。

我々は遺体の身元を突き止めることに全力を挙げている。身元さえわかれれば、自ずとそこに事件の構図が見えてくる。歪んだ悦びに浸る切断者及び遺棄者　我々は同一人物と見ている——に出会える。所在不明・行方不明者の中から、きっと見つかるだろう。

彼はあまりにも多くの情報を与えてくれた。皮膚が接触したものなら、なんでもよいくらい微細なもので充分なのに。現今の科学捜査を随分甘く見たものだ。

やがて彼は、我々の足音に怯えることになるだらつ

それはそのまま活字になり、あるいは放映された。

それから三日間の沈黙があつた。

そして突如、地元紙の『別大新聞』に犯人からのものと思われるメッセージが送りつけられた。

午前五時ジャストに、新聞社のファックスがカタカタとそれを排出したのである。

それにはこう書かれてあつた。

『所与の条件から吾人を求めよ。されば、得られん。世界の分裂を

！ 神の影がサタンであることを知るだらう！』

一、官憲らは、早急に馳せ向かうべし。カラスが朝食のセミを啄^{つい}ばんでいるうちに。ソレは上野の森と知れ。

一、官憲らは、早急に馳せ向かうべし。魚が啄ばんでしまわぬうちに。ソレは十頭の馬がクツワを並べる先と知れ。

諸子^じらは職能の限りを尽くしてこれに当たらなければならぬ。なぜなら、これらはまだほんの序章に過ぎないのだから。

愚かな民の蒙を開くのに、他にどんな方法があらうか。

老翁も囁^{ささや}せよ』

大胆にも手書きのそれは、新聞社の当直者の手によつて、ただちに県警本部と、臼杵署に転送された。

臼杵署では捜査員らに非常召集がかけられ、顔を突き合わせた捜査員らは、「上野の森」とは大分市内の「上野墓地公園」のことではあるまいが、という結論に達した。とのひとつは難解だつた。

県警本部はそれより若干早く——その時点で時刻は六時をまわつていた——通信司令室から緊急指令が発せられた。

市内に緊急配備が敷かれると同時に、中央署管内のパトカーがいっせいに上野墓地公園に向かつた。

勿論、所轄刑事や、本部・捜査一課の刑事らも覆面車に乗りわけて向かつた。

墓地公園入り口の広まつた道路には、そのほか鑑識車や捜索隊を乗せた大型車両が続々と集結した。

警察犬を先頭に、長い棒を持つた捜索隊員らが墓地公園内に分け入り、わずか三十分足らずで、公園南側のカシやシイの林の中で

一 美術館から本光寺に向かう細い道路の北側 カシの枝にぶら下がつた、ふたつの赤いミカン入れ用の網袋を発見した。

網目を通してはつきりと、人間の肘から下の腕が見えた。カラスのざわめきと、犬が吠え立てる中で、それは揺れていた。

臼杵ではあつけなく原臭を見失つた二頭のシェパード犬だが、今回は見事に任務を果たした。

表彰ものである。オスのキッチャム号 六才 はすでに一度、未帰宅老人を発見する手柄を立てて、署長賞を頂いている。メスのオヘマ号 五才 にとつては今回初受賞になるかも知れない。
だけど、彼らにはまだ仕事が残っていた。ホシがどういう経路でそこまでやつてきたのか、逆コースを辿つて追跡するのと、そして鑑識班が採取を始めた公園内のゴミーー空き缶やら、タバコの吸いさしやら、汚れた手拭い、軍手の片方、ちり紙、コンドーム、その他諸々 の中から原臭 ゴム長靴に付着したにおい と同じ臭いを探すこと。それを探し当てたら本部長賞ものである 上等の肉の缶詰がひと抱えほど副賞としてもらえる 。

一方では、ファックスの発信元が突き止められ、大分市片島の住宅を下郡交番の巡査長以下三名が急襲。あとから駆けつけた中央署の刑事一名と大家とで、施錠されている玄関の鍵を開けて入った。中には誰もいなかつた。けど、ファックス付の電話機はあつた。大家の話では、借主は福岡の企業で、営業マンが出張してきては滞在しているという。

その企業と連絡が取られ、やがて鑑識班が到着して七時には鑑識作業が始まる。

一番田の「十頭の馬がクツワを並べる先 」 というのはどこか？
これはなかなかわからなかつた。

なので、県警は午後一時からの記者会見で隠さずそのままを発表した。報道機関への公平性からいつてもそれが妥当なことだつた。

その甲斐あつて、ニューを観た市民から、続々と情報が寄せられた。

十頭の馬とは、新日鉄の船積み用の大型クレーンのことではないのか。

というのが一番多かつた。産業道路 通称四〇メートル道路 を走つていれば誰でも目にするそれは、クレーンが作動していない時は確かに馬に見える。

稼動中は首を水平に伸ばしているからわからないが、休眠中、首をもたげて並んだ姿は、まさに頭のない木馬の姿。
誰の眼にもその姿がありありと浮かんだ。

乙津泊地だ！

中央署の会議室に雁首をそろえていた関係幹部 白杵署の山崎警部・柳井警部補らも駆けつけていた一ーを前にして、刑事部長の山辺警視正が叫んだ。

「至急手配しろ！」

乙津川と原川が合流する河口。海に向けて両側は埋立地で、西が新日鉄、東が大分ケミカル、日本油脂、九石、昭和電工などのコンビナート群である。

両岸壁にはいつも貨物船が何隻も停泊している。

緊急指令を受けて、東署管内のパトカーがいっせいに現場に向かう。

一隊は新日鉄東門から賑やかに押し入り、製品ベースの岸壁に次々にクツワを並べた。巨大なクレーンの下に。

もう一隊は東側の岸壁を赤く染めて連なった。

製品ベースでは一基のクレーンが稼動中で、五隻のうち一隻の貨物船にコイルを積み込む作業をしていた。大きなタイヤを幾つも連ねたムカデのような台車がコイルを運んでいる。

東側の岸壁にも一隻の船が停泊していたが、警察官以外の人影は見当たらない。警察官らは、両岸壁からお互いの小さな存在を認め

合い、海を見つめているだけである。

やがて、沖合いから県警の小型船が三隻やってきて、その海域の搜索を始めた。

晴れているのか曇っているのか、白々しい妙な天気の日だった。入り江なので波は穏やか。

世間では盆休みにさしかかるとしており、中国ではオリンピックが華々しく開催されていた。

夕方から雨になった。

県警本部では、刑事部長の山辺警視正を中心とした幹部で、特別捜査本部の立ち上げ準備がなされていた。

当然、大分中央署に本部を敷き、今のところは臼杵署、次第によつては大分東署をも含めた、合同捜査本部となる予定だった。

中部はもとより、県南・県北の各署からも応援要員を召集し、百人規模の——まだ殺人事件かどうかもわからない時点での捜査本部としては異例の——まずもつて戒名をどうするかでもめた——捜査体制で臨むこととなつた。

『人体切断部位遺棄事件特別捜査本部』といつ戒名に落ち着き、腕に自信のある者の手によって墨痕鮮やかに大書され、中央署の講堂入り口に掲げられることになつた。

県庁では、県の三役が顔を突き合わせて、憂慮していた。一〇月には国体を控えており、それに水をさすようなことにならねばよいがと。

投光器を点けた搜索は深夜に及んだものの、その日はとうとう発見に至らなかつた。

前に続く

翌朝、乙津泊地東側岸壁に停泊中の「ラジル」船籍の船舶の乗組員からの通報で、それは発見された。

バイキングブリッジを上り下りしていた船員の眼に、岸壁と舷側との間の波間から、黄色い物体が一瞬垣間見えたといふので、近くでダイビングの用意をしていた県警の船が向かつた。

そして、ダイバーが喫水線にくつつくように浮遊している黄色い物体を見つけたのであつた。

引き上げてみると、それはしつかりと幅広の特殊な粘着テープで封をされたゴミ袋だつた。

しかもゴミ袋はひとつではなく、ふたつあつた。

一方には腐乱しかけた人間のへソから下の下半身が入つていた。勿論両足は膝下から切断されていた。

もう一方にはへソから上、首から下、両腕のヒジから下のない胴体が入つていた。

その日の一〇時に大分中央署の講堂に、各署から書き集められた、約百名の捜査員が勢ぞろいした。

田杵署の吉賀巡査部長に佐藤メグミ巡査も遅ればせながら駆けつけた。

入り口の壁に張られた戒名も次のように書き改めてあつた。

『田杵・大分バラバラ殺人及び死体遺棄事件特別捜査本部』

中に入ると、目映い明るさの中に、大勢の捜査員の後ろ姿がドーンと居並んでいて、その先の正面長机に、刑事部長を中心とする幹部の姿が並んで見えた。

佐藤メグミにとつては足がすくむような光景だつた。「大けな顔

「しとれよ」と吉賀係長にいわれていたけど、刑事の資格がないのは自分だけではないか、という引け目に押し潰されそうだった。実際には相当数そういう応援者が混じっていたのだが。

ふたりは当然、臼杵署の連中 山崎警部以下の流れの最後部に席を求めた。

するとまるでふたりを待っていたかのように、五分後れで捜査会議が「それじゃあ、始めますか」という刑事部一課長の高城警視の一言により始まった。

左端の高城警視は、マイクをスタンドから外して持ち、まず遠路遙々応援に駆けつけてくれた捜査員らの労をねぎらい、そして、本年度から指揮を執ることになった、刑事部長の山辺警視正を紹介して、バトンタッチした。

中央に座す山辺刑事部長は立ち上がり、檄を飛ばして集めた応援捜査員らを満足そうに眺め、場内を見回して、労をねぎらいとともに、簡単な自己紹介をして、挨拶とした。

山辺警視正は宇佐市出身のキアリアで、関東から都落ちしてからは、九州管内の県警を転々としながら、主に警務畠を歩いてきたエリート、佐賀県警警務部・監察課長からの転任だつた。歳は四十五とまだ若く、端正な面立ちをしていた。

高級なウールのダークスース姿の刑事部長を挟んで、中央署長・東署長・臼杵署長の青シャツが厳めしく並んでいる。

ほかにもひとりダークスース姿の幹部が右端に座していった。

続いて、中央署の権藤警部が指名されて、早速、上野墓地公園内^{げんじ}遺棄現場の報告から口火が切られた。

権藤警部は指し棒を引き伸ばしながら壇上に向かい、白いボードに書き込まれた第一現場図を示しながら、説明を始めた。

「ここが、遺棄現場です。この部分は鬱葱としたカシなどの林。藪といつてもいい。ホシはこの辺り、少し道路が広まっている。ここに車を停めて、この細い道から林に分け入ったものと思われます。そして、カシの木の枝に、腕が入った網袋二つを、手を伸ばせば届

くくらいの位置——ただし、少なくとも一七〇センチ以上の背丈は必要です——にある枝にいわいつけた。

そして再びここに戻り、ここから車で逃走した。犬がここで原臭を見失いましたけん、まず間違いないでしょう

権藤警部は厳つい顔をしていた。短髪を含めてジャガイモのような色合いと形をした頭と顔だった。イタ高 大分高校 のゴンタクレで鳴らした頃と少しも変わつてない これは一年先輩の吉賀の感想。

そこまでいつて権藤警部は猪首をめぐらして正面を向き、なにか質問はないかと間をおいた。けど、反応がないので先を続けた。

「ここに至るのは、上からは、南太平寺から上つてきたか、大道から美術館の前を通つてやつってきたか、もひとつ、南陽台からも考えられます。下からは、この一本道ですな」

「時間的に見当はついているのかね?」と、山辺刑事部長が首を捻じ曲げてきく。

「はい。それがですね。まあ、逢魔おほさまが時といいますか、カラスが寝床に入つてている頃、宵から明け方にかけてではないかと思います。それ以前だと、カラスに限らず、野鳥などが啄ばんでいたでしょうし、朝の五時には、片島の民家からファックスが新聞社に送られますけん、そこまでの移動時間は少なく見積もつても一〇分はかかりますけん——ですけん、朝は四時半くらいまでとみて——ああ、勿論、単独犯ということを前提にしておりますが」

「うむ。メッセージには吾人とあるが、まあ単独犯とみて間違いあるまい。こんな変質者が何人もいるとは思えない。それで、該当不審車両あるいは不審人物の目撃情報は?」

「はい。複数上がっております。それをただ今、一つひとつ潰しておるところであります。これから割り出しも行つております。ミカン入れ網袋についても、ごくありふれたものですが、その出所確認を急いでおります」

「ほかに遺留物は?」

「今のところまだ見つかっておりません」

「うむ」

「それでは次に」といつて権藤警部は、片島の民家の図面の方を指し示して、「下郡工業団地から入ったところの民家ですが、これは福岡の『東洋住宅機器株式会社』が出張所として借りてあるもので、営業員が出張してきた時に寝泊りするだけの家で、普段は誰も住んでおりません。高さ一・五メートルの金網フェンスと、同じ高さのブロック塀をめぐらせてはあります、裏木戸から何者かが庭に侵入、窓ガラスを割つてガラス戸を開けて進入した形跡があります。そこからファックスを送つたことは間違いません。

ですけんこれもただ今、遺留指紋の照合と、付近の聞き込みをやつているところであります。今のところ不審人物等は上がつております」

「両腕ですけど、解剖所見は出てるんでしょうつか？」

臼杵署の刑事からの質問だった。

「その件に関しては、あとで検死官がまとめて報告することになります」と、一課長の高城警視がオーダーメードのシャツのスース姿でいった。

吉賀や権藤警部のような一着なんぼといった安物ではない。吉賀の背広からはナフタリンのにおいがプンプンしていた。身内でもないのに、メグミは恥ずかしい思いをしていた。メグミは勿論イチヨラの黒いパンツスース姿である。

「ほかに質問は？」高城警視は場内を見渡した。「なければ次に東署、乙津泊地遺棄現場報告を願います」

いわれて、最前列に座っていた東署の大津部警部が立ち上がり、壇上の一〇〇のボードに向かつた。

そこには乙津泊地の図面が——船舶の位置など——詳細に書かれてあつた。

「発見現場はここですが、当初上流から投擲したものだろうと思っておりましたけど、同じ様なものを流してみてわかつたのですが、

投擲する位置によつて、当然、ここまで流れ至る時間が決まります。そしておおよその投擲時刻も推し量れます。

それにしては前日の搜索で見つからなかつたというのが解せないであります。黄色いゴミ袋というのは特に目立ちますからね。その証拠に貨物船の乗組員が午前六時過ぎに、舷側と岸壁の間といえば薄暗かつたでしょに、それが眼に入つたくらいですからね。

それよりなにより、ふたつのゴミ袋が同じところに漂着しているというのも——勿論、ヒヤやなにかで繋いでいたわけでもありませんから。そういうところから考えて、投擲されたのはまさにここ、発見された所と同じ、この岸壁から船舶の——その船舶は一週間前から停泊しております——舷側との間に、我々の搜索が打ち切られた本日の午前一時以降に投擲されたのではないかと」 いいじり始めきが起きた。「そのように思われます」

「ホシのやつ、フロイントをかけたつてわけか?」 と、中央署長が思わず声を漏らした。それをマイクが拾う。

ほかのお歴々も頷いている。山辺刑事部長は仰け反つて腕組をした。相當にハイレベルなやつだと思つてゐるに違ひない。メグミもそう思つた。東署の警部も、風采の上がらない眠そうな顔をしているけど、切れ者なのかも知れない。

「ですから、重点的にその辺りの聞き込みを行つてゐるところです。勿論これは仮説ですから、上流、あるいは三海橋から投げ落としたということも視野に入れて、幅広い聞き込みを——それとしては手が足りませんけど、やつてあるところであります。今のところこれといった情報はつかめておりません。

なお、ゴミ袋と、業務用の粘着テープについても、その出所を確かめておるところであります

待つてました!

と、ばかりに佐藤メグミは立ち上がつた。それは反射的な行動だったのと、立ち上がってから、顔が火のように熱くなつた。

「あのう……」

みながいつせいに彼女を見る。

「君は？」

「臼杵署の佐藤です。階級は巡査です」と余計なことをいった。
(なんで、外人が?)といつよつたな顔つきで高城警視はまじまじと
メグミを見て、「なんだね?」と訊く。

その間、方々で、「よい、あらなんかい?」「ほんとじやのう、
随分陽に焼けちょるじやねえか」「バカ、陽に焼けたぐれえじ、あ
げえ黒うなるか」「黒人のじたるのや」「にしては色がちいと
薄しいぞ、鍋炭でんついちょるんじやねえか」「あいの子じやうり
か」等々の私語が交わされている。

臼杵ではもう認知されているのに、鬱陶しいことだと、頭の隅で
メグミは思う。色なんかどうでもよいではないか!

「はい。あのう、ちょっとどうかがいますけど、昨日の汐はどうだつ
たでしようか?」

「シオ? 塩? とは?」

「ですから満潮か干潮かということですけど」

「ああ、汐ね。それはどうだつたんですかね、大津部さん」

「あ、いや、それは その辺は確かめておりませんーーけど、大
型貨物船が停泊しているくらいだから、あの辺はかなり深く浚渫さ
れていて、いつもなみなみとしておりますからなあ」

「それによつては、上流から流されても、押し戻されたり速まつた
り、また、沖から押し流されてきた可能性も考えなければなりませ
んし、それに、なにも陸からではなく、海から小船でといつことも
「うん、まあねえ……」

と、大津部警部は迷惑そうな顔で色の黒い小娘を見た。吉賀ら臼
杵署の連中は苦笑い。並み居る幹部の中の、下川臼杵署長もゾウガ
メのように首を伸ばして苦笑の態。

「あ、それから、黄色いゴミ袋ですけど、表面に何か表記はありま
したか?」

「いやーーなにも?」

「どうしてゴミ袋と判断されたんですか？」

「あの手のものでは、それ以外の用途が考えられんかつたんでな」「手提げのような加工はされてましたか？」

「いいや」

「そうですか……いえ、黄色いゴミ袋は田杵市が採用しておりますから、お訊きしたんですけど」

「なにつ…」という声がお偉方から漏れた。

「ただし、市のは燃えるゴミを入れるほうの袋で、そう表記してありますし、手提げ加工が施されています。でもどうして犯人は、目立たない黒ではなく、ある意味一番目立つ黄色にしたんでしょう？」

たまりかねて田杵署・刑事課長の山崎警部が先頭の席から立ち上がり、「気にせんでください。あの子はまだ警察官としてもまだ新米で、交通係の者ですが、なにぶん手が足りなくて」といい、佐藤メグミの方を向いていう。「君、もついいから、黙つて座つとみなさい！」

「なにをいつとるんだ！」と下川署長が声を上げた。「彼女は立派な刑事課の刑事だぞ！」

「いや？　しかし、署長」

「たつた今、わしが移動を命じた。文句あるまい」

みんながドツと笑った。

下川署長は柔軟な顔に戻つて、佐藤メグミに「続けなさい」という。

佐藤メグミは眼を丸くしてしゃちほこばる。

「はい。ですから、赤い網袋といい、黄色いゴミ袋といい、犯人は早く発見して欲しいという思いと、そういう色に心理的なこだわりがあるんじゃないとか、思いまして——いえでも、わたしたちの裏をかいて、フェイントをかけたというのは、全く同感です。やられたって、感じですね。そう思います。余計なこといつてすみません。

「あ、それから、あの業務用の幅の広い粘着テープですけど、ボードに拡大写真が貼り付けてある。「写真で見た限りですけど、あれって、東芝関連の会社に勤める友達から——高校時代の同級生ですけど——見せられたことがあります。たったこれだけで何千万円ものICが詰まってるんだよって、幅広テープで密封された小さなダンボール箱を見せられたんです。凄い粘着力だと自慢してました」

「そ、その会社はまさか、臼杵市にあるつてんじゃなかろうな！」
高城警視が叫ぶようにいった。

「あります」と佐藤メグミは胸を張った。

時刻は一一時半を回った。

いよいよ田杵署の出番といつといひで、高城警視から小休止宣言が出された。

「それではここで一五分間の休憩タイムとします。トイレ等、喫煙は、外のフロアーに喫煙場所がありますので、そちらのほうで願います」

一〇〇名余りの捜査員から緊張の糸が切れ、ざわめきが起きた。

ガヤガヤと立ち上がる。

体をほぐしながらみんなゾロゾロと講堂から出て、トイレに向かう者、喫煙場所に向かう者とに分かれた。

居残った者は、そこそこに固まりを作つて私語を交わした。

男子トイレの前は大混雑だが、女子トイレはさすがに閑散としていた。

佐藤メグミが洗面所から出て廊下を歩いて行くと、清涼飲料水の自動販売機の所で、壁に寄りかかってダイエットコークを飲んでいる若い女性刑事がいた。

飛び抜けて背が高いのでその刑事はよく目立つた。応援部隊の中にいて、何度もメグミと眼が合つた。数少ない女性刑事の中で、若いふたりが互いを意識するのは自然の理だった。

向こうも気付いてこっちを見た。

「はあ～い」といつてメグミのほうから声をかけて近づいた。

メグミは小さいほうではない。一六九センチあるから女にしては上背があるほうである。それにメリハリのあるボディーをしているから、色が黒いのを別にしても、女性の中にあっては田立つ存在である。

そのメグミが傍に行つてその女性刑事の大きさにたまげた。壁に寄り掛かっているから真つ直ぐ立つているわけではないのに、見上

げるほどだった。

「わたし、臼杵署の佐藤メグミ」

メグミは精一杯愛嬌のある顔で挨拶した。

鉄無地のスマースーツの襟から白いシャツの襟をラフに立てたその女刑事は、そのままの姿勢で、「一クの缶を口に付けたままジロリと佐藤メグミを見て、「自分は、別府署の榎原光子」といった。（なにこの子、態度デカーイ！）と、思つてると。

そこへ吉賀巡査部長がやつて來た。

吉賀もその長身の女刑事をびっくりした顔で見た。

そして、「なんだ、おまえか」という

「係長、この人知ってるの？」

「ああ、ちょっとな」上背が一六〇センチそこそこしかない吉賀は、それでも見下ろすように仰ぎ見て、「またおまえ背が伸びたか。まあ、あん時^{しょく}きや、小便臭^{しょうべん}せえ小娘じやつたけどな」

その小娘にしてやられて、法廷にまで引っ張り出され、恥をかかされたことがあった。

そんなことは知らない佐藤メグミは、その白黒ハツキリした大きな眼で、ふたりを交互に見た。

「おお、そうじやつた。おい佐藤　じゃなかつた。佐藤刑事殿、課長様がお呼びじや。おまえ、課長の顔潰したけん、しおらしゅうしどれよ」

「はい、デカ長！」といつて佐藤メグミは、自分と同一年くらいの榎原光子という長身の女刑事に、「　じゃね」と、片手を挙げて、小走りに走り去つた。

なにしろ百人からの人間である、トイレは上・下の階のを使用しても間に合わないくらいだつた。喫煙所とて同じ。

なので全員がパイプ椅子に座り終えたのは、もう二二時になろうかという時刻だった。

「じゃあ、時間も押しております。最後に臼杵署　臼杵署の進捗

状況を願います」

高城警視の指名を受けて、山崎警部が苦み走った大きな顔で、ボードの前に立つ。ボードはすでに一基とも、メグミラの手によつて臼杵事件の資料に取り替えられていた。

まず、山崎警部は現場の図面を指し棒で指しながら説明を始めた。「もつご存知かと思いますが、船着場の側壁のこの上に遺棄されておりました。ホシはこの路地を通つて、小学校のグラウンド脇に停めた——ここです。ここで犬は原臭を見失つております。やはり車で逃走したものと思われます。今のところ有力なのは白い乗用車ということで、Z関連と突き合わせて、該当車両を一つひとつ潰しておるところであります。

それとは別に、目撃証言から不審人物の割り出しも行つておりますが、これもやはり当初の少年による似顔絵、そしてほかの小学生らの目撃情報を加えた人物像が有力で、そのほかにはこれといった目撃情報は得られておりません」

図面の横に、不審人物の特徴が箇条書きされてある。うしろのほうは見えにくいと思われる所以、山崎警部はそれを読み上げた。

- 一、 背丈 一七〇~一八〇センチくらいである。
- 二、 体格 瘦せ型である。
- 三、 顔 醤油顔である。
- 四、 髪 長髪である。
- 五、 服装 ? カーキ色のジャケットにズボン ? 白衣に白っぽいズボンである。
- 六、 性別 不明である。

「次に遺留物がありますが、これも隠さず公開しましたので、もう新聞等でご存知かと思います。あの通り、ゴム長靴に石灰石の粉が付着しておりましたので、それについて多数の情報が寄せられております。もつかそれを一つひとつ潰しておるところであります。

エバーミングの件は伏せておりますので、それに関する情報はありません。秘かに病院や葬儀屋、それ専門の業者に聞き込みをかけているところであります。

所在不明・行方不明者のほうの情報も多数寄せられております。それについては——」

- 一、 男性である。
- 二、 推定年齢は三十から五十までの中年である。
- 三、 推定身長は一七〇センチ前後である。
- 四、 肥満度はマイナス一〇パーセント前後である。
- 五、 動脈硬化がかなり進んでいて、爪水虫がある。
- 六、 やや〇脚氣味に歩き、筋肉の具合から、肉体労働者ではなく、ホワイトカラー、もしくは、ブルーカラーでも比較的軽度な作業員または管理職員が想定される。
- 七、 足のサイズは25・〇センチ。体毛は薄いほうである。

と、新聞記事にもなった事項がボードに書いてあり、警部はそれを確認するように読んで。

「以上の条件をもとに、該当するか、もしくはそれに近い情報から優先して当たつております。ひと月以内に失踪した者　今のところそういう条件を設けてですね。なにぶんにも手が足りませんので。情報はほぼ全国から多数寄せられております」

山崎警部はここでひと呼吸おいた。

すかさず、「病院や自宅で死亡した者についてはどうなんですか？」という質問が捜査員の方から出た。

いわれて警部は次のボードに移つた。

そこには「臼杵・津久見」両市の略図が描かれてあつた。点在する病院や葬祭場や火葬場の名前と位置が書き込まれている。「ここに、臼杵・津久見両市の共同火葬場があります。臼津葬祭場ですね。両市に於ける死亡者の遺体はすべてここで荼毘に付される

ことになつておつます。死亡から納骨に至るまでのプロセスに、なんら問題はありませんでした。

なお、そういう法的手続きに知らない、自宅で死亡したのに医師による診断も受けず、従つて市当局に死亡届も出さないで、家族により秘かに埋葬したり遺棄したりした遺体はないかーーという捜査を行いましたところ、なんと「山崎警部は地図の至るところに「X」が記してあるのを丸で囲むように大雑把に示して、「これだけの数の人間が、所在がつかめないのにもかかわらず、戸籍上は現存していることになつておりました。全部で七八名あります」

捜査員らは状況が呑み込めない。お偉方とて同じである。

「どういうことかね？」と、代表して刑事部長の山辺警視正がきく。「はい。なにぶん手が足りませんので、まだほんの一部しか明らかになつておりますけど、わかつただけでも、そのうちの一ーすべて印旛市内ですが、一五名が、家族により不法に密葬されておりました。事情はそれですが、中には、年金手続きがなされていて、家族が不正受給している悪質なものもありましたので、ただ今立件を検討しているところであります」「じゃあその辺からこの度のバラバラ遺体が出て来た可能性があるわけだな」

「いえ、それが、その七八名の戸籍上の幽靈ですが、生きていれば、今現在は八十歳以上のお年寄りばかりということになりますし、酷いのになると、津久見市青江のお婆ちゃんなんかは、坂本竜馬より二つ三つ上ということになります」

「なんじゃそれは」と高城警視。

「じゃあ、君らはそんなことにかかわりあつているヒマはないはずじゃないのかね」山辺刑事部長が鋭くいった。

「はい。おっしゃる通りであります。なので、その方面からは手を引きましてーーいえ、エバーミングということもありますので、後ろ髪を引かれる思いではありますが、なにぶんにも手が足りませんのでーーただ今、ある不審者の身辺調査に手勢の多くを割いて、ま

た狭い上に人通りの少けない小さな町でありますので、日替わりの行確班を、常時三名貼り付けておるところであります

「なに？ 容疑者はいるのかね」驚いた顔で山辺刑事部長。

「それを早くいわんかい」という顔を高城警視はした。

下川署長は机に肘を突き、でつぱりした体を種牛のようにのさばらせて、二タニタと頬を緩めていた。

“今井孝雄”

という名前を、山崎警部はボードに大書した。

そして濃い顔を正面に向けて、わざとらしくひとつ咳きをした。
「初めに断つておきます。この人物は先ほど申しました小学生児童
らの目撃証言による不審人物とは、あきらかに赴きを異にしており
ます。容疑者とまではまだいえませんけれど、しかし限りなく疑わ
しい人物であります。

まず、略歴から申しますと、年齢は二七歳で、生まれは津久見市
セメント町、現住所は臼杵市祇園西町　まさに遺棄現場のすぐ近
くです——のアパート『海南社』。学歴は、津久見高校から京都大
学の医学部に進んだ秀才ですが、なぜか四年の半ばにして退学、そ
れからは関西で職場を転々として、去年の九月に故郷の津久見に舞
い戻つております。そして、臼津葬祭場で働くようになりました。

ここで注目すべきは、この男が一貫して死体の傍にいたということ
です。医学部ですから死体解剖などの研修を受けることは当然で
しょうが、なおかつ大学時代のアルバイトが大学死体置き場プール
での死体洗い。転々とした職業も主に葬儀屋でした。そしてこちら
でも葬祭場勤務。

しかも、しかもです、レンタルビデオ店から借り出されているビ
デオもホラービデオが多いときております」

「おお！」という捜査員らの声。

「じゃあ、決まりじゃないか」と、山辺刑事部長が肩を揺すつてい
う。

「はい。ところがですね。先ほども申しましたように、彼には三人
の行確班を四六時中張り付けておったわけです。無論、深夜に於い
ても片時も眼を放さず、彼のアパートを見張つておりました。そう

いう中で、このほどの一連の事件は起きたのです

「うーん。そういうことか」と、山辺は腕を組んで仰け反った。

「ですから、彼がホシだとしたら、もう一人、もしくはそれ以上の共犯者がいることになります。——あ、ですけど、臼杵事件においては彼のアリバイはありません」

捜査員らの頭に、“吾人らは”という犯人のメッセージが浮かんだ。ハツタリではなかつたのかも知れない。これは大変なことになつたぞという思いがズシンときた人々であつた。

しかしお偉方のほうはもっと大きな衝撃を受けていた。山崎警部が壇上から退き、捜査員らの私語がおさまらない中、右端に座っているダークスース姿の幹部が立ち上がつた。検死官の黒木警視である。

黒木警視は馬の顔を押し縮めたような顔をしていた。目鼻がまさに馬を想起させた。髪は中央から左右に振り分けている。

「ここにでみなさんにおのこうから申し上げます。検死の黒木と申します。その前にお断りしておきます。これから話すことはあまりにも衝撃的なことなので、しばらく伏せておくというのが、部長以下の方針でありますので、口外無用に願います。よろしいですか。くわぐれもお願ひしますよ」

自然捜査員らは緊張の面持ちになつた。急に外の喧騒が耳に入つてくる。歩道で話す人の話し声までも。

「この度発見された両足、両腕、二つの胴体ですが、いずれも、別人のものであります」

「おおっ？」という疑問符の付いたどよめきだつた。

「そらどういうことかえ」と誰かが思わず口走つた。

「都合、四人！ 四人の遺体の一部ということであります。少なくとも四人が殺害され、解体され、遺棄された——ということです！」ガヤガヤと騒がしくなつた。

「静かに！」と高城警視が叫んだ。

静まり返つたところで、山辺刑事部長が抑制された声でいった。

「これは我々が思つていた以上に大きな広がりを持つヤマかも知れんな……しかもまだ序章に過ぎないといふ」

「しかし、今度は胴体でしたから、司法解剖からは多くの情報が得られるでしょう。人間、一つやふたつ、病歴や致傷歴、それに外的特長も見られるでしょうから、内臓はないとはいえ、全国の病院のカルテを当たれば、これは身元確認は案外早いかも知れませんね」と、黒木検死官がいうのに、「まったく大胆不敵というか、さつき誰かがいつたけど、ホシはまるで身元を早く突き止めてくれといわんばかりですな」と、中央署長の村本警視正がいう。

「といいますか、あのメッセージからしますと、『老翁は囁耳せよ』ですから、老翁に見せたいんじゃないでしょうか?」と、捜査員の中からいう者があつた。がつしりした体格の中年刑事だ。

別の刑事が後方から立ち上がって、発言を求める。高城警視が首を伸ばしながらボールペンで指す。

「同感です。しかも民衆を啓蒙しようというんですから、個人的犯罪というより、社会性を感じますね。老翁というのは身分が高い人でしょ、たぶん。そういうところからしても、この事件には複数がかかわっているような気がします。あるいは狂信的な、たとえばカルトのような集団なんかが」

だんだん話しが大きくなってきた。佐藤メグミは発言者が出て度に頭をめぐらせていたが、ふと先ほどの女性刑事、榎原光子という別府署の刑事に目線がぶつかつた。

ぴんと背筋が伸びて、頭一つ出ているその女刑事はじっと、ひな壇の上の白いボードを見ている。小学生児童の目撃証言から描いた長髪・長身の白衣を着た男、あるいは女とも見れなくはない絵を。

それからはフリートークのよつになつて、色々な考え方や意見が出た。

その中でも、杵築署の捜査員がいつたことで、しばらくみんな黙つて考えさせられた。

「どれもこれもつい 対になつてますね。足、手、胴体 と。これは何か意味があるんでしょうかね？」

「ほんとだなあ……」と下川田杵署長がつぶやいた。
それはみんな漠然と思つていたことだ。

「しかしそれもこれもバラバラだつたら、遺体は六名になつて、もつと怖いことになつっていた」と東署長はいう。

「胴体も一体揃えたといつことは、明らかに、なんらかの意図を感じざるを得ないな」と中央署長。

捜査員らも隣近所でさわやき合ひ。それが次第に大きくガヤガヤと喧しくなつた。

そんな時でさえ、別府署の神原光子はじつとボードの絵を見つめていた。

やはりメグミは彼女が気になつてしまふ。くやしいけれど、オーラを放つてゐるのだ。男子より背が高く足が長く颯爽としていて、髪は男子のように七三に分けて流し、短めにカットしてくる。ラフに立てたシャツの襟がカツコイイ。

そんな髪型に憧れつつも、どうかするとけぢれようぢれようにかかるつてゐる髪が、いつも どうしても いうことをきいてくれない。だからショーンにするしかないのだ。この顔に白粉を塗つても無駄なように。

場内がバラけてきたので、高城警視が咳払いして、「じゃあもう遅くなりました、こじらで部長にシメていたたいて、明日に備えましょうか」といった。

メグミは腕時計を見た。津久見市内に住む伯母から高校卒業と就職祝いを兼ねて貰つた、お気に入りのミックキーマウスの腕時計だ。時刻はもう午前令時をまわつていた。

山辺警視正はマイクをスタンンドから外して立ち上がつた。

「秋季国体を控えて、知事も県会議長も大変憂慮されておられます。みなさんの力を結集して、事件の早期解決をと、本部長会議に出張しておられる本部長からも、メッセージが届いております。

ただ今、所轄の方々から進捗状況をうかがいましたが、いずれにしましても、このホシは、単独であれ複数犯であれ、移動手段に車を用いていることは間違いないと思われます。であれば、ホシが動くたびに、車の痕跡を残すことになり、捕捉のチャンスが広がるわけであります。クレバーなやつだから、同じ車で移動しているとも思えないけど、盗難車両や、レンタカーを使用したとしても、限られてくる。このシステムをふるに活用して、怪しいと思う車両を絞り込んだら、この追跡モードでその動きを監視する。と同時に、みなさま方にあつては、片つ端から、その車両に当たつてみていただきたい。

次に遺体——遺体の隠し場所がきつとあるはずです。エンバーミングを施しているところから、常温でも遺体の保存は可能であります。必ずしも冷凍施設は必要としません。民家は勿論、廃屋、廃工場など、建物という建物をシラミ潰しに、地域課・生活安全課等の垣根を越えて、係員を総動員して、管轄区域の戸別訪問に当たらせるようになります、これは本部長よりのお達しでありますので、名署のご理解を賜りたい。

所在不明・行方不明者等の追跡は、これより応援部隊に担つていただきます。該当条件に当て嵌まる情報であれば、日本全国どこでもかまいません、出掛けを行つて確認していただきたい。

臼杵署のみなさん方にあつては、ご苦労さまで申し上げたい。ホシは多くの証拠をご当地に残しておりますから、さらなる踏ん張りを願います。その不審者が事件解決の突破口になればよいのだ

が……。

以上！」

山辺警視正のシメで捜査会議は終わった。

一人ひとりに夜食の弁当『吉野の鳥飯』と、ペットボトルのお茶が振舞われ、泊り込みの応援部隊はそこで食べ、ほかの捜査員らは三々五々乗ってきた車両に乗り込んで、それぞれの警察署に帰投した。

佐藤メグミは今回ミニバトではなく、五人乗りの3800cc特別仕様を運転。本当は管轄区域を越えてはならないことになつていいのだが。チラッと後部を見ると、吉賀巡査部長も、それに寄りかかるようにして富崎芳樹刑事も居眠っている。

富崎芳樹は二八歳の独身で、犯人を刺激する作戦の申し立てを一緒にした時以来、多少意識するようになつていた。彼は来る時は柳井班の連中と一緒にたつた。

急にメグミも眠たくなつて眼をこすり、しばたたいた。

一〇日の日曜日はやく休みをもらえたので、佐藤メグミは墓掃除に蒲江の実家に帰った。

例年は、一二日か一三日の休みの日か、そうでなければ休暇を取つて、盆の墓参りを兼ねた墓掃除をしていた。今年は事件の関係でいつ休みが取れるかわからない。せっかく何週間振りかにもらえた休みだけど、しかたがなかつた。祖父母とメグミしか墓掃除をする者はいないのだ。

祖母は女ばかり五人産んで、三人が死に——その中には自殺したメグミの母親も含まれている——津久見と兵庫に稼いだ娘がふたりいるけど、それぞれそちらの墓守があるので、墓掃除に帰つてきたことは一度もない。

メグミは墓掃除が嫌いでならなかつた。墓の周りは一年のうちにヤブのようになつていて、結構手間がかかり、そうゆうのって面倒臭い。おまけにヤブ蚊がうようよいて、どんなに用心していてもすぐ刺される。それが痒くて痒くて、搔くと皮膚に膨らみができる。不思議と祖母はあまり刺されない。焼酎臭い息を吐く祖父と、メグミだけが集中攻撃を受けた。

でも、掃除が終わつたあとに食べる、祖母特製の大きなイナリ寿司は、たまらなく美味しかつた。それに釣られて、子供時分は墓掃除についてきた。また、そこから眺める木の間隠れの海も好きだつた。カシの木に登ると、沖の島や四国が見えて、他国に憧れたものだ。

佐藤家の墓は以前は家の近くにあつたのだが、そこに道路が通ることになつて、翔南中学裏手の小山の中に寄せ墓を造りかえたのだった。メグミがまだ小学生時分のことだ。坊さんが閉眼供養にきて、石屋が土葬の墓から骨を掘り出すのを、部落の子供らと一緒に遠まきに眺めていた。

その時はまだ祖父母も達者で、土地が安かつたのでそんな山の斜面に墓を移したのだが、今はもう年老いた祖父母には山道をそこまで登つて行くだけでも難儀になつていた。

逞しく成長した孫の手によつて、小竹やチガヤやツタカズラなどが力マで切り払われていくのを、年老いた老祖父母が片付ける。そうしながら、この孫娘に養子がきてくれれば佐藤家は安泰なのにと思つ。

「メグミや」ジイジがいう。

「なんな？」

メグミは手を休め、振り向いて体を起こした。首にかけたタオルで黒光りした顔を拭ぐ。

「おまや……」そのあとの言葉が出ない。

「彼氏はまだおらんのか？」と、かわりにバアバがきいた。

「おらん」

といつてメグミはまた力マで石塔にまとわりついたカズラの根を切りにかかる。

「……警察官なら申し分ないがのう」「ジイはひとつひらる。

そこへ賑やかな音楽が沸き起こつた。メグミのジーンズのうじうポケットから。ケータイの着信音だつた。

メグミは力マを放り投げてケータイを取り出した。

「はい。佐藤です」

「……」

「なに——富崎さん？」

富崎芳樹刑事からだつた。意外な人物からの電話に驚いた。ケータイ番号を教えた覚えはない。

「ゴメン！ なにしろヒマだからさあ。俺今、今井孝雄の行確やつてんだけどさあ、あいつ早朝からずっとアパートの部屋にこもつたきり、出てこねえんだよ。昨晚からずっとらしい。いい若い者んがなにやつてんだろうなあ」

「ちょっと、そんな時に公用の電話なんかしていいんですかあ？」

「えへへ。今デカ長がタバコ買いにコンビニに行つてんだよ」

「デカ長というのは、柳井警部補の部下の板井部長刑事のことである。吉賀巡査部長の後任の主任。」

「それにどうしてわたしの番号知つてるんですかあ～？」

「あれ？ 番号交換してなかつたつけ？」

「してません！」

「おーひょひょ。それはえりこーひちや。どうしてだら？ 夢に出できたのかな？」

「交通係で、連絡帳見たんじゃないですか？」

「まあ、そんなことはどうでもいいじゃん。とにかくこの事件は君と俺とで解決するつきやないなと思つてんだよ。みんな頭の固い連中ばかりだから」

「あきれた。どうでもよくあつません。おどかさないでください」

「ところで西今なにしてんの？」

「それこそどうでもいいことです」

墓掃除しているなんていえない。メグミは宮崎芳樹のひょろ長いヒョウキンな顔を頭の中に思い描いた。捜査会議の帰りの車中で居眠つてた顔は、少年のようで悪くはなかつた。

でも普段はキザっぽくて、背が高くスタイルがよくなれば、そう気を引く男でもないけれど、あの時以来なんとなく氣になつた 大いなる矛盾である。

「メグミや、誰からだい」ジイジが心配そうにきく。

メグミはチラツとジイジを見ただけで避けるように遠のいた。鼻の頭に汗の粒をいくつも浮かべ、顔は上氣している。初めての独身男性からの電話だった。そういうことに関してメグミはとても奥手で、引っ込み思案だった。これまで好きな男はいたけど、自分から行動を起こしたことは一度もない。

子供時分にタラコ屋といわれてイジメられたことを引きずつていて、自分の価値を過小評価しているフシもある 可愛いからイジメるという心理もあることを知らない。けど、やはり祖母・おサ

キの嬢が効いていた。男に對して慎み深い女になつていていたのだ。

皮肉にも、そのタラコ唇が、今や彼女の最高のチャームポイントになつっていた。人中深く、形よく上唇が反り返つていて、その朱唇を誰が一番先に奪うか、署内の独身男性どもが秘かに競争しているくらいだった。柳井警部補も狙っているという噂もある。

「ああっ！」と、宮崎芳樹が抑制された声を上げた。

「どうしたんですか？」

「やばいよ、やばいよ。ターゲットが出てきた」

「ええっ？」

「デカ長なにしてんだろうなあ、もう…」

「ケータイで呼び出したらどうですか」

「それがケータイをリアシートに置いて行つてやんの」

「そうなの」

「ああ、どうしよう。どうしよう。バイクに乗るぞ」

「そのまま追跡しちゃえよ。こっちから署に電話するから」

「オーケー。じゃあ、そつする。あとは頼む」

「幸運を祈るわ」

「ほいきたベイビー！ 愛してるよ！」

いつの間にかジイとバアが両側から耳を寄せていた。

タンポポの綿毛よりも軽い男　　というのが女子による富崎芳樹評であるが、悪い気はしなかつた。

そればかりか、自分という存在を気にかけてくれている異性がいるというだけで、気持ちが高揚するのだった。早速刑事課に連絡を入れたから、誰かが板井部長刑事を拾つて富崎刑事を追いかけることだろう。

それがすんで、また墓掃除に取り掛かった。嫌々やっていたのがまるで苦にならず、鼻歌を歌いながら、例年にもなく、石塔に水を掛けた丹念に苔を洗い落とす念の入れようだった。

掃除が終わつて一息つくと、新聞紙で丸めて持つてきたさかき神と、まだ赤くなりきつてないホウズキを備え、ロウソクを灯し、線香を焚いて、三人でお参りした。

木漏れ日の中に、線香の紫煙とにおいが漂つた。カシの枝葉を揺らして、涼やかな潮風が豊後水道を行き交う船音を運んでくる。どこかでヒヨドリが甲高く鳴き、カラスが杉の梢じゅうえで低く唸つた。

祖父母が死んだら、自分はどうなるんだろう？　　という不安

が、幼いメグミの胸に常に宿つていた。学校から帰つても、家に誰もいないことが多かつた。段々外が暗くなつて、八時九時になつても一人とも帰つてこないことが何度もあつた。その時の心細さといつたらなかつた……。

だが今はしつかりと自分の足で立ち、年老いた祖父母を支える力を備えている。もう恐れるものなどなにもない。そのようにメグミの後ろ姿は語つていた。じよつおや墓に手を合わせていても、お祈りすることはない。頭の中に両親の姿を思い浮かべようにも、そのよすがとなるものはひとかけらもないのだ。なにもかもがみんなと違つてゐる——それが佐藤メグミの原点だった。

やがて彼らは帰り支度を始めた。

だが、“行きはよいよい、帰りはこわい”である。獣道のような山道の下り坂は、湿気た濡れ落ち葉などで滑り易く、年寄りの覚束ない足腰では非常に危険である。転んだり、尻餅を突いたりして、骨でも欠けたら即寝たきりになる。用心しながら、一人ひとり手を引いて下りねばならなかつた。クモ猿とオランウータンのような二人を。

下りついた所に、去年買つたばかりの黒いライフが停めてある。そこまで一人を連れてきてホツと一息つく。ケータイを取り出して開いて見る。メールが一件入つていた。

『一乙見ダムの所にて、マルヒ見失う。ただ今捜索中』

富崎芳樹刑事からだつた。

これはえらいことだ。板井部長刑事は課長に大玉玉を食らつ」とになる。そうなると板井部長は腹いせに富崎芳樹に当たる。それが厳しい縦線組織の警察である。なんとか見つけ出して欲しいと思う。といつても相手がバイクじゃ、しかも、乙見ダムといえば人家もまばらなほとんど山の中、追つかけても細い道に入り込まれたら、乗用車ではお手上げだらう。

「ジイちゃん、バアちゃん、悪いけどウチ、昼から田杵に帰るわ。
なんか、大変なことになつちよる」とたる

「バカいうな。今日は休みもろつちよるんじゃろうが?」ジイが声を荒立てていつ。

「うん」

「なら、放つておけ。せつかくバアさんがじつそ(「駆走」)にしらえち食わしちやうと、昨日からしこ(用意)しちよるんど」「
そうじや、夜には津久見ん弥栄子も子供連れじぐむ」とになつち
よる」バアもいう。

「ええ~」

「おまや、刑事になつたけんち、一銭もならん」とたあ、せんでいい
んど」

「近頃、いつも寄りつかせんじ、ジイもバアもそげえ、いつまつてん生きちゃらせんのど。たまには一緒に寝ち、肩ぐらい揉んじくれでん、罰ちやあ当たるめえが」
メグミは「者にとりつかれたよつて溜息をついて、カチャリとケータイを閉じた。

前に続く

その夜は月夜だった。

海に面してひしめくように軒を連ねた家並の中で、とりわけみすぼらしい、狭い敷地いっぱいに建てられた、間口が狭く、奥行きの長い二階家の佐藤家の食卓は、いつになく賑やかだった。

「め～じろん、め～じろん」

と、歌いながらめじろんダンスを踊るあどけない三人の孫と、年頃の光輝を放つ孫娘のメグミに囲まれて、眼をショボショボさせながらチカラやんーーと呼ばれているジイ様は、もうすっかり衰えている焼酎の量をいつになく過ごしている。

おタネバアは尺取虫のように曲がった腰を伸すヒマもなく台所と居間を行つたり来たり。四十一歳の娘・弥栄子は臼^{うす}のように尻を据えたまま、手伝おうともしない。実家に帰つたら、いくつになつても娘に戻つてしまふのだ。

弥栄子には他に高校生の娘と中学生の息子がいる。下の、小学三年生の女の子と、幼稚園児の男の子、保育園児の女の子の三人が今、大分国体のマスコット「めじろん」の歌と踊りを、メグミに囲み立てられて熱演しているのである。

食卓には海の幸、山の幸が多彩に料理されて並べられている。その中には夕方メグミらが岸壁で釣つたゼンゴの刺身にテンプラ、弥栄子が持参した太刀魚の煮付けなども含まれていた。

「メグミちゃん、刑事になつたんぢなえ」と弥栄子がビール片手に訊く。

「うん」

「ほんなら今大変じやね。いざんといでのんびりしどつていいん

かえ」

「そなんよ」

「でん、おかげで墓掃除をすませてくれたしなえ。いやいんもねえ

わ。メグミちゃんが大人になつたけん、もう安心じゃなあ、ジイちゃんもバアちゃんも。ウチも肩の荷が下りたわ

おタネバアがようやく食卓に腰を下ろした。

そして小指を立てていい。

「それがどうもこれができたらしいんじや」

「えつ、ほんとい」

「あーもすかん。違つてばー。」メグミは赤くなつて、盛んに手を振つた。

「それならおばちゃんに紹介してもらわんと

「だからそういうじゃないのー」

「女の子はねえ。心配なんよ。ウチも親になつてようやくわかつたわ。輝子が赤い髪をしたハナグリ（鼻輪）なんぞを連れてきたりしたらどうえしゅうかち、もうから考えるんよ」

「警察官なら、心配ねえわい」チカラやんがい。

「ほうじゃなあ、警察官ならなあ……」

「わかるか。警察官も近頃ろくなやつがおらん。宇田に出没しそうしたチカソは、警官じやつた。メグミはしつかりしたのをあてがわんことに、死んでも死にきれん」

「もうそげな時代ぢやないんよ、バアちゃん。心配いらんぢや。メグミちゃんはしつかりしとるけん

誰も構つてくれないし、チビたちは踊り騒いて、ひとりはメグミに抱きつき、ひとりは食卓に並んだ鳥のから揚げをつまんで走りまわる。保育園児は母親の膝に乗つて甘えた。

メグミは氣になつて何度もケータイを開くけど、あれから富崎芳樹からなにもいつてこない。

「メグミちゃん、事件のほづなつちよるん？」弥栄子が訊いた。

「うん。それがね。見張つてた容疑者がおらんよになつたらしいんよ」

「なんね。その連絡がきただけね

「うん。 そう」

「ウソいいんな。 愛してるよ～とかなんとかいよつたじゃねえか」「バアちゃんな耳が遠いくせに、そんなしようもない」とは聞こえるんじやけん。[冗談じやん]

「うふふふ。まあ、そういうことにしておこうね、バアちゃん」

それから彼らは飲み食いしながら毎度同じ昔話に花を咲かせた。水入らずの団欒は苦しかった過去を笑いに変え、血族の情愛をいよいよ強くした。弥栄子の亭主がいればこうはいかないけど、鉢山技師の弥栄子の亭主は福岡に出張中だった。

夜も更け、飲み過ぎて具合が悪くなつたジイを奥座敷に寝かせて、親子孫三代が仮壇のある座敷に雜魚寝した。

その際メグミは弥栄子から耳寄りな話を聞いた。弥栄子の勤めるセメント工場にかつて勤めていたことのある保戸島の漁師が、また臨時で雇われることになった。そこで漁師小屋に置いてあつたゴム長クツが必要になり、搜したけどなくなつていたという。

みんなが、事件のゴム長と違つかと冗談をいつていた。刑事が聞き込みにきた時聞いた話と、確かによく似ているという。そのゴム長は以前務めていた時、定年退職の先輩にもらつたものだそうだ。

それは調べてみる価値があるなどメグミは思った。そこに今井孝雄の影がちらついていたりしたら、容疑はかなり濃厚になる。保戸島なら目撃者も期待できる。船で行くしかないし、狭い島内のことだ、よそ者は目立つ。

とにかく捜査本部としては、今井のアパートの部屋に捜索をかけたいの一念だが、そのきつかけがない。地域課の警官を個別訪問させても、せいぜい玄関から奥を覗き、二オイを嗅ぐしか術がなかつた。捜索すればきっとなにかの手掛かりを得られると、柳井警部補などはいきまいている。

今井が出すゴミはすべてチェックされている。行確班は、些細な交通違反でも見逃さない。だけど今井はボロを出さない。きつと尾行されているのも承知で、今回富崎らをまいたのかも知れない。バ

イクで十数キロもある乙見ダム付近まで出かけたというのが——普通そんな遠くへはクルマで行くだらう——バイクといつても124CCのスクーターなのだ。

そのきっかけが得られるかも知ないとメグミは興奮した。得てして、寝床で考えることは素晴らしいと思えるものだが。

粘着テープからなにか手掛けりが得られると期待されたけど、確かに友達の会社が使っているのと同じ業務用のテープだつたけど、それと今井孝雄を結びつけるものはないにもなかつた。

黄色いポリ袋にしても、市が使用しているゴミ袋とはなんの関係もなかつた。敢えて関係があるとすれば、「そういうしっかりした素材の、中味が見えない、そして目立つ色のポリ袋がある」というヒントにはなつたかも知れない。

事件に使用されたのは「九〇リットル用で、厚み0・02ミリ×幅900ミリ×深さ1000ミリのまちなし、持ち手なし」で、製造されたのは大阪の「山澄化学」とほぼ断定された。けど、そういうのはどこからでも手に入る。一個口 五〇〇枚入り からでもネット販売されている。

捜査本部は焦っているのだ。いよいよ自分の手中にある手掛けりが光彩を放つて、メグミは興奮のあまり眠れなくなつた。

幼い頃は伯母が色の黒い自分を冷たい眼で見ているような気がして好きではなかつたけど、伯母自身が今の自分と同じくらいの歳だったことを思えば無理ないと思つ。

今は肉親というものがかけがえもなく有難く、その無償の情愛の中で育まれて来たのだとしみじみ実感できた。祖父母が愛おしく、伯母が愛おしく、イトコのチビらが愛おしく思えた。一番可愛がつてくれた兵庫の伯母がここにいないのは淋しいけれど……。

そのような感傷に浸れるのも、本人は気づいてないけれど、宇宙の中心から外れた広大な無の空間に、新たな星が誕生しつつあるからだつた。

やがて、急速に睡魔が襲つてきて、メグミを暗闇の底に引きずり

込む——すんでのところで、捜査会議の時、足立明君が描いた不審人物の絵をじつと見つめていた、別府署の榎原光子という子の姿が浮かんで、なぜか、彼女も孤独なんだという思いが、流れ星のようになれた。

少し遅刻して午前八時半過ぎに出勤した時には、刑事部屋はガラソとしていて、中年刑事が一人いるだけだった。村上といつ三十代後半の頭の薄い刑事がちょうど電話中だった。

村上刑事は「わかりました」といつて受話器を置いて、メグミを見る。

「おはようござります」といつてメグミは壁付廊下側の隅っこの自分の席に向かいながら「みんなどうしたんですか?」と訊く。

「おまえ、呼ばれなかつたのか?」

「自分は昨日休みでしたけど、何ですか? 何かあつたんですか?」

内心は昨日のことだらうといつ思いがありながら、それにしては課長も係長もいないのは変だと思つ。

「みんな大分の合同捜査本部に捜査会議に出掛けたぞ」「えへつ、そうなんですかア」

メグミは取り残されたような、ハバにされたような気分になつた。蒲江から佐伯市街に入った所で事故による渋滞にあり、遅れてしまつたけど、それがかえつて気持ちを昂らせていたのだが——真打は人を待たせてから登場するものだ——それがいつぺんにペしやんこになつた。あの素晴らしい手掛けさえも急に色褪せたものになつた。

力なく富崎芳樹の乱雑な机を見る。メグミの机から一列先の、板井部長刑事のうしろの席だ。

「みんな行つちゃたんですか?」

「ああ、あらかたみな行つた」

「交通係長もですか?」

「トライさんか? トライさんは本業が忙しいから行つてないだらう。下にいるんじゃないのか」

「じゃあわたしがどうすればいいんですか?」

「聞いてない。デカ長、課長にドヤされて頭に血が上っていたから、忘れたんだろ?」

メグミは椅子にへたり込んで、頭を振った。今日は気分も新たにひつ詰めてショーンにした髪を、ポニー・テールのよつに編んで、それをバレーリーナーのように丸めてある。

そうするとウナジが現れて「メグミちゃんはウナジが綺麗ねえ。断然この方が可愛いわ」と伯母の弥栄子が褒めてくれた。口紅なんかいらないほどナチュラルな赤い唇、リップクリームで充分だけど、紅を引いた。

「なんだ、おまえ、泣いてるのか?」

「泣いてなんかいません!」といつていよいよ頭を下げた。

「ははは。デカ長も罪なことするなあ。まあ、俺と一緒に電話番でもするか?」

メグミは勢いよく立ち上がり、大股に部屋を出た。忘れたのではなく、わざとハバにしたのだ。昨日、署に電話したことを根に持つて。

交通課の部屋には忙しい筈の吉賀巡査部長が、つくねんと机に座つて書類に目を通していた。それが本来の姿なのだ。老眼鏡を掛けているので、急に年取つて見える。

近づいて来る佐藤巡査に気がついて顔を上げる。

「なんだ佐藤、おまえ捜査会議はどうした?」

「おいでけぼりを食つたんです」メグミは眼を潤ませていつ。「少し遅刻しただけなのに」

「そうか」

「わたし、なにをすればいいんですか?」

「なんの指示もなくか」

「そう。ひどいわ」

「指示がない時は自分の判断で仕事をすればいい」

「本当に?」

「そうだ。指示で動くよつじや半人前。自分の頭で考えて、指示を

無視しても動くようにならんと、一人前とはいえた

「じゃあ、わたし、保戸島に行つてきます」

「保戸島？ 保戸島になにしに？」

メグミは伯母さんから聞いた話をかいづまんで話した。

「……ほつ」と吉賀は溜息とも感嘆ともいえぬ声をだした。

「ですからこれから確かめに行つてきます、今井の顔写真は持つて

ますので」

「まで！」

「はつ？」

「何か忘れてはおらんか」

「なにをです？」

「刑事は必ず一人で行動する」

「でも、上には電話番の村上さんしかいないですから」

「ここにあるじゃないか、相棒のトライちゃんが

吉賀係長が署長室に行つて、メグミは「一パートの用意をして玄関の前にスタンバイした。よその管内にＰＣを乗り入れることは法度であるが、ほかの車両はほとんど出払つていてないのである。

吉賀巡查部長と下川署長とは釣り仲間だから仲がいい。釣り船は吉賀が持つていて、下川署長とお隣の楠木消防署長ほか何人かで連れ立つてイカやイサキを釣りによく出かける。

吉賀は「ゴム長靴の写真を手に乗り込んできた。

「よし行こう」

メグミはゆっくり車を発進させた。私服で運転するのはなんか落ち着かないものだ。

「急に決ましたんですか？」

「ああ、マルガイがひとり、身元確認ができたからな」

「えっ！ 本当ですか？」

「それに今井孝雄の姿が昨日から見えない」

それは先刻承知であるが、それならそうと報してくれてもよさそうなものだと、富崎芳樹を恨めしく思った。

「じゃあ、ガサ入れできるんじゃないですか？」

「ところがやつは、臼津葬祭に一週間の休暇願いを出している」

「ああ、そうなんですかあ……」

辻のロータリーのどこで元同僚の婦人警官が交通整理をしていた。

「おまえ、昨日休みだったのか」

「はい。墓掃除をしていました」

「そうか。感心だな」

「身元が割れたマルガイはどこの人だったんですか？」

「名古屋」

「えーっ。そんな遠くの人があつして？ どうしてわかつたんです

か？」

「手術痕からな。胸に穴を開けて、冠動脈のバイパス手術をした。今じゃ、家族のDNAから簡単に本人確認ができる。便利な世の中になつたもんじや」

「旅行かなにかでこっちにきていて？」

「その辺はまだわからん。元刑務官としかな

「刑務官……ですか」

「名古屋刑務所のな」

それからしばらく一人は黙つた。トンネルを抜け、津久見市街へと下つて行く。右手には、ピラミッドを意識したとしか思えないようすに削り取られた石灰岩の白い山が聳えている。

軽自動車が中を走れるくらいの大きさの、石灰石を山から工場まで運ぶ丸い鉄管を三つ潜つて市街に入る。

踏み切りを渡るとセメント町 今井孝雄の実家がある町である、三叉路を右に折れてすぐの左手に伯母の弥栄子が勤める太平洋セメントがあつた。そこの大広い門に乗り入れる。

右手の守衛所の前に作業服を着た色の黒い五〇年配の男が立つていた。それが保戸島の漁師、上田保であつた。メグミが交通課から弥栄子に電話して、一〇時に門の所まで出てくるよつといつておいたのである。

事情聴取はPCの中で行われた。

吉賀がまずゴム長靴の写真を見せて見覚えはないか訊いた。

「見覚えもなにも、そりゃわりや、わしのじやがええ」と上田保はいつた。

「間違ひねえな？」

「間違ひねえもなにも、こきキズがあろつ」

と、丸いエンブレムの外側の丸についたキズを指でなぞるように指し示した。

吉賀が大きく息をして、メグミは可愛らしい小鼻を膨らませた。ゴムのようにキメの細かい皮膚が汗を滲ませて光つている。

「ほじやあ、これがのうなつたんをいつ知つたんかえ？」

「こん前じや。四日ん月曜じや」

「いつ頃からそき置いちよつたんな？」

「そうじやなあ……三、四年も前かなあ……」

「この男に見覚えない？」とメグミが隠し撮りした今井孝雄の写真を見せた。

上田保は首を傾げて見ていたが、「こりやわりや、火葬場ん兄ち
やんじやねえな」という。

「保戸島で見なかつた？」

「島じや見らんけんど、そこんビデオ屋じやよう見かけたで
「わりいけど、小屋ん場所教えちくれんな？」

「そら、かんまんで」

「中のぞいてんいいかえ」

「カギもかけちらんけん、勝手にのぞきない」

といつて上田保はメグミが差し出した落書き帳に簡単な地図を描いた。

二人は逸る気持ち抑えて上田保に丁重に礼をいい、津久見署の前を大きな顔で押し通つて船着場に向かつた。

マルショクの前の信号を左折して公園脇を入つた所に、「やま丸」の船着場がある。白いマリンスターが接岸されていた。あまり大きくないけど、カッコイイ船だなど、メグミは思う。実家のボロ船を見て育つただけに。

直近に11時20分発というのがあり、待合室に数人が時間待ちしていた。まだ十一時になつていない。それらの男女と、受付の女子二人と、事務所の中の三人の職員、それに小柄な乗船係員の、全員に写真を見せて聴取するも空振りに終わつた。

それは二五分間かけて渡つた、保戸島の方の発着場でも同じだつた。急傾斜にへばりつくように折り重なつた人家すべてに当たる意気込みだつたけど、早くも先行きが思いやられる。

とりあえず腹ごしらえしようと入つた焼きそば屋で、初めてヒツ

トした。

「知るぐれえかえ、おどをが、初めてこしき店を開いた時からんお得意じや」と老店主がいった。

「えーつー！」

「そらほんとな！」

喜ぶのは早かつた。

「ああ、中学、高校生頃んじつちやけどな」

「近頃は？」

「とんと姿を見せん。でん、少しも変わつちよらんなあ……」

腹(はら)しらえを終えると、一人は氣を取り直して、沿岸部の民家に軒並み聞き込みをかけた。中央の船着場から左に向かつて漁師小屋がある崖つ淵まで。

漁師小屋は釣り道具や網などが乱雑に置かれた何の変哲もない小屋だった。

「あーあ、ダメかなあ……」とメグミが弱音を吐いた。

「あきらめるのはまだ早いぞ。あと半分ある。今井にいの土地勘があるとわかつただけでも大収穫じや」とこつて吉賀はまた元きた道を引き返す。

「それだけではダメですかア」

「それだけじゃあな。せめて、最近ここにきた形跡がないと、ダメだな。あとひと頑張りだ」

やれやれ（大人はどうしてこつ粘り強いんだろう）と思ひながら、でももう自分も二十歳を過ぎた大人なのに、よだきい（面倒臭い）のは変わらないのはどうして？仕事が終わつたらアイスクリームを三個食べてやろうと思ひつつ、メグミは吉賀のあとに続いた。

結局、海岸端では収穫はなかつた。吉賀もさすがにもつ急斜面まで上がる元気はないようだ。肩で息をしている。時刻ももう一七時をまわつていた。保戸島発の最終便は一七時40分だつた。

疲れ果てて、発着場に戻り、一人はそこでアイスを食べながらぼんやり海を見て出発時間がくるのを待つた。

そこへ津久見17時発の船が学生を満載して入港してきた。嬌声が船から溢れ出てくる。

その一人ひとりに最後の聴取を試みる。そして苦労が報われる時がきた。

「あ、こん氏、知っちゃん。知っちゃん」と女子高生三人組が騒ぎ立てた。

「夏休みに入る前じゃけん、七月の二二日だったつけ？」

「うんそう、その日」

「だよね~」

その日のちょうど今頃、今井孝雄が大きなズタ袋を担いで桟橋に立っていたというのだ。

前に続く

勇躍、署に帰還したのが一八時半。

だが、蛍光灯が灯つた刑事部屋には係長の柳井警部補と板井部長刑事しかいなかつた。ほかの刑事たちはまだ駆け回つているのだろうか。

「ただいま戻りました」といつて会釈し、メグミは自分の席に向かつた。

係長席の前に立つて柳井と話し込んでいた板井が早速見咎めた。

「おい佐藤、おまえどき行ちょたんか？ こんクソ忙しい時に」
陰険な猪目で睨まれた。メグミはこの小太りの色の浅黒い男が生理的に嫌いだつた。

「はい。吉賀係長さんのお供をして、保戸島に行つておりました」
そういうふうに吉賀からいわれていた。

「保戸島に？ なんしいそげんとき行つたんか。上司に断りもなく。
おまえの上司はこんおれど」

「はい……でも……」

「それで君はどうして会議にこなかつたんだ？」と、柳井が前に立つていてる板井を払い除けるようにして訊く。

柳井係長は吉賀係長と兄弟とは思えないほどの優男である。

「はい。昨日お休みをいただきましたので、実家に帰つております
て、朝こちらに戻る途中、事故の渋滞に巻き込まれたんです。佐伯
で。遅刻してすいません……」

「それはいい。なら遅れる顔どひして連絡をよこさない」

「はい。すみません」

「あとからでも追い駆けてくればよかつたんだ。君のお気に入りが
お待ちかねだつたんだぞ。山辺刑事部長に、今日はあの子 本当は
色の黒い子 はこないのかといわれた」

「はい。それが……」

「前日の日に寮に戻つておればよかつたんじや。そげなこたあ、いいわけにならん！」と板井が遮り、柳井に向かつて「係長、こげなこつちやあ困ります。うちの子を勝手に使われたんじや、こひたちの立つ瀬がありません」

「それで、保戸島にはなにしに？」

「はい。例のゴム長靴の件を調査しに行つてまいりました

「といふと？」

「津久見の太平洋セメントで働く臨時従業員がですね。保戸島の漁師ですけど。事件のゴム長と似たゴム長を紛失していたことを、最近知つたという情報に基づいて」

「ほう……その情報はどこから？」

「さあ、それは知りません」

そういうように吉賀にいわれていた。この大手柄はトラちゃんの手柄にしておけ。見る人はちゃんと見ている。神様はちゃんと見ているから、少々太めの神様だけど。

「それでどうだつた？」

「はい。確かに同一のものでした。上田保という元漁師が太鼓判を押しました

「なにつ！」

「そら本当か！」

「はい。しかも、事件発生三日前に、今井孝雄が、ゴム長靴を置いてあつた漁師小屋のある保戸島の桟橋で、女子高生三人に目撃されていました。今頃、鑑識さんが小屋で鑑識作業している頃です」

「そげんこつう、係長！」

「あんやつがせまぎつち、そういうことをするんじや」

「わたしらの立場はどうなります」

「課長にゆつちやらな、ならん！」

その課長が部屋に入つてきた。

「おい！ おまえら、大事じやあ

大きな頭を搭載した短躯^{たんく}が、放屁のようにそれらの言葉を吐きな

がら執務机に向かつた。ふたりも慌てて山崎課長のところに駆け寄つた。佐藤メグミはようやく解放された。

自分の机に戻つて、報告書を書きながら彼らの話に聞き耳を立てる。

「明日早朝に今井孝雄の部屋にガサ入れる」

「やつぱ本当だつたんですか」

「誰に聞いた？」

「佐藤に」

「ああ、佐藤か」

「課長、こげんことされたらわたし！」

「ああ、わかつちよる。わかつちよる。これには署長も関わつちよることじや。気にすんな。なにしろ署長は、特別捜査本部副本部長のひとりじやきい。トライちゃんはその差配で動いただけじや」

「ああ、そうですか。やうじやひつ、やうじやひつ。トライさんにしては出来過ぎじやと思つた」

メグミは可笑しくてならなかつた。世の中には度量の大きい者がいれば、料簡の狭い者、捻じ曲がつた者、など色々おる、その人間関係の中をスイスイ泳ぐようにならんと、窮屈になるーーと、吉賀の親父はいつた。

そこへ。

「おーひょひょ」という声がしたかと思つたら、ドヤドヤと捜査員らが帰還してきた。

富崎芳樹はチラリと佐藤メグミに一瞥くれただけで、自分の席に着いた。メグミもそれは感じた。

やがて、雑然とした部屋に、山崎課長の重低音の一聲、「よおし、みんな静かに！」が発せられた。

みんなが席に着いて静まると、山崎警部は佐藤メグミのほうを見て、「君ちょっと立つて」といった。

なんのことかわからず、メグミはおずおず立つた。眼の端に富崎芳樹が首を捻じ曲げて見ているのが入つている。

「署長賞がでた。おめでとう。今日は遅刻したおかげで、儲けたんだからといって、遅刻はいかんぞ」ポカンとしているメグミに、「座つてよろしい」という。

みんなもなんのことだかわからない。金一封が課長から柳井係長に手渡され、柳井によつて佐藤メグミのもとに届けられた。たいがい一万円が入つてゐる。メグミは顔を赤らめて受け取つた。

山崎課長は満足そうに手もみを始めて、かわりに柳井警部補が立つていつ。

「お疲れのところ恐縮だが、これより、一〇時から、臨時捜査会議を行うことになった。署長も同席する。早く書類整理をして遅れないようになにか用意して貰う。夜食はでます」

みんなから溜息が漏れた。

会議では冒頭、下川署長によつて、遺体の脚が入つっていたゴム長靴の持ち主が判明したことと、それの紛失とマルビの今井義孝の関与が濃厚なことなど、吉賀巡査部長と佐藤刑事の活躍が報告された。鑑識による裏付けはまだ取れないものの——微物検査の結果がまだである——ゴム長は持ち主に見せて、確認すみであることも。

驚く捜査員らはこれで事情が飲み込めて納得。改めて恨めしそうに佐藤メグミを見た。「おれどうが会議に行つちよる間に、遅れちきちかり、調子のいいやつちやのや」という声が聞こえてきそうで、メグミは首を竦めた。

続いて山崎課長がいう。

「明日の朝六時にガサ入れするぞ。それから今井孝雄のバイクを見失つた乙見ダム周辺から、青江ダム周辺までの山野を、津久見署や野津署、地元消防団などの協力もあおいで、犬を使って山狩りをやる」

捜査員らは正面の壁に貼られている大きな管内地図を眺めた。県道204号線沿いの東河野から上青江にかけては、俗に「世界の外」といわれる辺境である。西河野は野津署、上青江は津久見署管内になる。「姫岳 620 から碁盤ヶ岳 716 んねき 傍 まで」となると、「いらやおねえなあ……」と誰かがいつ。

「心配せんでん、諸君らは今まで通り、ガソリンスタンドを中心に道路端の聞き込みをしてくれりやあいい。そこでじや」といつて、山崎警部は、「うちからも一名名古屋に出張してもらうことになつた。遺体の脚の資料を携えてな。愛知県警の捜査本部が待つてござるそつな。大分・別府からは三名行くそつだ」

捜査員らはささめいた。出張ともなると息抜きができる。とにかく歩き通しでぐたびれていたから。特に若い連中は色めいた。

「その中に女性刑事が一人いて、やはり女性は女性同士のペアでな

いと、寝泊りするのに不都合が生じる。トウモロコシにはいないだろうなと見回して、「もつトウキビ トウモロコシ ん枯葉んごつなっちしまえ、そげな心配はいらんけどな」みんなゲラゲラ笑つた。佐藤メグミはドキッとした。

「佐藤！」と警部が呼んだ。

「はいっ！」と反射的にメグミは立つた。

「君に行つてもらつ。これは署長命令でもある。君のペアの相手は、別府署の榎原光子というーーそういえば年齢的にも似てるなーー女性刑事だ。これに、このほど担当になつた地検の東浜明美検事が加わつて、女性三人で行動することになる。だいたい一週間くらいの出張になるからそのつもりでし」 支度 するよう。詳しい指示はのちほど柳井係長からあるから。わかつたな

「はい！」

「よし。座つてよろしい」

みんなからブーイングの声が漏れた。ゾウガメのような下川署長と、深田の石仏のような山崎警部は、一一七七した顔で佐藤メグミを見ている。

それから約一時間かけて会議は終了、弁当を食べて、三々五々刑事らは家路についた。メグミはそのあと柳井警部補から出張の段取りの説明を受けたので、帰りがみんなより30分遅れた。

メグミは高倉に帰つて、早速、伯母の弥栄子に電話した。おかげで署長賞をもらつたことと、名古屋に出張することになつたことを報告した。大そう喜んでくれた。

それから蒲江にも電話して、同じことを報告した。

「おまえ名古屋ちや、とうてん遠いところじやねえか。一人で行つきんのか？」と、バアバは心配そうにいった。メグミは中学・高校の修学旅行に行つてないから、九州から出たことがないのだ。

「馬鹿にせんでよ。それに一人じゃないし」といつて電話を切つた。

なんだか大変なことになつたなと思ひながらメグミは旅支度を始めた。小学生の時に社会見学で雲仙指宿阿蘇に行つたことがあるくらいで、泊りがけで旅行など行つたことがない。だからバックからしてないのだ。

それをいふと、おそがけに津久見の弥栄子がキャリーバックを届けにきた。

「ウチのが使つてたやつじやけん、男物だけどいいなえ。まだ新しいんで。いんね、大き過ぎるけんち、ほとんど使わんうちに、こんめえのに買い換えたんよ。女は色々着替えもいるし、これくらいないと」

黒色のキャスター付の大物だつた。フレームもしっかりしたのが付いてるので移動に負担がかからない。ちょっと大きいなと思ったけど、贅沢はいえない。中には色々と心尽くしの小物が入つていた。

「あんた朝が早いんやう、ちゃんと田舎ましかけとかんど、寝過ごしたら大変で」

「うん。でも、それより、ウチ、飛行機ちや乗つたことがないけん、そのほうが心配やわ。キップは乗る時渡すんやうか」

「誰と行くんな？」

「ウチと同じくらいの子と、検事さん」

「じゃあ、検事さんのする通りにすりやあいいわ。そん氏は男氏な

？」

「ううん。ふたりとも女」

「それなら、気兼ねせんでいいわ

といいながらやはり弥栄子も心配そうにしていた。田舎の年寄りだけの家庭で育つた子である。恥をかくようなことにならねばよいがと。成人式の日に、お祝いを兼ねてデイナーを駆走し、ナイフ

とフォークの使い方は一応教えてあるけど、見かけ外人だけに、間違えたらシャレにならない。

餌別を少しやつて弥栄子は帰った。

伯母が帰つたら、何だか急に淋しくなつた。

(どうして署長は自分を指名したんだろう?)

女性刑事ならもうひとりおばさん刑事がいる。これからだという時に、自分だけ蚊帳の外に出されたような気がした。

でも反面、見知らぬ世界に出掛けるときめきはあった。自分だけが選ばれたという誇らしさもあった。若い連中からは羨望の眼差しで見られた。

そこで、富崎芳樹の姿が思い起こされた。都合のいい時だけ電話をよこしてあとは知らん顔とは、やはり軽佻浮薄な男なのだ。

いつものようにビールを飲みたいところであるが、伯母ではないけど、寝過ごしたら大変。朝一番の電車で大分駅まで行く予定だった。大分駅で検事らと落ち合い、駅前のエアライナーから空港に向かうことになつていて。

搭乗券その他の手配は総て整つていた。ということはもしかして、署長よりはもっと上の——まさか刑事部長の指名なのではないか——などという思いもチラリとした。

自分は不思議と年配者の受けがいい。学校の先生にもよくヒイキにされた。小学校の先生には「佐藤君のはいつも魚ばかりだな」といつて、自分の弁当のオカズから牛肉やカマボコやチーズなどをわけてくれたし、給食が始まつたら残り物をそつと空の弁当箱に入れてくれた先生もいる。中学では運動会の賞品の余りのノートやエンピツをくれた先生もいた。それらはみな欠乏したものだつたから本当に嬉しかつた。大商の美術部の佐藤先生には「君の絵は無限の可能性を秘めているな。仕上がりが楽しみだ」といわれていつも褒められた。だから恐くて完成したためしがない……。

ベットに寄り掛かつてそんな思い出に浸つてゐるうち、まだ旅支

度の途中だというのに、風呂にも入っていない、メグミはいつしかそのまま眠り込んでいた。

そして少しエッチな怖い夢を見た。

……？

あの火葬場の男に追い駆けられる夢だつた。どんなに逃げても先回りして現れる。つかまえられたらどんな目にあわされるか想像しながら逃げた。というかわかつていて。逃げに逃げ、ようやく逃げおおせたと思つたら、いきなり目の前の藪から現れて、ドキッとしたところで目覚めた。

それからぼんやりした意識の中で旅支度がまだ済んでないことを思いながらも、風呂に入つてないことも、怖くなつて着てているものを脱ぎ散らかしてベットに潜り込んだのだった。

ベットに入つてからも悪夢の余韻は続き、吉賀係長の話を思い出した——テッド・バンディーの話である——そして自分でもその方面のことを調べたことが次々に頭に浮かんできて、メグミを脅かした。

そういう手合ひは死体に異常な愛着を示す。テッドは切り取った頭部を持ち帰つたし、ジョン・ウエイン・ゲイシーは自宅の地下に何十人もの死体を埋めてコレクションしていた。エドガー・ゲインは殺した女の皮を剥いで、それで家具を表装したり、服地にして着込んで所有していた。彼は暴君だつた母親になりたかったのだ。

それらのおぞましいネクロフィル、死体爱好者、や、ほかにもハストモルド、淫樂殺人——殺人で性的満足を得る、モルドラスト、殺人淫樂——殺すまで性行為をするなどの異常性愛者や、究極的には食べて所有するカリバリズム、食人症に行き着く。

日本ではまだそういつた異常者は数少ないけど、カリバリズムはいたし、ある犯罪者は少年の頭を切り取つた瞬間に射精したと供述している。

勿論、彼女にそういうた願望が禁圧されているわけではない。若い女性のリピード、性本能のエネルギーがそういうものを材料——たまたまそこにあつたから——にして夢の扮装を凝らしたのである。

り、自我が その正体があからさまになることを恐れたのである。

(……怖い夢見たな。なんなんだらう、縁起でもない)

とうとう眠れなくなつて——それでももう時刻は三時を過ぎていた——メグミはふんぎりをつけてシャワーを浴びに起きた。いつもでも怖がつてもいられない。これからそういうた恐ろしい相手と対決しなければならないのだ。身命を投げ打つても、足立明君や薰ちゃんを守らなければならぬ時がくるかも知れない。

「——おい！ そこにいるのはわかつてゐるんだぞ！」といいながらベットからしなやかな体を下ろして、「丸腰だと思つなよ。これが見えないか！」といつても黒いショーツ一丁である。「スミス&ウエッソン・M37オートマチックだ。容赦しないぞ！」

と、伸ばした両手で銃の形を作り、腰だめに構えながら、カーテンを引き開け、押入れや、隣りの居間や、キッチン、トイレ、バスと、点灯しつつ、のぞき見る。

「お願いだから皮を剥ぐのはやめて……あたしのは少し黒いから。それにまだ経験ないし。きっとよくないと思う

などといながらバスタブにお湯を入れて、聞き込みで疲れた体をその中に横たえた。

風呂の中では三〇分間くらいうつらうつら舟を漕いでいたが、こくんと首を折ったところで目覚め、シャワーを浴びたら、サツパリ本格的に目が覚めたようである。

鏡台に向かう。髪をどうするかでちょっと迷つた。伯母さんに結つてもらつた髪型は自分でも気に入つたけど、なにしろ面倒臭い。見てくれる者もいないし、元のままひつつめて一纏めに巾着を締めるように縛つた バアバの巾着から五〇円盗つてアイスキャンデーを買い食いしたことがある。それでせいせいした。

あわただしく旅支度を整えて、フレンチトーストを頬張り、コーヒーを飲んでいると、目覚まし時計が五時を指してうるさく鳴つた。ベッドヘッドの上に置いたそれを止めてまだなにかうるさい音がしていた。

ケータイの着信音だった。タオルケットの上で地団駄を踏むよつに騒がしくしている。開いて見てメグミは驚いた。

「——おーひょひょ！ お目覚めでしょうか？ お嬢さん」

富崎芳樹だつた。

「ちょっとなんですか！ こんな早く！」

「起きてたの？」

「起きてますよ」

「寝過ごすといけないと思つて」

「そんな心配いりません！」

「電車は何時で行くつもりかな？」

「6時10分ですよ」

「それだと大分駅に6時55分に着いちゃうよ。待ち合わせは何時？」

「8時です。Hアライナーが8時30分発だから」

「一時間もどうするのよ」

「遅れるよつといいやないです。それに、もし間に合わなかつたらそのあと、6時33分のに乗ろうかと思つてるんだから」

「それだと7時21分に着いちゃうよ。鈍行で4・50分もかけてどうすんのよ」

「ほつといてください。それになんですけど、マルヒを見失つたあとどうなつたかも報せてくれないで。気をもんだんですから」

「あれ？ 君、パソコン開いてないの？ メールしといたんだけどねア」

「えええ～、びびつしてわたしのアドレス知つてるんですかあ～」

「これでも俺刑事だもん。それぐらい調べられないでびうすんだようーーなぐんて、ウソ。 ゴメン！ デカ長に散々ドヤされて、腹いせにこき使われて、腐つてんだよ」

「わたしが署に電話してチクツたせいですよね」

「そ、そうじやないよ。なにも君に腹を立てたわけじやないよ」

「わたしだつて散々イビられたんですから」

「なにも君にまであたらなくとも——あの親父本当に陰険なんだから。それにしても君、ラッキーだったね。みんな羨ましがってるぜ」

「わたし、今忙しいんですけど」

「わ、わかった。あとでまた、詳しい情報をメールするから。本部の会議のことなんか」

ふざけてばかりの男だと思つたけど、まともなところもあるんだとメグミは思つた。

「駅まで車で送つて行こつか」というのを——自慢のレクサスSCで——断つてタクシーで日杵駅まで行つた。歩いてもたかだか一〇分前後の距離、同じ官舎からそろつて出掛けたら、みんなになにいわれるかわかつたもんじやない。

予定通り6時10分発の日豊線上りの鈍行に乗つたから、大分に7時ちょっと前に着いた。

天候はまあまあの天気。気温はしかしも「三〇度近いのではない

かと思わせる暑さ。

駅の待合室の座席で持参したマンガ本を読んでいると、前の人^がいる気配がしたので顔を上げる。と、ミント色のパンツスーツ姿の女が聳えるように立つていた。

(——カツコイイ—)

会議の時にちょっと挨拶を交わした神原光子という女性刑事だつた。

「はあ——い」と照れた顔でメグミは粗棒に片手を上げて挨拶した。神原刑事は日焼けした顔を心持ち緩めただけで、キャリーバックのフレームを押し込んでから、メグミの横の椅子にどっかりと長い脚を投げ出して腰を下ろした。

(なによ! ひとが挨拶してゐるのに……)と思ひ。(ここにつ体躯会系だな)とも思う。

そこへ上品な顔立ちの婦人がカツココーヒーを両手に持つてやってきた。東浜検事だろうかと思う間もなく。

「「一ヒーはいかが?」と差し出された。「それとも炭酸飲料水の方がよかつたかしら」

「いえ、いただきます」

それにしては着てるものは普通のカジュアルなおばさんルック。榎原刑事にも渡して「検事さん遅いわねえ」という。

「いいからママもう行きなよ。遅れちゃうよ」と、かすれた低音で榎原刑事が初めて声をだした。

「駄目よ。検事さんにお世話になるんだから。ちやんと」「挨拶してもおかなくちゃ。あんたハンカチにティッシュはちやんと持つた?」

（なんだ、こいつマザコンかあ……）

と、思つてると、「おたくは国際交流かなにかで?」といきなり振ってきた。

「は? いえ」

「ママなにいつてるのよ、この子日本人じゃん

「あら、そうなの? 隨分日に焼けてるのねえ……スポーツはなにを?」

いつもメグミは苛立ちを覚える。今回は、いつそドレッソード・ヘアにしたろかと思つた。

「わたし、文化部でしたから……」

そこへ東浜明美検事がゴロゴロとバックを引いて現れた。

（キヤア! マジ? 超美人だわ……）

「検事さん、いつも娘がお世話になつてます」と榎原刑事の母親は検事に頭を下げる。

「あら、お母さんお見送りですか」といつて検事も頭を下げ、まわりを見まわした。「田杵署の佐藤刑事はまだのようね」という。

「なにいつてるの、田の前にいるじやん

「え?」

「お世話になります。田杵署の佐藤メグミといいます」

東浜検事もまじまじとメグミを見た。榎原刑事は検事にタメ口を利いてるし、ふたりとも背が高くスタイルがよくて輝いてるし、な

んだが自分が田舎からでてきたような、高校の時感じたのと同じ肩身の狭い思いがした。

黒いビジネススーツ姿なのでいつそう感じた メリハリでは負けていなかつたのであるが 。東浜 明美検事はベージュのパンツスーツ姿だつた。

大分空港からANA 10時55分発1852便で中部国際空港まで約一時間の飛行だった。一二時過ぎにはもう本州のど真中に立っていたのだ。タラップを上つたり下りたりするのかと思つたけど、いつの間に機内に乗り込んだのかさえわからないくらいで、窓がなければバスや電車と大して変わりないとメグミは思った。空港には県警の車が迎えに来ていた。それに大分空港で合流した本部一課長の高城警視と中央署の殿村部長刑事を加えた五人が乗り込む。高速道路や自動車専用道路を幾つか乗り継いで、四〇分かかって名古屋市中区三の丸に着いた。

その間みんな口数は少なかつた。東浜検事と榎原刑事がボソボソ話すくらいで、知らない人には殊更自分から溶け込もうとする佐藤メグミも——そうしないと誰も向こうからは近づいてくれないのだ——山から往来に飛び出たイノシシのように戸惑つっていた。

まず以つて相棒の榎原光子がとつつきにくい女だった。話しかけても、きりつとした顔をゆっくり上下させるだけで、手応えがない。東浜明美検事も自分から話しかけるようなタイプではなさそうだった。

息苦しいような沈黙の車中だった。助手席に乗つたメグミは見知らぬ土地をただぼんやりと眺めた。旅情をかき立てられた。

「君が佐藤君か」と車から降りた時高城警視が声をかけてくれたのは嬉しかつた。本部の一課長に名前を呼ばれるなんて、それだけでも光栄だつた。なのに警視は「大手柄だつたな。部長も褒めてたぞ」といった。

「はっ?——はい」メグミは赤面して下を向いた。

ちゃんと話が今まで通つっていたのだ。榎原刑事はなんのこと違うという顔で警視とメグミを見た。高城警視は彼女には声をかけなかつた。

法務合同庁舎内の名古屋地検に向かう検事とは一旦別れて、メグミらは名古屋城が間近に聳える県庁舎内の県警本部を表敬訪問してから、特別捜査本部が設置されている津島署に向かつた。

途中、国道沿いのレストランで昼食をとつた。食後のひと時、親父連中はタバコを吸いに一足先に店を出て、喫煙場所があるビルのロビーに行き、メグミと榎原光子刑事の二人が取り残されて、コーヒーを飲みながら寛いだ。まだ打ち解けない二人は視線を合わせることなく、所在なさそうにしていたが、榎原刑事がケータイで誰かと話し始めたので、そこでメグミは搭乗する際にケータイの電源を切っていたことを思い出して、電源を入れた。するとメールが三件も入っていた。どれも宮崎芳樹からだった。

なんだか救われた思いがした。自分から自分のケータイにかかるようセットしておいて、さも友達や彼氏・彼女からかかってきたかのように装あう孤独な連中がいるくらいだ。

一件目は10時12分——『電源を切つてるとと思うけど、大事件です。今井のバイクが上青江の山林の中で発見された！ その付近や青江ダムを大捜索中であります。本官も急遽向かう』

「やつたあ！」とメグミは叫んだ。

そして、「えつ？ なになに……」

一件目は10時30分——『大大事件です。今井孝雄のアパートの部屋のガサ入れから、彼以外の者の血痕を発見！ ああ、なんで君はこっちにいないの！』

「キヤ！ なにこれ？ えつ！ マジ……』

三件目は13時25分——『今井孝雄の水死体を青江ダムで発見！ オーマイゴード！』

「どうしたの？」榎原光子が見つめていた。

「これ見てよ」メグミはケータイを突き出して見せた。

前に続く（前書き）

他の小説が脱稿前だったのとそちらに心血を注いでいて、本作がひと月ばかり間が開いてしまいました。

ので、ざつとこれまでのあらすじを述べさせていただいてから始めたいと思います。

——バラバラ殺人事件の犯人を知る為に、担当検事の東浜明美検事が同じ一覧双生児の妹・宵美に会いに拘置所にやつて来るところから物語は始まります。

犯人も一卵性双生児の片割れで、一人に共通するのは良心がないこと。しかも妹の宵美は姉の自分に殺意を帯びた敵意を抱いてさえいることに絶望します。

そして、話はその一年前に遡り、バラバラ事件が発生したところから事件を追い、犯人逮捕に向かいます。

混血刑事の佐藤メグミと、犯人と深い係わり合いのある榎原光子刑事、そして東浜明美検事の三人が名古屋に出張して来て、いよいよ犯人の影を追うことになります。

メグミと光子がメールを見て騒いでいると、殿村巡査部長が血相を変えて飛び込んできた。

「おい！ 君ら、悪いけど、ゆつくりしてもいられなくなつた。行くぞ」

「え～っ」期せずしてふたりとも同じ声を出した。食事休憩は一時までということだったので、まだあと一〇分ある。

「もしかして今井孝雄の水死体の件ですか？」とメグミは殿村にもケータイのディスプレーを見せた。

「ほお～、情報が早いな。そうだ」

そういうえば空港でも高城警視と殿村部長は それに東浜検事も加わって ロソロソ話していた。彼らにも逐一情報は入つていたに違いない。

メグミは鼻が高かつた。「もしかして、カレシ？」と榎原光子にいわれたことも含めて——「ううん、違う違う！」と否定しながらも悪い気はしなかつた——幹部と同じ情報を手にしていることがである。気後れしていた榎原光子の目の色が変わっている。東浜検事もいればよかつたのにと思う。

「なに？ どういうこと？ いつそんなに捜査が進展したわけ？」

先だっての捜査会議では何もいってなかつたじやん「歩きながら榎原光子が訊く。

「うん。知つての通り、行確はずつと以前からやつてたけど。でも容疑が固まつたのは昨日。それで今日ガサ入れしたんだ」

その大手柄は吉賀係長と自分である。それがなければガサ入れもないし、山狩りもしなかつただろう。バイクや遺体の発見は偶然によるしかなかつた。少なくとも休暇願いが出されている一週間が過ぎるまでは。

「じゃあ、マルヒは捜査の手が身近に迫つたのを感じて逃げたわけ

だね

「うん。それがね、…… そうなのかなあ。まだ容疑が固まる前だつたし…… 監視されていたのは感づいていたかも知れなけど。

でも職場に一週間の休暇願いを出していたから、またなにかやらかす矢先だったのか、それとも逃げる為の時間稼ぎだったのか——そこのことはよくわかんない。失尾してたのよ」

いよいよ宮崎芳樹の責任も重大になってきたなと思う。板井部長も頭を抱えていることだろう。

榎原光子は、佐藤刑事がどの部分で刑事部長に褒められるようなことをしたのだろうかと、それを訊きたい風であった。

だがその機会もないままふたりは待っている県警の覆面車に乗り込んだ。

県警の刑事は屋根に赤色灯を貼り付けて、ひと唸りさせると、ヒステリックな音を掻き立てながら緊急走行で突っ走った。緊急走行には興奮させるなにかがある。天下を取つたような気分にもなる。

津島署の捜査本部になつてている会議室では、県警本部一課長の三雲警視が先乗りしていて、所轄の警部や警部補ら——それになぜか警視庁の警部もいた——と彼らを待ち構えていた。

彼らが到着すると慌ただしく名刺交換がなされ、談笑しながら今度は地検の担当検事らの到着を待つ。

ほどなくして、ダークスース姿の名古屋地検の検事と事務官、それにベージュのスーツ姿も華やかな東浜明美検事らが到着した。また慌ただしく名刺交換がなされた。名古屋地検の検事は小堀といい、その名の通り小柄で顔が顎に向かって細まっていた。チタンフレームのメガネが知的に見せた。事務官の方はでっぷり太つた男で蟹江といった。ふたりとも三〇代半ばの中年。

「の字型に並べられた席に、大分県警サイドと愛知県警サイドの捜査員が向かい合わせに座り、正面の席には愛知県警の三雲警視と大分県警の高城警視が並び、警視庁の本母警部と検事らはオブザー

バーのように数の少ない大分県警サイドの末席についた。

そして午後三時に合同捜査会議が始まったのである。

まずは所轄の角田警部が、大分で遺体 の一部 となつて発見された元名古屋市刑務所・刑務官の最上七男 四五歳 の、基礎調査と失踪時の模様を語った。

それによると、最上七男の最終学歴は中京大付属中京高校で、卒業後名古屋市港区の住宅機器会社に就職したものの、三年勤めて辞め、刑務官試験を受けて名古屋刑務所の刑務官になった。

そして六年前に同刑務所内で受刑者が懲罰中に死亡するという事故があつて、それに係わった三名の刑務官が特別公務員暴行陵虐致死罪に問われ、看守部長の最上もそれに連座した。彼が最も重い懲役二年・執行猶予三年の刑を受けて最高裁まで争つたが、今年の五月にそのまま刑が確定していた。

「最上七男が失踪したのが七月一〇日の一三時五四分です。勤めていた名古屋市中村区の建設会社の飲み会の帰り、名古屋から津島の自宅まで三人の同僚とタクシーで帰った。国道68号線を通つて七宝町でひとり降り、日光川を渡つた所でもうひとりが降りた。彼の家は諏訪町ですけど、古川町に寄る所があるからといって、藤江寺の方へ行く丁字路で降りたまま、そのまま消息を絶つた」

「その寄る所というのはどこか特定ができたんですか？」大分県警の高城警視が訊いた。

「それがようわからんのです」角田警部が答える。「家族の者もそこの辺には知り合いはない筈だと」

「すると最後に会つたのがタクシーの運転手で、その前が同僚ふたりということですか。その同僚ふたりにも心当たりはなかつたわけですね」

「ええ。ほんたで、タクシーの運転手が車を旋回する時、藤江寺に向かう細い道に立つとる人影をちらつと見たとーーその人物がもつかのところ唯一の手掛かりとして」

「ほう。どんな人物でした？」

「それが白っぽいツバ広帽を被つてサングラスを掛けとつたから顔はよう見えなかつた。服も白っぽい服で痩せ型長身、男か女かの判別ははつきりしない——」

メグミはドキッとした。足立明君が目撃した不審者に似ている！

「そうですか。会社のほかの同僚にも心当たりはないわけですね？」
「いや、それが、前の日に会社に女の声で電話があつて、これを事務員の女性が受けている。生憎最上七男は現場に出ていていなかつた。夕方帰社した頃合いを見計らつてまたかかってきて、最上が出て五分間位話していた」

「着信記録はどうでした？」

「それが生憎すぐ近くの公衆電話からでした」

「ふむ」

「それ以後のガイシャの足取りは？」

「それが神隠しにあつたようにぶつつりと、まつたくつかめないまま——です」

「車はどうでしたか？」

大分県警サイドから質問に割つて入つたのは佐藤メグミだつた。
思つたことはつい口に出してしまつた女である。それから恐縮し、臆面を見せて、首を竦める。みんなの視線を集めて。

角田警部はエラの張つた顔を色の黒い女性刑事に向けた。

「……いえ、その怪しい人物の足はなんだつたのかなつて、思つたものですから。仮に拉致するにしても、やはり車でないと」

「いい質問だね。でも、なにしろひと月近く前のことですからね。常時その近辺に路駐されている車には当たつてみましたがけどね。そういうのは持ち主の特定ができた」

「白い乗用車はなかつたですか？　たぶんセダンタイプじゃないかと思うんですけど。遺棄現場近くの小学校で目撃した生徒の絵からするとそんな感じなんです。あまり当てにはなりませんけど。色が白かったというのは複数の児童の証言ですから、これは間違いない

と思います。残念ながら車種や排気量はわかりません」

「白いのんは、路駐のステップワゴンが一台と——これはタクシーの運転手が丁字路で車をコーナーで止める際に、南向きに二、四台駐車してあつたうちの白いそれだけを覚えていたんですけどね——ほかには、そう、そう、その日の夜、すぐ近くの集会場の駐車場に、白いトヨタのベルタが駐車してあるのを、前の家の住人が目撃していました。どうしてそんな前のことを見えているかというと、古川町の集会があつた際に、無断駐車の話題が出たばかりだったから、気を付けて見ていたんだそうです。見かけたのは一〇時半頃、朝にはもうなかつた」

「ベルタはセダンタイプですよ」と津島署の刑事が付け加えた。

思わず 符合にみんなは隣近所で顔を見合わせた。

メグミはハンドバックの中から足立明君が書いた絵のコピーを取り出してみんなに見せるようにかざした。

「そしてこれが目撃者の少年が書いた不審者の絵です。小学校で目撃した児童らの証言によつても、衣装や姿を変えてましたけど、これによく似ています。先ほどの、こちらでの不審者ともよく似ていますよね」

「いやしかし」と、愛知県警本部一課長の三雲警視が遮るように口を出した。「ダム湖で水死体で発見された容疑者は——」「

これを引き取つて、高城警視が立ち上がつていった。

「この一連のバラバラ死体遺棄事件には複数の人間が関与している、かなり大掛かりな事件と見なければなりません。すでに四人が殺害されておりますけど、まだまだ増えることだって考えられます。ひとりふたりの変質者による愉快犯的な犯罪ではなく、変質者が関与していることは確かですが、犯人からのメッセージによると、なにか目的を持つ複数犯の広範囲に渡る事件だということです。そしてそれは、ある特定の人物に見せ付ける為のものかも知れません。ですから、殺害されたガイシャにはなにか共通点があるはずです。そしてその共通点が犯人らの動機ということになります」

「なるほど、そうすると、最上七男の身辺に失踪者がいれば」と二雲警視が早合点した。

「いえ、そうとも限りません。共通点があるにしても、接点があるわけではないかも知れません。ある特定の人物——犯行声明では老翁ということになつておりますけど——その老翁とガイシャとは直接・間接になんらかの接点があるはずですね」

「うへん、なんだかややこしい事件だな」と二雲警視は腕を組む。「ガイシャに共通点があるだけに、糸口が見つかれば案外早いんじやないですか」と高城警視。

「ともかくそのツバ広帽の女——といつていいのかな、その共通項は気になりますね」と愛知県警サイドの筆頭にいる角田警部がいえば、「だな。早速こっちもその絵を拝借して「ペーしてばら撒こう」と二雲警視がいう。

それから休憩を挟んで会議は一時間ばかり続いた。その間、榎原光子は男のように腕を組んで、長い足を投げ出して、なんの発言もなく、聞いていた。

それを小堀検事がちらちら見て、東浜検事となにやら小声で話していった。

最後に警視庁の本母警部が相撲取りのような巨体を起こして、口ピ一用紙に書かれた絵を掲げて見せた。

それがまた足立明君の描いた絵によく似た人物像だった。

「つかの管内で起きた失踪事件の容疑者はこんな感じの人物でした。これはまず最初に目撃者が描いた絵です。ちゃんとした似顔絵はできておりますので、のちほどご覧に入れましょう。髪は茶色の長髪、服装はカーキ色のサマースーツ、ツバ広幅にサングラスという装いの、男でした」

「男？」

「男ですか？」

誰ともなくつぶやいた。

「すぐ傍で見た者がそういうのですから。まあ男女の区別がつけにくい昨今ですからな。実際にはパンツの中味をのぞいて見なきゃ早計にはいえない」

クスクスッと笑いが漏れた。メグミもそのひとりだった。ヒグマのような恐い顔でいうから可笑しかった。その時もう馴れ馴れしく隣の榎原光子の組んだ腕をつかんでいた。

その榎原光子はクスリとも笑わないでじつと腕を組んでいた。

それにもよく似ている。みんなはキッネにつままれたような顔でその絵を見つめた。

本母警部は続けた。

「失踪しているのは、とある大物代議士お抱えの運転手です。といつても、非公式な秘書兼ボディーガードもある、きわどい人物です。裏社会との繋がりも深いというか元々は右翼。自宅マンションからわずか一キロにも満たない距離の議員会館まで、歩いてお迎えに行く途中に行方がわからなくなつて、家族から捜索願が出されております。

一課の我々が出張つたのは諸般の事情からですが、そして極秘裏に捜査を進めている為、事件は公になっておりません。こちらさんや、大分県警さんの事件と関係があるかどうかは——いや、今自分

はあまりにも不審者の風体が似ているので驚いておるので——
大分県警さんからいだいた試料と、家族から採取してある試料と
のDNA鑑定次第です

「失踪時の状況はどうでしたか?」と三雲警視が訊いた。

「先月の一五日、火曜日のことです。午後の四時過ぎに、運転手の西塔氏は、奥方に見送られて、いつものように歩いて国会議事堂に向かった。一〇分もあれば着く距離ですから、いつも途中のカフェでコーヒーを飲んでからお迎えに、というのが日課になっていた。車は会館の駐車場に停めてある。

そのカフェテリアで、この不審者とヒソヒソ話している姿がウエイトレスによつて目撃されていた。ふたり揃つて店を出てからふつりと西塔氏は姿を消した

「そのサイトウ氏ですけど、お郷里はどちらの方ですか?」と高城

警視も訊いた。

「山梨県の笛吹市です」と本母警部は答えた。「元々は地元の大物議員秘書の子飼いの用心棒であったのですが、議員が脱税事件で失脚し、元秘書官も自決するというようなことがあってからは、同じ派閥の領袖に仕えるようになつた。

「元秘書官の自決? 大野木元大臣の? もしかしてその代議士というのは、あ・雨宮廷臣先生のことですか!」と三雲警視が声を上げた。

「ええ、そうです」

中堅派閥の領袖である雨宮廷臣参議院議員のことを知らない者はいない。参議院のドンであることは知らなくても。政治に疎いメグミでも、山梨で起きた元政治家秘書の拳銃自決事件のことは覚えていた。六、七年前の中三か高一位の時だつたけど、ニュースを見て恐いなと思った。しかし山梨の大物議員といえば金丸議員しか思い浮かばない。

「そのサイトウ氏ですが、関西方面に縁があるとか、住んでいたことがあるとか、そういうことはありませんか?」と高城警視が重

ねて訊いた。

「そいつはどうですか——どうしてですか？」

「いえね、今お騒がせしている水死体で発見された容疑者の男が——こいつは死人にしか興味のない男でしたが——一時大阪に住んでいたことがあるのですから」

「なるほど。いや、今のところそういう情報は上がっていないですね」「そうですか」

「むしろ、ガイシャの最上七男氏の方が、刑務官でしたから、なにかの繋がりがありそうですね」と三雲警視がいう。

三者の会話をみんな黙つて聞いていた。検事らはなにも発言しない。なににきているのだろうとメグミは思った。

それに小堀検事がちらちら榎原光子を見るのが気になつた。中年といつてもシャレっていて若く見えるから、まだ独身なのかも知れないけど、なにもこんな時にナンパ視線を送ることはないと思つ。しかも自分を通り越して見るなんて失礼しちゃう。

「男はみんなサカリがついた犬と同じじゃん。見よそ。猫にまでのしかかっちゃうが」
バアバの声が耳の中でした。

やがて、本母警部から不審者の似顔絵がまわされた。
まず最初が検事らから。ショッパンから滯つた。小堀検事が放そ
うとしたのだ。

やや暫らく待たされて事務官からメグミに手渡された。なかなかのイケメンだつた。外人のように彫りが深く、見ようによつては宝塚の男役のようにも見えた。文物の衣装なら立派に女で通る。東浜検事のようにふつくらした女らしい美人ではないが、外国なら立派に美人で通るだろう。サングラスで目が見えないのは残念だ。
と思って眺めていると、それがスッと消えた。隣りの榎原光子に奪い取られたのだ。

（なによ！ まだ見てるのに——）

榎原光子は食い入るようにそれを見つめた。心なしか顔色が蒼ざめて見えた。蛍光灯のせいではなく。

メグミはそれと彼女の横顔とを交互に見た。そして、手が震えているのに気付いた。

小堀検事がメガネを光らせてじつと見てることには気付かない。その間も本母警部と三雲警視と高城警視の会話は続けられていた。

会議は一八時をまわった頃ようやく一段落したのだった。というのは、それからまた幹部らだけで打ち合わせを始めたからである。結局、名古屋のビジネスホテルに落ち着いた時はもう一一時前だった。

男子と女子にわかれ、メグミと榎原光子が同じ部屋になつた。東浜明美検事は隣りの部屋にひとりで。

男どもはお風呂のあとラウンジに飲みに行き、女三人はお風呂のあとは部屋で冷たいビールを飲みながら晩くまで話した。

そこで榎原光子の父親の事件のことを初めて知った。その時の担当検事があの小堀検事だったとは、またなんというめぐり合わせだらう でも納得。

(榎原刑事にも父親 パパ) がいないのかあ……)

でもいたことはいた、高校生になるまでいた、そして彼女にはあんなに優しい美人の母親がいる。

自分にはクモザルのようなジイジと、オランウータンのようなバアバシかいない。いつ死ぬかもわからない危うげなふたりしか。(父親——てどんなものだろう?)

と、床に入つて考えながら横を見ると、隣りのベットで榎原光子が泣いていた。

泣いているにしてはちょっと様子がおかしかった。

ダンゴムシのように向こう向きに丸くなつて、舟を漕ぐように体を前後に揺すつて泣いている。それがだんだん激しくなつて、押し殺したような呻き声に変わつた。

「どうしたの？」

——ひへ、ひへ、ひへ……。

と、激しくなる一方だ。メグミはベットからすべり下りて、榎原光子の所へ行き、肩に手を掛けた。

「ねえ、どうしたの？」

顔をのぞき込むと、薄い上布団のベリを咥えて、痙攣していた。

「ねえ、どうしたの？ 大丈夫？」

ヒキツケを起こしたように白目を剥いて激しく痙攣している。メグミはなす術もなく、隣の部屋に東浜検事を呼びに行つた。検事はまだ起きていた。ベットに腰掛け、髪を解かした姿で書類に目を通していた。

ふたりが慌ただしく部屋に戻ると、榎原光子はけろりとした顔でベットに腰掛けている。とろんとした目でふたりを見た。

「あれ？」とメグミは呆気にとらわれる。

東浜検事はつかつかと榎原光子の所へ行つて横に座ると、肩を抱いて、「あなたまたクスリ呑むの忘れたのね」といった。

榎原光子はぼんやりした顔をしている。

「テンカンの発作なの。驚いたでしょう」と検事はメグミにいった。

「クスリさえちゃんと呑んでればなんでもない病気なんだけど、この子忘れっぽくて——舌噛み切つたらどうするの！」

発作を起こすと、立つていればバタリと倒れ、泡を吹いて激しく痙攣する、口になにか入れないと、本当に舌を噛み切る恐れのある厄介な病気である。でも発作はクスリでおさえられる。

病名を知つてゐるくらいで、そんな知識のないメグミは本当に肝を冷やした。こんな健康体そのもののような、立派な体格の榎原刑事にも、そんな弱点があつたとは、氣後れしていただけに、少しだけ優位に立てたように思う。

でも悔しいけどやはりオーラがある。態度がデカイだけある。この子を見ていると、さつき検事に聞いた話が、元・東京地検特捜部検事の城島竜一といふ、この子の父親が、東浜検事が英雄のように語るその生き様がわかるような気がした。

（父親を失つた悲しみはどんなものだろう?）

その父親をなぶり殺しのようにして、そんなことがあるのだろうか、懲罰で死亡させた張本人が、今回両脚だけのバラバラ遺体で発見された最上七男である。その検査に娘が当たるといつのもなんというめぐり合わせだろうか。

それにしても羨ましいのは、東浜明美検事と榎原光子刑事の仲のよさである。検事といえば県警幹部や県職幹部に匹敵するお偉い行政官、それに十も年上のお姉さまに向かつてタメ口を利くとは許せないやつだ。

「うちから明日からどうするんだろ?」

何事もなかつたように榎原刑事が検事に訊く。

「あなた達は捜査本部の連中と最上七男の身辺調査とこうことになるでしようね」

「今井孝雄の写真を持ち歩いて? でも最上七男との接点なんてありそうにないけどなあ」

「やつてみなきゃわからぬでしきう。それと例の不審者の絵。その謎の人物はきっと足跡を残してゐると思つわ」

「検事は?」

「わたし達は東京に行く」

「なにしに?」

「うん。わたし達はわたし達で色々とね」

メグミは会話から取り残されていた。それを察して東浜検事が微

笑みかけていった。

「あなたなんですってね。遺留品のゴム長靴と今井孝雄を結びつける証拠をつかんだのは、偉いわ。それに、刑事になつて間がないんですつてね。積極的な娘だつて、山辺警視正が褒めてたわ」

メグミは赤くなつた。首まで赤くなつた。ジジ・ババのもとで育つたから世間慣れしていないので、ひとりっ子で兄弟がないから、年上の者、姉や兄に憧れを抱いていた。

それでも思ったことは口をついて出る。

「あのう、ひとつ訊いていいですか？」

「なあに？」

「検事さんはどうしてあたし達と一緒に引ひきこむことになつたのですか？ よりやく遺棄遺体のひとりの身元がわかつただけなのに」

「どうして？」

「はい。これは——考え方かも知れませんんですけど、検事さんつて、じつと検察庁舎について、補充捜査をわたし達に命じるだけだって、警察学校で教わつたものですから」

「でも、お茶の間のミステリー・ドリマなんかでは、検事が積極的に第一線で活躍してるでしょ」

「わたし思つんすけど、本当は失踪している大物代議士の運転手の方に、興味がありなのではあります？」

「随分読みが深いのね。警視庁の警部は極秘裏に捜査をしているといつてたと思うけど」

「ええ、でも、検察の潜行捜査は定評があるとも聞いてます」

今度は榎原光子が会話から取り残されて慄然としていた。

「そんなことどうでもいいじゃん。明日早いんだから、寝かしていくんない」

検事とメグミは顔を見合させて、苦笑いした。
(お前がゆうか)

朝食は一階のレストランでということがだつた。ロビーを挟んで中華レストランと和洋折衷の食べ放題レストランが向かい合つており、受付の横にはカフェテリアもあつた。六時前だというのにそのカフェは異様に混んでいるのがガラス越しに見えた。

そこに二百万都市の活力を見た思いのメグミであるが、定評のある名古屋のモーニング・サービスで安上がりに朝食を済ませている営業マンの実情を知らない。

早く目が覚めてしまつた 五時には目が覚めた メグミは、シャワーと朝シャンを済ませて、死んだように寝入つている榎原光子を残して早朝の名古屋の街に出てみたのである。

朝の清澄な空氣というものは何処も同じ、目の前に巨大な世界一高い 二四五メートル 駅ビルが聳えているほかは、ビルと人間の取り合わせ、人通りの多さが目立つばかりで、異国情緒は湧かない——のはやはり昨夜のあの重い話せいだらうか。

傍目には羨ましく見えて、みなそれぞれ事情を抱えているんだなあと思う。この街で榎原光子の父親と叔母さん——といつてもまだ自分らと同じ年頃だつた——が殺人容疑で捕らえられ、裁判にかけられ、ふたりとも獄死したという現実 叔母さんのほうは自殺だった、犯罪者とはいえ可哀想に、そんなのあり、それなのによく警察官になれたものだとも思う 血縁関係に犯罪者がいるとダメなはずである。

三〇分くらいでホテルに戻ると、ロビーの長椅子に腰掛け、東浜検事と高城警視、それに殿村部長刑事の三人が話していた。少し離れた所の壁際では、警視庁の本母警部と榎原光子が立ち話をしている。

上背が一八〇センチ近くはありそつ大柄な警部に、身長では負けない榎原光子の堂々たる立ち姿を見て、ふと思い出した。部屋

を出る時振り起こそうとして、その寝顔を見て誰かに似てるなあと思つたけど、今思い出したのは、子供の頃、実家の居間の壁に貼られてあつた赤茶けた昭和の銀幕スターのポスターだった。足が長くてカッコイイ、ふつくらした頬の引き締まつた浅黒い顔。

（やっぱ男顔だわ）と思う。

自然メグミの足はそつちに向かつた。妙な取り合せ興味を抱いたからだ。

メグミが近づいたのも気にせず、「お前が城島の娘とはなあと感慨深氣に警部がいつている。

「覚えてる。傍聴席で見かけた」

「そうだつたか？ うん？ ああ、あの、ひょろつとした小娘が？」

「——お前か」

「おつちゃんも随分白髪が増えて、白熊みたいになつたじやん

「——いつー」ようやく警部はメグミのほうを見て、「お前ら今日は俺に付き合え」といった。

「そんな勝手できるわけないじやん」

「まあ見てる。この本母警部さまに逆らえるやつアあ、警察にはひとりだつていやしねえつてとこ、見せてやっから」といつて警部は豪快に笑つた。

検察の城島が、警視庁の本母かといわれた、武闘派と、無頼派で鳴らしたふたりのことを、若い彼女らが知る由もない。

警視をつかまえて「おい高城」といつた時に初めて、口先だけの男ではないことを知る。上下関係のキビシイ警察社会でよくもど、呆れた。

呼ばれてきた高城警視が「なんですかね、警部」と、変に低姿勢なのだ。

「この子達を今日は貸して欲しい。城島の娘とは因縁があつてな、ふたりだけだと、あんたらも気をまわすだらつから、この色の黒いねえちゃんも一緒にな」

「ええ、まあ、どつちみちふたりにはちゃんとした人を付けなけれ

ばとは思つてたから……」

「よし決まった。そうと決まつたらメシを食おう。メシだ」といつてのしのしと和洋折衷食い放題のレストランに入つて行つた。

「随分態度の『デカイ』警部ですねえ」と、殿村部長刑事がいう。

「知らないのか。あの男は察庁の長官ともさしで話をする男だぞ」と高城警視が悔しそうにいった。

メグミと光子は顔を見合させ、東浜検事は「ツ」と吹き出した。検察でも有名である。城島元検事と並び立つ命知らずの男、国民の生命と財産を守る公安職において、命知らずは、階級よりも重いのだ。ヤクザや右翼に怖気て国民を守れないでは話にならない。

気の強さでは負けていないと思う吉賀係長が、一六〇センチそこそこしかしない係長が、本母警部を見下すように反り返つて見る姿を想像して、それは見物だろうなど、でもひっくり返つちやうど、メグミはニヤついた。色の黒いねえちゃんは余計だ。

光子のパパ・城島竜二元検事は、警部よりさらにタッパが高く、プロレスラーのように胸板が厚く、上背が一八五センチもあつたと聞いてのちほど警部から、メグミは改めて納得したものだ。

それに光子のパパはヤクザの血統だというではないか。親譲りの体格と、血統書付きの態度の『デカさ』なのだけれど、それでもよく検察官になれたものだと、またまた感心した。

トレイにご飯や惣菜を取り分けて席に着いていると、検事と光子もやつてきた。

「早かったのね」と東浜検事がいう。「外に出てたのね」

「起こしたけど、彼女起きないんだもん」カレーを食べようとしている光子を見ていう。

「そうね。寝坊して、年頃の娘が朝シャンもしないなんて、カレシができないわけだわ」

「できないんじゃないよ。つくらないの。面倒臭いもん」

「でも、女子高では随分モテたんだってね。バレンタインデーにはチョコを山のようを持って帰つてきたと、遼子さんがいつてた。一

「佐藤刑事はどうなの？ カレはいるの？」

「えつ？ わたしですか」

「いきなり振られてメグミはどうせやめた。

「い、いません」

「ウソ。メールが入つてたじやん」

「あれは……」

そういうえば、タンポポの綿毛よりも軽い男からはあれからなにも
いつてこない。まあそのうち「おーひょひょ」といつてくると
は思うけど。

「まあ適當なのをみつくろつておかないと、検事さまのようになく
ら美人でも売れ残つて店晒しになっちゃうかんね」

「失礼ね。縁がないだけよ」

「三〇過ぎちゃうとか、男でも女でも結婚しなくなるらしくじや
ん。面倒臭くなるんだね。そしてすぐに四〇になる」

そんなことを話しながら食べていると、一斉に携帯電話が鳴り出
した。

メグミのはメールだった。富崎芳樹からだった。

『今井孝雄の部屋から検出された血痕と最上七男の遺体からの血液
型が一致した。なお、ほかの三名はどこかほかの場所で解体された
ものと思われる』

というものの、相当慌てているのだろう、遊び心のある彼にしては
余計なことはなにも書いてない。それが少し物足りなかつた。

榎原光子には母親からの電話、東浜検事には今情報と同じものが地検の事務官らしき人物から伝えられていた。

「だいたい警視庁はどいつも今頃になつて、つむりの事件と運転手の失踪事件とを、結び付けて考えるよつになつたわけ？」

津島に向かう車の中で榎原光子が本母警部に訊いた。県警の覆面者にはリアシートに光子と警部が座つて、メグミは助手席に座つていた。運転している刑事は青木という若い刑事だつた。

「スジを読み違えていたからよ。西塔氏には敵が多い。てつきり裏社会とのゴタゴタだらうと思つてた。上の方もそう判断したからわしを起用したんだろ？ まだ事件性をおわせるものはなにもねえ段階でよ！」

「じゃあ、最上七男と西塔運転手と、なんか関係があるとこ？」と？」

「そうこないじだ」

「どういう関係？」

「それは今はいえねえ」

「なにそれ？ つむりから情報だけ取つて、そつちの情報は教えてくれないわけ？」

「まあそう慌てるな。そのうち教えてやる。まだわしりも半信半疑なんだ。それよりお前——」

「——その、お前というのやめてくんない。榎原光子といつむりちゃんとした名前があるんだから」「

「そつか苗字は旧姓に戻したのか。それにしても——」といつて警部は光子をしげしげと眺めた。「民子という娘は色白でとても可愛かった。お前は父親似だな」

「ほらまた。それに、民子というのは伯母なんだけど」

「そつだつたか？ ああ、そつだつたな。城島の娘のわけはない。わははは、わしももう歳だな。妙な具合に記憶が混乱しちまつ」
メグミはふたりの会話を羨ましそうに聞いていた。それにしても

榎原光子といつ子は不思議な子だと思った。誰とでも同じような調子で話す。ふてぶてしいというか、物怖じしないというか、妙にキモが据わっている。それがオーラなわけだけど。

「それでよく警察官になれたな」と、メグミも思つてゐる疑問を警部が訊いてくれた。

「うん。何度兆戦してもダメで、あきらめてたんだけどね。父親が犯罪者というのがネックになつて」

「それに祖父の代はパリパリのヤクザだつたしな」

「違うよ！ テキヤの名門、侠客だつたんだから！」

「ふふふ。それをヤクザというんだ。まあいい。それで？」

「ある偉い人のおかげでああ」

「ほう。偉い人というのは？」

「警察庁の偉いさんだつた人。あ、そつそつ、今の警視庁の公安部長のお父君だつて」

「なに？ 公安部長の？ すると野島警視監のことか？」

「知つてるの？」

「知りいでか。だけど、野島警視監ならもうひとびく定年退職してゐるはずだぞ」

「今は大分大学の名誉教授になつてゐる。でもまだ警察に影響力あるんだね」

「明治以来の薩摩閥の人だ。お前ひとり捻じ込むくらいわけはない。だけど、榎原刑事、お前をここによこしたのは誰だ？」

「山辺刑事部長だけ？」

「ヤマベ？ どういう字を書く？」

「山の辺」

「山辺か。山辺山辺、キャリアだらうけど聞いた名前ではないな。本部長は？」

「森田一一？」

「森田か。森田。知らんな。ふーむ」

本母警部は腕を組んだ。暫らく会話が途切れた。

ちょうど日光川を越えた所だったので運転手の青木刑事が訊いた。
「どうしましよう、捜査本部に先に顔を出しますか？ それともこのまま諏訪町の最上七男の家に？」

「聞き込みが先だ」と本母警部はいった。

——もひさんざんうちが聞き込みをしている、なにも出でくるものか。

という顔で青木刑事は車に残つた。

三人は新興住宅地の一角にひと際目立つ豪壮な屋敷の門をくぐつて入つた。

まだなにもかもが真新しように見える昔風の日本建築に、渋谷を思わせるような日本庭園。ヤツデやアオキ、センリョウ、マンリョウなどの植え込みと、熊笹が密生する黒竹の叢の間を、飛び石と玉砂利の小径こみちが玄関まで続き、黒竹越しに左手の車庫から黒い高級車の一部が見え、玄関脇の右手には頑丈な装備の犬小屋が見えて、中で黒い獰猛な眼差しの犬がうごめいていた。

なんとなく主の気風と俄か成金趣味が色濃く感じられる屋敷を見まわして、本母警部は玄関のチャイムを鳴らした。

アポを取つていたのですぐに四〇年配の奥方が姿を現して三人を応接間に案内した。

家具調度も高価そうなアンティークもので趣向を凝らしており、なにからなにまでが下級刑務官の分を超えている。基礎調査によると父親も刑務官で、拘置所勤務の副看守長で定年を迎えていたから、そしてまだ両親とも健在であるから、遺産を相続したわけでもあるまい。

七、八年前というから二〇代半ばの看守部長がこれだけのものを成しているのである。

しかも株を担保に銀行から融資を受けているからまるまる借金によるものではない。トヨタ関連の優良株なので担保価値は今や借り入れ額を上まわっているという。愛知県警はもつかその株の出所を

追及しているところであった。

奥方は年齢のわりには老けて見える痩せた女でおどおどしていた。それどころか人相の悪い警部の顔をまともに見られない。コーヒーを運んできてソファーに座ると、震える手を膝の上で握り締めて、下を向いた。

無理もない。失踪していた夫があまりにもショック キングな姿で発見されたばかりなのだ。

本母警部は皮製のブリーフケースの中から不審者の絵と似顔絵、それに佐藤メグミが持ってきた絵のコピーを取り出して紫檀したんのテーブルに置いた。

「これらに見覚えはないですかね？」

最上千鶴子は横目でじっと見ていたが、首を振った。メグミと光子はその顔に見入る。

警部は今度は背広の内ポケットから写真を取り出して置いた。運転手の西塔氏の写真だった。平べつたい顔に吊り上がったキツネ目の男。

これにも最上千鶴子は首を振った。

そこで榎原光子がショルダーバックの中から雑誌の切り抜き写真を取り出してその横に置いた。

これは色褪せていて、しかも全身像なので顔が小さく明瞭ではない、

ところがこれを最上千鶴子はじっと見つめて動かなくなつた。

そしてつぶやいた。

「……常本先生」

ぐりつと榎原光子の体が揺れたのをメグミは確かに感じた。

しかし本母警部は少しも驚きはないで、「この男は」といつて西塔氏を指し、「常本氏の部下だった男でね、奥さん。やはり失踪しとるんですよ」といった。

最上千鶴子は顔を上げて警部を見た。困惑と恐怖とでその顔は歪んでいた。警部が勿体ぶっていたのはこのことかとメグミは思う。どうやら光子のパパの事件と関係ある人物のようだ。

「ご主人と常本先生とは高校の先輩後輩になり、深いお付き合いだつたんでしょう?」

「ええ。生前は色々と手をかけていただきました」

最上千鶴子の顔色が曇つたのをメグミは見逃さなかつた。しかし常本氏が右翼団体主催者であり、いわく付きの男だったことは知らない。

「もしかして株の指南なんかも?」さりげなく警部は訊いた。

「ええ……まあ……そんなことも」

「常本氏は大野木元大臣の私設秘書だった。元大臣とのお付き合いはなかつたですか?」

「大野木先生のことは存知あげておりましたけど、お付き合いはありません」

東浜検事によると、光子のパパ・城島東京地検特捜部検事は、その大野木大臣と刺し違えたということだつた。詳しいことを光子の口から訊きたいと思つていた矢先に、彼女がテンカンの発作を起こしてしまつたのだ。

「奥さん、ご主人が失踪直前に、会社に一度女の声で電話をした者がいる。一度目にはご主人が出て五分くらい話している。五分といえば短いようでも長い。仕事関係でない、プライベートで五分話す関係の女に、心当たりありませんか?」

「何度も訊かれましたけど、ありません」

「そうですか。じゃあ、もう一度これを見てください。姿や格好は扮装を凝らせばどうにでもなる、けど、体型と背丈はどうにもならない」とこゝで警部は神原光子を立たせた。「神原刑事、身長は?」「ジャスト一八〇」

「おお! なんと。わしより三センチも高いのか。奥さん、一いつまで高くはないけど、そしていつも遅くもない、瘦せ型のひょろりとした長身の女ならどう? 一七五センチを超えるような女はそういうにはいない。田立つと思つがねえ。あの和田アキ「でさえやうも高くないんじゃな」の」

「女性ですか?」

「ああ。声が女の声だったから」

腰を下ろした神原光子がバックを開けたり閉めたりするのが気に

なつた。なにかを取り出そうかどうかで迷つてゐるような素振り。

「女性と決め付けるのはどうかと思つんですけど」とメグミが口を出した。

警部はメグミの存在などまるきり眼中になかったかのように、今気付いたようにメグミを見て、「なに?」といった。

(恐へい!)

「で、ですから、男声とか女声とか、ありますから……」

「じゃあ、お前らの不審者はどちらで捜索かけたんだよ?」「は?」一応性別不詳といふことだ……

「それで網に掛かったのか?」

「……いえ」

「それ見ろ! はつきりしないから、やつこいつになるとわかるんだ。こ

こはパシッヒと女で

「——男性なら、心当たりがなくはないのですけど……」

「なに?」

「それくらこの身長で痩せ型でサングラスを掛けた面長髪の若い男性なら一度見かけたのですが」

「ほつ……」と警部は口を丸めた。

クスッと思わずメグミは笑ってしまった。そして睨まれた。首を竦める。

「どこで？」

「一度目は家の近くのスーパー駐車場で。でも、黒っぽいサマースーツ姿のイケメンでしたよ。黒い長髪に半分青いボカシの入ったメガネ、鬚はうしろに撫で付けていて、薄つすら鼻髭もあつて」

「ふ～む」

「二度目は女友達との飲み会の席で。スナックのカウンターに座つて飲んでた。みんなはホストだらうって、そんな感じでした」

「どちらのスナックで？」

「昭和町の『レオ』ですけど」

メグミが頭の中に書いていると、警部が睨んだので手帳を取り出してメモした。

「津島市の？」

「はい」

「いつ頃のことだね？」

「さあ、いつでしたか？　主人が失踪する前、一週間以上も前でないことは確かです」

「そう。で、なにか会話はした？」

「いいえ。同じ日に二度見かけたから記憶に残つただけで、偶然なのかも知れませんわ。狭い町ですもの」

「そのことをご主人に話したかね？」

「いいえ。話してません」

「そのスナックでご主人に関する話題は出た？」

「ええ。もっぱら、亭主の悪口や愚痴が主でしたから」

「具体的には？」

「会社のこと、仕事のこと、あとは、まあ、たわいのない悪口でしたけど」

「ふむ」

「あのう……」とまたメグミが口を出した。「どちらが先にお店に入つたんですか？」

これはいい質問だつた。警部も感心した顔をした。危うく訊きそびれるところだつた。

「その男はあとから入つてきて、先に出ましたね」

「ほかに気付いたことは？」

「うーん」と最上千鶴子は将棋の駒のような顔で考えた。

「……そんなホストのような男なら、香水とか付けてたんじゃない？」

と、榎原光子がボソといつた。

「あっ！ そういうえば咲江がお手洗いから出たところで、いい香りがしたつていつてた。その男のあとに入つたのね」

「えっ？ 女子トイレで？」と、これはメグミ。

「いいえ、男子トイレと女子トイレに分かれる所で。その香水が偶然にも、多希子の旦那がつけてる香水の匂いによく似てたつていつてたわ」

「なんとこや香水？」光子が訊いた。

「ランコム。メンネなんとかいうの。でも多希子がいうわけではないから、当てにはならないけど。随分高いメンズコスメらしいわ」
榎原光子もそれを手帳に書きとめていた。

昼食は津島署近くの定食屋で、親父の趣味だから仕方がない。済ませ、午後に捜査本部に顔を出すと、高城警視と殿村部長刑事もいて、三雲警視ら県警幹部らとひと塊りになつて話していた。

「なにかあつたんですかい？」と本母警部が訊いた。

「ああ、警部、ちょうどよいところに」と三雲警視がいつた。「司法解剖の結果が出てね。ダム湖で発見された大分の容疑者だけど、自殺ともいえないようなんですよ。食道部からどんでもないものが出土た」

「ほう」

三雲警視は高城警視をちらつと見て、「ゼラチン製硬カプセル剤を飲み込んでいて、なんとその中には薬剤ではなく、ホシからのメツセージが入つていた」

「なんだって！」

メグミと光子は顔を見合せた。

「唾液だけで飲み込もうとしたらしく、カプセルが喉の奥の食道部に張り付いていた。おかげで胃酸に溶かされず、ほぼ原型を留めていて、入水直前に飲んだか飲されたものと思われる。死因は水死。メツセージには——“亀塚古墳の石棺を開けてみよ”とあつた」

「カメヅカコフン？ セツカン？ なんだね？ それは——」

三人はぼてつとむくんだような三雲警視の顔をポカーンと見つめた。そして揃つて男前の高城警視の顔にも視線を向けた。

メグミは、大在か坂ノ市かどうかその辺りにそういうのがあることは知っていた。光子は知らないのか、「そんなのどこにあんだろ？」とつぶやいた。

「大分市の東の外れに、あまべのきみ海部王の墓といわれる前方後円墳があるんですね」と高城警視がいつ。「五世紀前後のものらしい。ぼくは一度も見学してませんけどね」

「本物の石棺は盗掘で壊されております。レプリカが観光用に設えてあるんです。そのことでしょう」と殿村部長刑事が補足した。

「部長は見たことがあるの?」と高城警視が訊く。

「はい。子供を連れて何度か」

「上蓋は人力で、何人かで持ち上げられる?」と本母警部が訊いた。
「とおてん、とおてん」殿村部長刑事が大袈裟に手を振った。「いえ、人手では無理です。重機かなにかでないと」

「近くに工事現場があり、重機はそこから持ち出された形跡があつたそうですね。今頃はその重機を借りて、石棺の蓋を開けに掛かってるんじゃないのかな?」

メグミらはテレビが設置されてないのを残念そうに見まわした。
「じゃあ、そろそろ隣の休憩室のほうに移動しますか」と三雲警視がいった。

そこへタイミングよく青色シャツの女性警官が「始まりました」といつてきた。一行はぞろぞろと向かつ。

「ただ今重機が墳墓に向かっております」という地元テレビ局の女性リポーターの絵から始まって、切り開かれた森の中に忽然と姿を現した全長116メートル、高さ7~10メートルの前方後円墳の全貌と、それを取り巻くようによく整備された公園や資料館などの空撮が流された。

地元にこんな大きな墳墓があつたとは驚きであつた。しかも、前方後円墳の幾何学的な姿がはつきりと望めた。

「普段ですと観光客や近くの園児や児童らで賑わう亀塚古墳公園であります。ただ今は規制されていて、警察関係者のほかはご覧の通り誰もおりません。我々マスコミ関係者もエントランス広場より先は入れませんので、空からの絵をご覧ください」

腕の先にハサミのような器具を取り付けた重機が、石英質の石積みの墳丘に向かって、カニのように側道を上つて行く。墳丘の角端には赤茶けた土器がぐるりと並べられて太古の墳墓の雰囲気を醸し

出していた。三段構築の墳丘の向こうには真つ青な太古の海が見える。

入つてはいけない丘に重機は入り込んで、東側第一埋葬部の石棺に向かつて行く。それを青いビニールシートと豆粒のような人影が待ち受けている。それらがズームアップされた。

やがて、重機が現場に到着し、土留め用の鋼矢板などを掘んで運ぶハサミを取り付けた腕を伸ばして、石棺の蓋を挟み、あつけなくそれを捲り上げて石棺の横に立て掛けた。

すぐさま係員らによつてビニールシートで覆われたので、残念ながらなにも見えない。係員が上空のヘリをうるさそうに見上げている。

画面は女性リポーターに代わり、「果たして遺体は置いてあつたのでしょうか? 犯人も同じようにして、近くの工事現場から重機を盗み出して犯行に及んだ形跡があることですので、でも、頭のよい犯人のことですから、手のこんだいたずらということも、第一そんなに遺体が長持ちするものでしょうか、フェイクなんてことも、お見せできないのは非常に残念です。とりあえずスタジオにお返しします」といつて、画面はコメンテーターなどが鹿爪らしい顔を並べたスタジオに切り替わった。

ブチッとテレビが切られる。

長四角のテーブルの周りに適当に腰を下ろした一同から溜息が漏れた。

「一体犯人グループは何人いるんだ!」と本母警部が机を叩いて濁声を上げた。所轄の四課住まいが長かつた警部は、誰よりも声が大きく、所構わざ大声を出す。ほかの者はビクッとした。

「死体愛好者から、今度は重機のオペレーターか……」と二雲警視も嘆息した。

制服姿も凜々しい若い女性警官二名がみんなにお茶を配つてまわる。

と、唐突に高城警視のケータイが振動音を発した。当の警視が一

番驚いている。

「ああ、わたしだ。なにっ！ 遺体は置いてあったのか！ 下半身が、また二つ——だと……」

警視はみんなに説明するよひに回ひながらの言葉をオウム返しした。

「おお……！」とみんな驚きの声を上げた。

と、今度はメグミのケータイが、グローブの『レパー・チャーズ』のサビの部分を歌い上げた。マナーモードにしてなかつたのだ。しかも、着メロを替えたばかり。

みんなに一斉に睨まれた。

しかもいきなり、「——おーひょひょー！」といつみんなにも聞こえるよくな富崎芳樹の声。

最悪だ。慌ててメグミは休憩室を出る。

「なんなんですか、いきなり」

「いきなりって——君、今なにしてたの？ おトイレとか？」

「テレビ観てたんですね。お偉いさん達と一緒に」

「なんだ。君も見てたのか

「遺体が出たんだってね」

「えーっ！ 本当。なんで君、もうそんなことを」

「ここには捜査本部副本部長の高城警視がいるんですよ」

「ああ、そつかあ、そうだよな

「もうりますよ」

「ああ、ちょっと待つて。でも君、今井孝雄の手帳が見つかったことは知らないだろ？」

「それは知らない。どこでみつかったの？ 捜査本部が秘密にしているんじゃない。当然、高城警視には報告がいつてるはずだわ」

「ところがどつこ、池の鯉。恋する女はきれいやへ、けつしてお世辞じやないぜ～」

「なんですか？ 郷ひろみの歌ですか」

「ぼくが見つけたんだ。ダム周辺の捜索の時。草むらの中で」

「ちゃんと上司には報告したんでしようね」

「板井のおっさんにかい？ ヤダね」

「じゃあ、先輩が？」

「ああ。これでいつきで名誉挽回や。部長の野郎になんか手柄を横取りされてたまるかつて」

「それになにか手掛かりになるようなことが書いてあるんですか？」

「うん。まあ共犯者かどうかはわからないけど、住所録がね。片つ

端から、非番の時当たつてみるよ」

「ちょっと、そんなの危険じゃないですか！」

「ちょっと、ちょっと、待つてよしあつとーーー女はいつもミス

テリーー」

「もつー

休憩室に戻ると、まだ高城警視は歩きまわりながらケータイで話していて、テキパキ指示を『えていた。みんなはお茶を飲みながらガヤガヤと話している。

「カレシからはなんて？」と光子がささやく。

「違うつてば。同じテレビ観て、勝手に大騒ぎしてるだけ」

そこへ、「そこのふたり」と、話終えてケータイを力チャリと閉じた高城警視がいった。「君らはもうホテルに戻つて帰還の用意をしておきなさい」

（えへっ！）とふたりは心の中で声を上げた。（まだきたばかりなのに～）

一週間の出張と聞いていた。不審人物の足跡を？みかけているところでもあつた。榎原光子はあからさまにぶすくれた。

殿村部長刑事が彼女らの思いを言葉にした。

「我々はもう引き揚げるんですか？」

「悪いけど、ここはもう愛知県警さんにお願いして、我々がいても大したことはできないし、若いこの子らはかえつてこちらさんの足手まいになり兼ねない。本来の目的である情報交換は終えたし、わたしだけ試料を持つて先に帰るつもりだつたけど、こうなつては」「そうバカにしたものじやないよ、警視。この子らはもうすでに大変な手掛けりを揃んでいるーのかも知れん」

「えつ？」と高城警視は驚く。

県警の連中も聞き捨てならぬと、注目した。

「不審者だがーー女ではなく、男かも知れない。それによく似た男なら見覚えがあると、最上七男の奥方がいうんだ。そいつが奥方に近づいて情報を取つていていた形跡がある。今晚にでも裏を取りに行こうと思つていたところだ。

どうもわしらは頭が硬い。固定観念でものを見る。姿や声だけで

判断してしまう。その点この子らは柔軟な思考をする。ボーダレスの時代の申し子だ。男も女も、そしてあの声明文じゃないが、神もサタンも区別がつかん、ミソもクソも一緒の時代になつてきてる。神に祈りながら平氣で人殺しをする、民族や宗教、宗派が違うだけで、女子供までみな殺しにする

「どういう根拠で不審者が男だと？」

三雲警視がイラついて訊いた。今まで女といふことを前提にして捜査してきたのだから、それをバカにされたようなもの。無理もない。

「すぐ傍にいた最上婦人を始め数人のご婦人方がそう認識したんだ。充分に熟れた目をしたご婦人方がね。しかも、そいつはメンズコスメをつけていた」

みんなは顔を見合させた。

「だ、だからといって、たつた今あなたがいったよう」

「そう。だから、かも知れないといったんだ。あんた方は女という前提で聞き込みをした。だから、最上婦人は心当たりがないといった。でもこの子らは、男かも知れないという含みを持たせた。それなら心当たりがないでもない——ということになつたんだ。

人のことはいえない。わしもなにをバカなことをと、危うく叱り飛ばすとこだつた。実をいうと、わしがここにきたのも、その点が気になつたからで、これでようやく合点がついた

なにが合点がついたんだと、みんなは本母警部の顔を見つめた。失踪している代議士の運転手の試料を大分県警に渡して、ついでに三者の情報交換が目的だったはず。それがこっちの捜査にまで首を突っ込んで、大分県県警の警視も警視だ、捜査員まで貸してやって——と三雲警視らは氣色を悪くした。

険悪な空氣。

「どうも変ですねえ」と所轄のメガネを掛けた中年の警部補が声を上げた。「連中はどうしてもツインにこだわりますねえ。これはもうなにか意味があるとしか」

その空氣を変えるにはよい発言だった。案外、場の空氣を読んでの計算されものかも知れない。どこにでもいる宴会部長タイプの人によせそな警部補だった。

「そうなんですよ」と高城警視がすぐさま応じた。「声明文にもある通り、“世界の分裂”、“神とサタン”、といふふたつのものを彼らは強烈にアピールしている

「やはり老翁ですか」と、警部補。

「そう思われます」

「今回の遺体が今までの遺体の一部であることを願いたいものですね」と三雲警視。「あなた方も大変でしょう、国体を控えて」

そうなのだ。全国の注目を浴びる国民体育大会、開会式には天皇皇后両陛下を初め、大勢のお歴々が来賓としてやってくる。県は総力を挙げてこの国民的行事を盛り上げようとしているところである。その盛り上がりに水をさすようなことになり兼ねないのだ。

「最上七男の」と、本母警部が割つて入った。「資産照会のほうはどうなつてゐるのかな？　どう見たつてありやあ刑務官風情の分限を超えている

「株で儲けたんだ。よい指南役がいたんだろう。それについては法的な問題が色々あって、そういうことは法律家にお任せしている、検事にね」

三雲警視がせいいっぱい態度のデカイ警部に階級が上であることを一々たとえ一階級しか違わなくとも上官に無礼があつてはならぬことを、軍隊のように上意下達の厳しい階級組織にあつては、ひとりの上官に逆らうことはすべての上官を敵にまわすことになることを、胆に銘ずるよう語氣に込めていった。

「検察官なんか当てになるもんか」と警部は意に介さない。「奴らは政治的判断で動くんだ」

比較的年齢が近い三雲警視と違つて、十以上も年齢差がある高城警視は大先輩もあるし、そうまではメンツにこだわらない。凶銃に向かつて行く勇気が自分にあるかどうかも疑問だった。本母警部

がシャブ中親父から子供を救つた立て籠もり事件は、警察大学では語り草になっている。キャリアの彼は安全な所にいて、そういう命知らずな部下を頼もしく思う立場だった。

本母警部は榎原光子刑事を見た。そしていった。

「高城警視、彼女を東京に連れて行つてはいかんかね？」

「また、なにをいい出すんです」と警視はびっくりして、「どうして？」と訊いた。

「見てもらいたいものがあるんだ」

「彼女に？」怪訝な顔をした。

当人も驚いている。

「女の子ですし、ひとりで行かせるわけにはいきませんよ」

「黒いねえちゃんとセットでも構わん」

（ちょ、ちょっと、勝手に決めないでよ）と、メグミは慌てた。（

それに、黒いは余計だつーのー）

高城警視は携帯電話でどこかに連絡を取り始めた。

「高城だ。山辺部長を頼む」

という声が聞こえた。刑事部長に電話したのだとわかる。

警視は窓際のほうに離れた。

そして話終えてからやつてきて、榎原光子にいった。

「君には、警視庁公安部への出向の辞令が下りている。第二二課・第一公安捜査・第3係に、だ」

ぽかんとした顔で榎原光子は警視を見た。

高城警視のほうも同じように事情が飲み込めないで、イタチの屁でも食らつたような顔をして、「帰還してから発令ということだつたけど、君さえよければ、このまま本母警部と東京に向かつてもよい」とことじことだといった。

「公安三課？」と聞いて驚いたのは愛知県警の連中だった。「といえば、右翼対策じゃないか」

「親玉は、若き警視庁のエース、公安部長の野島警視監だ」と本母警部がしたり顔でいつ。

誰が彼女を警察官にし、誰が彼女をここによこしたのか、そして
今まで国家のお膝元に呼び寄せようとしているのか。

当人はおろかほかの誰も知る由もないが、本母猛ほんぼたけには今ようやく
理解できた。時代が動き出したのだ。

明治維新以来歴代の警視総監を輩出した薩摩閥が、今再び丸十文
字の旗を掲げて、維新を起こそうというのだ。

隠然とした闇の勢力に向かつて、この侠客の血統が力を結集して
それを成すというのか。

——この娘にそれを頼むというのか！

(城島、お前の娘が俺に死に場所を与えてくれるだろうか)

本母警部と榎原光子が見つめ合ひのを、脇から佐藤メグミは見つ
めた。

前に続く（後書き）

これより神原光子はほかの小説「ダークマター」のほうに注目してしまって、メグミとメール交換するくらいになります。

といつても、その「ダークマター」は二ヶ月近くも休載していて、当の光子は警察官にもなつておらず、弁護士助手として活躍している頃のまま、大急ぎでそつちも動かさねばなりません。

一度止まつたものを動かすのはもの凄いエネルギーを要します、それは本作で身に沁みているところ。

もう細かいところはみな忘れていいのとどうなることやら……。

なお、本作においてはメグミと富崎芳樹が見えない犯人と対決します。カオルちゃんや足立明君に危険が迫りますので見逃せません。

一泊しただけでメグミらは名古屋の空に舞い上がった。

神原光子とは中部国際空港で西と東に分かれた。光子は本母警部と東京に向けて飛び立つたのである。せっかく友達になりかけたのに、残念なことであった。

それでも携帯番号の交換をしたからこれからも情報交換くらいはできる。

前の晩にホテルのラウンジで飲みながら、「一度家に帰つてからにしたら?」とメグミが「うど」「つるさい」のがついてくるからと光子はいった。

「ママさんのこと?」

「まさか」

(で終わつちやうかな普通、説明してくれたつていいと思つた)「身のまわりのものだつているんじゃないの? 第一ママさんが心配するよ」

「親つて、うざいだけじゃん。荷物はあとから送つてもいいわ」

「どうして? 大分で起きた事件なのに、なんで東京に? あの不審者に心当たりもあるの? もしかして、パパさんの事件に関係した人物?」

光子はなにも答えなかつた。もうひとつ疑惑についても答えない。光子はホテルに戻つてから一時間ばかり外出した。行く先も告げずにいつの間にかいなくなつていたのだ。最上七男の家に行つたのではないかとメグミが探りを入れたけど、「ここには色々と思い出があるからね」とはぐらかされた。

そういう頑としたところのある女だつた。人の「機嫌を取つたり、人に気遣いをしたり、おもねることもしない。背骨が鋼鉄でもできてるかのように真つ直ぐな姿勢で、ちょっとびり憂いを帶びた引き締まつた顔で、いつも心持足を開いて立つてゐる。それは、いつな

ん時どこから攻撃されても即応できる体勢のよつて見えた。つまりスキを見せないのだ。

自分と同じくまだ刑事になつたばかりなのに、警視庁に出向とは一体じうじうことだらう? しかも公安部とは? 東浜検事も小堀検事と東京に行つたままである。事件の本元は東京にあるのだろうか?

という様々な思いを乗せて飛行機は大分に向かつて水平飛行に移つた。

日暮駅に着いたのが昼前。一度官舎に帰つて着替えと昼食を済ませ、午後から捜査本部に顔を出した。

捜査本部の会議室にはテスクの柳井警部補がひとりつぶねんとしていた。

「おお! おかえり。早かつたじゃないか」

「はい。予定が変わりまして。こっちが大変なことになつてゐるのに、うかうかなんとしてられないといふことでしょうか。それにパートナーの神原光子刑事が急に警視庁に出向することになつたりしたものですから」

「そつだつてなあ。普通は辞表を出してから改めて警視庁に再就職ということになるものだが。どうしてだら? そんなに急ぐ理由でもあつたのかな?」

「はい。それがどうも、一連の不審者と彼女がなにか関係があるのかないのか、なんか変なんですよね。彼女が名古屋に出張するようになつたのはともかく、警視庁に出向になるのは前もつて決まっていたみたいなんですねえ」

「高城警視も知らなかつたらしいね」

「わたしは体のいい彼女のお供に過ぎなかつたんですね。危うく東京までお供させられたことでした」

「ははは。そもそもなかろうけど」

「そうですよ。そうに決まつてます。係長さんは、神原刑事のお父

さんの事件については、なにかご存知ですか?」

「勿論だよ。大分市内に事務所を構えていた弁護士でもあつたからね。城島東京地検特捜部検事の事件か……あれは気の毒な事件だったなあ……」

といつて柳井警部捕は、かいづまんで城島検事とその妹・城島民子が起こした殺人事件について語つた。それは東浜明美検事から聞いたことと大して変わらなかつた。

けど、柳井警部補はその事情に同情しながらも、シビアーに事件を見ていたのに対し、東浜検事は同じ検察官でもあつた城島検事を明らかに身贋みびいきとして、思い入れを込めて英雄のように語つた。

それによると、光子の父・城島東京地検特捜部検事は、政治家がらみの疑獄事件で、政界にのさばつていた巨悪を権力の座から引きずり下ろし、政治生命を絶つた。その逆恨みを受けて、検事とその一族が刺客に狙われることになり、まず検事のアキレス腱である、一番可愛がつっていた腹違はらたがいの妹が標的にされた。

妹・城島民子は、大学に入学して間もない頃、刺客に拉致監禁されて残虐の限りを尽くして痛めつけられ、切断された小指を使って強盗殺人の容疑者にまで仕立て上げられた。

家族もまた仕組まれた事故でひとり死に、ほかは重軽傷を負つて、全財産を失つた。

結局、追い詰められた城島検事と妹・民子はその刺客を殺してしまつた。

というなんとも氣の毒な話であつた。光子ら母子も一時は命を狙われていたというのだ。

「今のわたし達よりひとつ若い、二十歳の妹さんは、お兄さんの無実を叫んで、留置場で首吊り自殺したんですってね」

「そうだね。若い娘が下着でね。それで裁判所は、本当は被疑者死亡で公訴棄却のところを、妹のほうは緊急避難行為ということで、免責して無罪判決を出した。その分兄の検事に重い刑を科した」

「そして神原光子刑事のお父さんは刑務所内で、懲罰中の事故で死

「なんだんですよね」

「ああ、そう。事故ではなく、暗殺とか、色々騒がれたけどね。結局、関係した刑務官は、特別公務員暴行陵虐致死罪に問われただけで、それぞれ失効猶予が付いた」

「その元刑務官がバラバラ遺体で発見された。そして警視庁が秘かに捜査していた大物政治家運転手の失踪事件があつて、両方の不審者が似ていることから、しかも、その運転手は、城島特捜部検事が担当した獄獄事件の関係者の子分でもあつた。なので、検察や警視庁は、わたしたちの事件と関連付けて考えるようになつた。東浜検事や名古屋地検の検事も東京に飛んで行つたもの。そういうことですよね」

「そういうことらしいね。詳しいことは、大分の捜査本部に出向いている課長が戻らないと」

「もし運転手の家族のDNAと、わたしたちのガイシャの誰かのDNAが一致するようなことにでもなつたら」

「うん。そうなるとこれは大変な事件になる。広範囲に渡る、奥行きの深い、複雑な事件になるな」と柳井警部補は艶のある目でメグミを見つめた。時々そういう目で見られる。

メグミはホワイトボードに目を逸らし、「青江ダム湖溺死体事件」と「亀塚古墳遺体遺棄事件」の双方に貼り付けられた現場写真や見取り図、不審車両、不審人物などの書き込みを眺めた。

「青江ダム周辺の捜索では遺留品は見つからなかつたんですね？」
「ああ。バイク以外はね。でもこれはまだ非公開だけど、今井孝雄以外の靴跡がふたり分見つかつた」

「ええ、つ、そなんですか。じゃあ今井はふたり組にカプセルを呑ませて、ダム湖に突き落とされたってことですか」

「まあ、早計にはいえないけどね。ところで君、疲れただろう、中途半端だし、もう帰宅していいよ。ゆっくり休んで英気を養いたまえ」

「全然、疲れてなんかいません。報告書を書きながら電話番します」

「そうか。昼」はんは食べたのか？」

「はい。寮でいただきました」

富崎芳樹のことを聞いたかったけど、さすがに聞けない。あのお調子者は事の重大性をわかっているのだろうか。バレたらクビものである。

それよりなにより単独で動くのは非常に危険なことだとメグミは思った。

その日は定時で上がったので、富崎芳樹ら同僚刑事に会つことはなかつた。

八時には津久見の弥栄子叔母の家にキャリーバックを返しに行つた。お土産は名古屋名物の『大須ういろ』とチビ達へのちょっとしたオモチャ。上の子らのは忘れた。まあいいわと思ったけど、ちょうどふたりとも家について、早速、「俺らのはねえん?」「うちらいつもすぼん子じゅわ」といわれる。

「なにいよんのかえ、大けなりして。あんたらメグミ姉ちゃんどあんまし歳が違わんのにから。ついろをもらつて食べよ」と弥栄子がたしなめた。

「『めん! こいつと忘れてたわ。また今度ね』まとわりついてくるチビ達をあやしながらいう。ふたりとももうメグミと大して変わらない背丈だけど、子供は子供である。迂闊だつた。

「バツクはあげたのに。でも男物じゃあれか。えらい、早かつたんじゃねえ」

「うん。予定が狂つたんよ」

「あげんことがあつたからなあ」

青江ダムはすぐ近くである。地元では大騒ぎになつていた。

「大騒ぎしよる?」

「しょるぐれえかえ。あれちなえ、葬祭場の兄ちゃんも犯人ちなえ。仲間に殺されたんじゅ ろうか?」

「その辺はまだ、わからないんよ」

「でん、そこん実家にや大勢マスコミが詰めかけちょるんで」

家族は大変だろうなと思う。被害者の家族もだけど、加害者の家族も大変な目に遭う。

弥栄子の旦那も帰つてきて、みんなで夕飯を食べながらやはりその話題になつた。好奇心の強い中学生の孝之などは、現場までチャ

りで見に行つた様子を自慢した。青江ダムは石灰岩の山の麓の谷間にあつて、高山技師の義叔父・常幸の会社のお膝元である。

「鎮南山から姫岳から碁盤ヶ岳にかけてまだ山狩りしようじやな」常幸がいづ。

「うそ。その辺りのどつかに、遺体を隠しておく場所があるはずなんやけど」

「でん、この暑さじ、遺体がもつかのつ。まるままでりともかく、頭・胴上下・脚・腕と五等分に切り分けられたものが。ハラワタも出でよろひこ」「元ひこ」

「あ～もうすかん！ 父ちゃん、ご飯食べよるにそんなこといわんでよつ、氣色悪い」と娘の輝子が顔をしかめる。輝子とメグミは顔立ちがよく似ている。

「保冷車ん中ならじげえ？ 凍らせたらもつじやね。移動も自由やし」と孝之。

「さすが孝ちゃん、その通り。名探偵ロナンぱりこ、いいといふこ目を付けたわね。でもなあ、今のところ、そんな車両はどこにも見当たらんのよ。目撃情報もないし。それに、凍らせたら、解凍した時に、一気に腐敗が進むんよ」

そういうながら、ふとメグミの頭に浮かんだことがあった。

(そうやわー)

「ねえねえ、あいちやん」

サンマのハラワタの苦じところが好きな常幸が、焼け焦げたサンマをほぐしながら顔を上げた。

「なんか？」度の強いメガネをかけて、髪の毛も薄いから老けて見えるけど、弥栄子より三つ若いまだ三〇代である。

「あの辺に鍾乳洞のような洞窟はない？」

「鍾乳洞なら、近くの野津町に風連鍾乳洞があらうが」

「でもあそこは見物客が多いから、隠すのは無理。鍾乳洞の中は半袖なら寒いくらいだけど、ちょっとした洞窟でも、温度は低いけん」

「そらそらじやなあ。ないことはないけどなあ」

「わあ、本当!」

「俺もふたつ知っちゃん。上青江ん山ん中にある。探検したことがある」

「うちもひとつ知っちゃんと」と輝子もいった。「でもあつしにはカンジン ホームレス が住んじよつですかんで、女の子に悪さする」

「なんでんいいけん、あとで教えて」

石灰岩地帯である、未発見の鍾乳洞があつてもおかしくないし、侵食された洞穴程度のものは無数にあつた。さすがに鉱山技師の常幸は詳しい。

それらを小三の田里の落書き帳に書きとめて帰つた。

一〇時過ぎに寮に帰つて、久々にパソコンを開く。新たな情報をそれに打ち込んでいた、ケータイがレパートヤーズを歌い上げた。

富崎芳樹かと思ったら、意外にも榎原光子からだつた。

「はあ~い!」

「ゴメン。もう寝るんじゃなかつた?」

「ううん、まだまだ。今、事件のおさらいをしてたとこ」

「亀塚古墳の遺棄遺体と、ほかの遺体との照合はできたの?」

「それが、うちとこの課長が合同捜査本部から戻る前に上がつたら、どうなつたのか。そつちはどう? なにか? めた?」

「こつちも、……まだ」

「今日はホテル?」

「うん。検事と一緒に」

「え~つ、東浜検事と? 検事はそっちでなにしてんだろ?」

「さあね。検察は手の内を見せない」

「名古屋地検の検事も?」

「うん。ふたりは今飲みに行つてゐる」

「ハバにされたわけ?」

「こちからお断りしたんだ。つざいじやん」

「小堀検事は随分……」ここでメグミは榎原光子をなんて呼ぼうか迷つた。光子ちゃんと呼ぶほど親しくないし、榎原刑事というのも硬いし。「光子、ちゃんを興味深く見てたけど」結局親しみを込めてそう呼んだ。

「因縁があるからね」

小堀検事は城島兄妹殺人事件の担当検事だったからだと、今なら思える。

「公安部だと、もううちらの事件と関係なくなるの？」

「組織上はそうなるね。でも、本母警部によれば、アプローチする方向が変わつただけで、同じ事件を追うことには変わりないって」「そうなの」

「どちらかといふと、検察寄りの捜査だね」

「へー…… なんだ。あつ、いけない！ 長距離だといふ」と忘れてた。電話代が――

「構わないよ。ところでメグ、内密に頼みがあるんだ」

（メグーーつて、同じ年なのに、先輩後輩でもないのに、それはないだろう。下手に出たら体躯会系はすぐにこれだ）
でも、初対面で気後れして位取りに負けたから、しかたないかと思つ、佐藤と呼ばれたら自尊心が傷つくけど。

カリスマを感じさせる低い声で榎原光子はいった。

「メモするものある？」

「うん、ある」

「じゃあ、いう通りの絵を描いて。いい？」

「オーケー」

「醤油顔描いて。髪は――髪はあとまわしにして、眉毛は普通、目は一重マブタで、やや切れ長に吊り上り氣味、鼻筋は通つて、口は薄い唇でややへの字型、両方の口角が上がりつて見える。鼻溝は深いほう。全体的には芥川龍之介に似たタイプ。髪型は色々に変化すると考えたほうがいいよ。身長は一七〇センチ、瘦せ型で直線的にス

マート。腕を振つてアクション豊かに話す。時々両肘でベルトの辺りを揺するクセがある。その際片足を心持上げる……」

「随分細かいのね」 その動作は男性のアレの位置を整えているのではないかとメグミは思った。

「描いた？」

「うん、描いた」

「聞き込みの時、それを見せて。ほかの刑事には敵当な」とをいつて誤魔化しとして」

「この人物が事件となにか関係があるの？」

「まあ、なんともいえないので。——ああ、それから年齢は……一十代」

そうこうと、榎原光子は、「じゃあね」といつて電話を切つた。
(なんだろ……?)

と、ケータイを閉じるのを待つてたかのように、また賑やかな音楽が。まだなにか?——と思つて見ると、富崎芳樹からだつた。

「よこ子は寝てる時刻だけ、悪こ子はHロビを観てたりして」「切れますよ」

「電話中だつたけど、誰から?」

「そんなの先輩に関係ありません」

「でも気になるんだよな、こんな時刻に結構長話だつたし」「すぐ上の階にいてなんなんですか」

「じゃあ、これからお邪魔してもいい?」

「よくあつません。疲れたからもう寝ようかと思つてたところです」「そんな寝る前に話す相手って、どんな相手だひつへーーなんて考えたらぼく寝れなくなつちゃう」

「知りませんよそんなこと」

「明日さあーー」 急に富崎芳樹は真面田な声を出した。「ちよつと付き合つてくれない? 例の手帳の電話番号に片つ端から電話したら、気になる人物が出て」

「そんな勝手でできるわけないじゃないですか」「ところがであるんだよなあ、これが」それを聞いてメグ://はやれやれと思った。

土曜日だところのに休みなし。きっと明日の日曜日もそうだらう。別にいいけど、恋人もいないし——というわりには念入りに化粧してメグミは出勤した。

会議室にみんなが揃うと、課長の山崎警部がいった。

「おい、おまえら、えらいこいつぢやぞ。まず、龜塚古墳の遺棄遺体の下半身じやがな、これが乙津泊地の上半身と一致した。上野墓地公園の両腕とわしらんとの両脚とは別物じやがな。これでふたり分の遺体が、頭部と両腕・両脚を除いて揃つたわけぢや。

しかもその一方は名古屋の元刑務官のもの、そしてもう一方の遺体じやが、これがどうも警視庁が捜索していた運転手の公算が高い。DNA照合はまだじやが、血液型は一致、体型もよう似ちよる」

みんなから溜息が漏れた。これで事件は東京にまで飛び火した。まだ一遺体が残っている。腕の主と脚の主が。どこまで広がりをみせる事件なのか。

「そこでじや。本日より編成を新たにして臨むことにする。柳井係長！」

「はい！」と、柳井警部補が立ち上がり、編成表を読み上げた。

それによると、確かにメグミと富崎芳樹がペアになつていた。大部分の合同捜査本部詰めど、臼杵の捜査本部組にわかれしており、富崎・佐藤コンビは地元組だった。

どこでその情報を前もつて入手していたのかは知らないけど、冗談じやない、コンビだからといって抜け駆け捜査の片棒を担ぐのはゴメンだつた。バレたら連座になる。そんな顔で富崎芳樹の顔を睨んだけど、芳樹はへラへラしていた。

年頃の男女のペアなんてまずいんじゃないの、仕事にかこつけてなにをするかわかつたもんじやない——という顔で中年刑事連中は彼らを見た。若い刑事らはあからさまに羨ましそうな顔をした。柳

井警部補自体が、署長と課長による編成に不満気な顔をしている。

自身連中は、本人がまだ自分の価値に気付かず、かえつて引け田にさえ思つていらうちになんとかものにしなければと思つていたところだ。トンビにアブラゲをさらわれるようなものだった。タンポポの綿毛のように、十里四方に無節操な種を撒き散らす男にかかる。どういうわけか、下川署長がこの軽薄な男を買つている。

そのゾウガメのような下川署長が遅ればせながら姿を現した。

メグミと芳樹は吉賀交通係長の配慮で、ミニ一パトを借り受けて山狩りの現場に向かう。勿論運転はメグミである。制服のタイトスカートだと色っぽい膝小僧が見えてしまつたりするけど、なにしろ刑事さまだから、ウグイス色のサマースーツでビシツと決めているのだ。富崎芳樹はカーキ色のサマースーツに、こっちもノーネクタイで、シャツの襟をだらしなく広げている。

与えられた仕事は、現場周辺集落の聞き込み。だけど例の洞窟探検のほうにメグミの関心はいつている。

そのことを芳樹に話すと、「うーん。なんつか、君つてどうしてそんなにクレバーなわけ。どうしてそれを会議の席でいわなかつたの?」といふ。まんざらお世辞でもないようだ。

「それは捜索隊の仕事ですから。そんなことは誰でも思いつくんじゃないですか?」

「いいや。誰も思いもしない。保冷車や冷凍庫のある施設にばかり考えがいつていた。現に、犬は道からせいぜい二十メートルくらいしか山の中に入つてない。またその必要もないけどね。犬の嗅覚からすると。でも谷川の中を沢伝いに行けば——」

孝之が沢遊びしていて見つけた洞窟は、ふたつとも青江ダム下流の、巨石がゴロゴロしている岩間にあつた。常幸義叔父のもひとつはそうだった。それはでも上流だった。

「聞き込みなんか放つておいてそつちを先にしようか?」と芳樹はいう。

「え～つ。そんなことしていいんですかあ～？」

「構うもんか。どうせ誰も見てないんだし、もう何遍も俺らがやつたあとだもん。報告書は適当に書けばいいんだ」

なんだか相当いい加減な男だなあとメグミは思つ。噂の通りだ。でも余程のことではない限り、先輩に追随するのは仕方のないことだ。お互い譲らなかつたら仕事にならない。しかしそれがあとになつて後悔することにならうとは。

そんなわけで深田に向けていたパトの鼻面をひん曲げて旋回し、臼津バイパスからトンネルを抜けて津久見市街に入り、そこから鋭角に右折して青江に向かうコースを取つた。

かつて何度も吉賀係長と通つた路を、今度は若い男性を身近に感じながら、芳樹は隣に座つているから肩が触れ合うほど近さなのだ、クーラーをかけているのに愛らしい小鼻は光つていた。

前に続く（前書き）

差し替えましたのでもう大丈夫です。

鎮南山山系と姫岳山系を源流とするふたつの谷川が合流する所に青江ダムがあり、そのダム湖から流れはひとつになつて、県道20号に沿つよにして津久見湾に流れ出でている。

孝之が描いた図と常幸義叔父が描いた図を手に見ながら、ふたりは上青江の県道の広まつた所にP.C.を停め、バス停の所から小道に入り、そこから道のない畠返るような草いきれの草藪に分け入つて、ゴツゴツした岩を辿つて沢に下りた。

早速氣付かされたのは、身支度がなつてないということだった。イツチヨウラのスースのズボンには、たちまちクモの糸や草の実や埃が纏わり付いていた。

「あゝあ、こらダメだわ。こんなのが付けて帰つたひにや、なにいわれるかわかつたもんじゃない」ズボンの裾に引っ付いた無数の草の実バカと呼ばれているを取りながら芳樹がいう。

「運動靴じゃないとダメね」顔を火照らせてメグミも足元を見る。ローヒールの靴だけど、何度も足を滑らせて転びそうになつた。その都度芳樹に助けられた。その際嫌でも体が触れ合い、手を握り合う破目になつた。

若いふたりはワーウー キャー キャー いいながら、岩畠や岩から岩へと助け合いながら谷川を上り、まず一個目の洞窟——といえる程のものではなかつたけど——を発見した。孝之がいつたように、山の斜面が抉れたようになつた窪みで、中まで浅い水が入り込み、中央にこんもり堆積した砂の島があつた。奥行きはせいぜい五、六メートルぐらいしかなく、奥に行くほど天井が低くなつていた。でも間口は広く、両サイドが岩畠になつており、ひんやりしていて、死体を置いておくには最適の場所のように思えたけど、そのような形跡はなかつた。

天井を脚の長いゲジゲジが這つていて、 キャー！ なにあれ

? とメグミが黄色い声を上げて富崎の腕に取り付いた。といつても遠慮がちに軽く触れている。

芳樹は片目をすばめて苦笑いした。かつて付き合つた女の中に、スーツの袖口を親指と人差し指で摘まむようにして必死に付いて来る女がいたけど 歩幅が違うから、女はこつでなくしゃいけない。ふてぶてしい女は蹴り飛ばしてやりたくなる。

(んふふふ)

「な、なんですか、ひとが恐がるのがそんなにおかしいですか」

「えつ? いや、どうして?」

「鼻で笑つたじゃないですか」

「笑つてなんかないよ」

「いいえ、笑いました。いつときますけどわたし、脚が何本もある節足動物が恐いだけで、ヘビなんか全然平氣ですから」

「あら、そうなの。それは失礼しました。うん、ぼくもゲジゲジは苦手だなあ。脚が長いのがねえ、なんであんなに長い必要があるんだろ。クモの仲間かなあ……、それより君、ムカデにあの何本もある脚でガシッと? まれた時の感触つて、あれ——」

「キヤー! もうやめてください」

「あははは。ゴメン、ゴメン」

富崎芳樹はメグミを見ながら、かつてビデオで観た映画『パピオン』の美しいシーンを思い出していた。カリブ海の島? の海岸をしなやかに歩くスレンダーなふたり? の黒人女。

青みがかつた白目と、ビー玉のような透明感と輝きのある瞳、今時こんなに輝いた目をした人間はいない。みな不健康に濁っている。それに形よく反り返つた唇。真っ白い歯。(たまらんな、こりゃあ)

「どうしたんですか? ひとの顔をそんにジロジロ見ないでください」

「はいはい」

次のはそこから更に少し上流に遡った所の、川床から巨岩を足がかりにして岩盤をよじ登つた所に、ポツカリ口を開けていた。

それは一番広い所で大人がひとり足から入れる位の大きさの、岩の裂け目といった感じの洞窟で、中は奥まで見通せないけど、小石を投げてみると、意外と広がりがありそうだった。

でも、ロープがないと、入る時はともかく、出れなくなる恐れがある。それに懐中電灯がないと奥のほうは暗いし、洞窟で恐れなければならない有毒ガスを検知する火もない。ふたりともタバコを吸わないのだ。

てなわけで、その洞窟は日を改めてとこりこにして、義叔父の常幸が描いた図面の洞窟に向かった。

それはダム湖より上流で、姫岳山系を源流とする流れのほう、荒々しい巨岩がゴシゴシした山の斜面に、図面では描かれていた。

「その前にメグミちゃんお昼にしない？」と木陰の岩を指して芳樹がいった。

「あの、先輩、それはやめてもうえません？」

「え？」

「佐藤でいいです。ほかのみんなからもそう呼ばれますから」

「ああ、それえ。なんで？」

「変に勘織られるのって、イヤじゃないですか（それでなくとも先輩は軽く見られがちなんですか……）」

職場内で付き合う時は、誰にも感付かれないようにするのが鉄則、そしてまたそうすることによって、秘密を共有している喜びを味わえる。みごとにみんなを騙して「ホールインすれば、「信じられない！」といふことになる。

（なるほど、そういうことか）と芳樹は納得。

しかしこの場合は単に、“馴れ馴れしくするな”という意味だった。「女は男で決まるんだ」「口の達者な男は特に注意せにゃ。男は三年三口といって、口数の少ないおとなしいのがいい」と、バアバにさんざんいわれて育つたメグミである。その一番の見本が傍に

いたから説得力があつた。

知らず知らずのうちにそれが身に付いていた、身持ちの硬い女になっていたのである。今まで彼氏ができなかつたのもそのせいだつた。決して自分の価値を知らないわけでも、引け目を感じていたわけでもなく、実際は誇り高い女だつた。

「ねえねえ、もつとこっち来ない」

ふたりは大きな岩の両端に背を向け合つて座つて弁当を食べていた。

「いいんです、ここで」

——カナカナカナカナ……。

と、ヒグラシが鳴いて山はもう秋の風情だつた。

食後休憩に川遊びをして、それから藪蚊に悩まされながら、姫岳側の急勾配の雜木林を上がつて、石灰岩の洞窟を見つけた。

入り口から一〇メートルくらいまでは人が立つて歩けるほどの岩の裂け目があり、それがふた手に分かれた所で狭くなつて、人の進入を拒んだ。その奥に鍾乳洞があるのでないかといわれている。

そこでもしかし、人が侵入したような形跡は見られなかつた。洞窟内ではメグミのほうがお喋りになつた。

結局その日は、洞窟探検はそれまでにして、残りの時間を帳尻合わせに聞き込みに歩いた。

翌日の日曜日もやはり休みなし。

ふたりは秘かに装備を凝らして洞窟探検に向かつた。

最初は昨日後回しにした孝之一番目の洞窟から。ロープを使って芳樹が洞窟内に侵入した。メグミは外から補助した。

「どんな具合です？」

「うへへん、これは思つたより中は広いな。それに奥行きもある」「気をつけてくださいよ。あまり無理しないで。ガスとかは？」

芳樹は懐中電灯のほかにライターとロウソクを用意していた。

「大丈夫なようだ。でも微かに風はあるようだぞ。奥のほうでは、外に通じた裂け目があるのかも——あつ、あつ！」

「ど、どうしたんです？」

「め、メグ、ミーちゃん！ ローソク、ローソクをもう一、三本投げて」

「佐藤ですってば」

メグミはロウソクを三本新聞紙に包んで落とした。芳樹はそれに火を灯して岩の上に置いて、洞窟内を明るくした。その様子が上から見える。

「火を焚いた跡がある。人が、人がいたんだ。コンビニの袋や、食べ物を食い散らかしたあと、ゴミが散乱している」

「先輩！ 危険ですから、すぐに上がってください。あとは鑑識の仕事です」

「……まあ、待つて。今は人の気配はない。もう少し調べてみよう」「ダメですって！ 奥のほうに隠れているのかも知れないじゃないですか！ 丸腰なんですよ」

「いや、その心配はないよ。これは——たぶん、アベックの仕業だろう。これ見て」といつて芳樹は、木の枝の先になにかを引っ掛け、メグミのほうに差し出して見せた。

「なんですか？ それ？」

「うん、つまり、あれだ、その…」

「よく見えない。もうちょっと近づけて」

「ほら、あれ、……薄いゴムでできたやつ、なんつうか、その一、
まだ少し中味が残ってる——一つつかそのう……」

「キャー——！」

メグミは顔をそむけた。

結局アベックが入り込んでいただけのようだった。奥のほうはト
イレ代わりに使用されていた。

「信じられない！」

「君が近づけるつてゆうから」

「なにもそんなものを見せなくたって、口でそういえばこいつじゃない
ですか！ 口で！ ——」

「これでもぼくは結構ナイーブなほうなんだ。そんな露骨なことは
いえないよ！」

「こらなこことおペラペラベビのような舌を出してこいつへい
メグミの怒りは容易におさまらなかつた。

さすがの女たらしの宮崎芳樹も手を焼いた。

可愛い女の子に、棒の先に乗せた毛虫を近づけて恐がらせる、少
年の心理が働いたことは否めない事実だった。彼は自分でもこうよ
うに、少年のような天真爛漫なところがあった。

そこが女にモテル要因でもあったのだが、佐藤メグミには通用し
なかつた。

「わたしもう聞き込み捜査をしますから。あと五つの洞窟は捜索隊
に任せますから」

そういうつてサッサと、世界の外といわれる八戸^や、河野の辺境集落
に向かつた。

「ちょっと待つてよ、ちょっと。メグミちやーん」

この世も男女関係は恋したほうが負けである。

月曜日の朝、突然、大分の合同捜査本部から召集がかかり、全捜査員が 応援は別 有り合わせの車両に乗り合させて、大分に向かつた。

さいわいまたメグミと芳樹はミニパトを借りて、管轄外に大きな顔で乗り入れた。

というのも、もしほかの連中と一緒に、覆面車や護送バスなどに乗り合わせていたら、会議の帰りに、ある所に寄り道するなどいう勝手はできなかつた。

そのことに関しては、富崎芳樹は頑として譲らなかつた。メグミも洞窟探検という抜け駆けをした手前、そう強くは抗あらがえなかつた。そして更にもうひとつ抜け駆けをしていたからである。

「それって、なに？」と芳樹が訊いたのを、「ううん、ちょっとね、気になるから」と、榎原光子に頼まれた似顔絵を、ついでに村人に見せて歩いたのだ。

ふたりは運命共同体になつたのである。

「失職したら、君どうする？」と芳樹が訊き、「先輩は？」とメグミが返した。

「ぼくは——そうだな、家業の煎餅屋でも継ぐかな」

「わたしは漁師になる。釣り舟専門の。お祖父ちゃんもお婆ちゃんももう、歳だから」

「両親は？」

「いない」

「えつ？ そなんなんだ……」

それ以上訊かれなかつたのでメグミは答えなかつた。

そんな会話をしながら中央署近くのレストランで昼食を取り、午後一時になつたのを見計らつてから、そこからわずかばかりの距離にある法律事務所に歩いて向かつた。

どういうわけか、芳樹が、ダム湖で水死体となつて発見された、

今井孝雄の手帳に走り書きされた電話番号に電話すると、「根岸法

律事務所ですが」という返事が返ってきたというのである。

ふたりはまだ、捜査会議で発表された、三人目のガイシャの身元が明らかになつたことの、興奮から醒めてなかつたけど、とりあえず目の前の疑問を明らかにすることに務めたのである。

お田端の「根岸法律事務所」は、法曹関係の事務所が入ったビルが点在する閑静な中島地区の一角、白亜の三階建てビルの三階にあつた。

受付の女性事務員に手帳を見せたものだから、硬い表情で弁護士が応接室に現れた。

「なんですか？」と、三十代と思しい小太りの弁護士は名刺を取り出しながら、つぶやくようにいった。

「田杵署の宮崎です」

「佐藤です」

彼らは名刺を持ち合わせてない。手帳が名刺代わりなのだ。

「井川いいます。所長に御用でしたら、今ちょっと出てますけど」「先ほどの若い女性事務員がお茶を捧げて現れて、「もう帰られる頃です」といつて去つた。

芳樹とメグミは顔を見合わせ、所長の帰りを待とうか躊躇しようか迷つた。同じことを一度訊くのも面倒だし。見たところ井川という弁護士は、年齢はそこそこなんだろうけど、一目で新米だとわかる初々しさがあつた。

とりあえず、冷たい麦茶に手を出した。ふたりとも喉が渇いていたのである。

そこへ年配の女性事務員が顔をのぞかせて、「井川先生、お電話」といった。

「ちょっと失礼します」つと井川弁護士は出て行つた。

年配の女性事務員はふたりに会釈してドアを閉め——よつとして、「あらつ？」「といった。「——あなたは？」

メグミも気付いて頭を下げた。

(榎原刑事のおかあさん……)

「お知り合い？」芳樹が訊く。

「うん」

するとこには光子のパパ・城島元検事が辞職して開設した法律事務所だったところなの？　光子がなんかそんなことをいつていた、母親が引き続いて働いているとか……そうすると、どっかで聞いたことのある名前だと思ったら、根岸といつのは、もしかしてーー。メグミが思考をめぐらせていると、榎原遼子が近づいて来て前に腰を下ろした。

「えーとあなた、なにちゃんとだつたかしり？」

「佐藤メグミです」

「ああ、メグミちゃんだつたわね。光子に聞いたわ。随分お手柄を立てたんですつてね」

「いえ、そんなことありません」

「ほんとにねえ、光子もあなたのようなお友達が傍にいてくれると安心なんだけど」

「遠くへ行っちゃいましたね」

「やうなのよ。警察官になるのだつて反対だったのに、刑事でしょう。そして今度は公安だなんて。ほんとに父親に似て……危険などこにばっかり……」

「公安部といつても、そんな危険などこじやありませんよ、おかあさん」

「……子供時分から親に甘えたことのない子でねえ……どんどん大きくなつて、どんどん遠ざかつて行くばかり……孫を抱かせてもらえる日なんて、くるのかしらねえ……」

メグミは無性にこのおばさんが愛おしくなつた。

「心配ないですよ。光子ちゃん、強いから」

「それがいけないんですよ！　男勝りに柔道なんかやつて、九州に敵なしだなんておだてられてーー福岡に田村という強い人がいるでしぇうーーあんなの軽量級だからお姫様抱っこしてしまえば、亀を裏返したようなもの、空中で絞め落としてしまえばーーなんて大きなこといつて、いい気になつてるーーメグミちゃんのような、可愛

い娘でいてくれたら、どんなによいか——国際交流かなにかで?」「えつ?」

「ちょっと伺いますが」と富崎芳樹が口を差し挟んだ。「おまかまは神原刑事のおかあさままで?」「そうですけど?」

「こちらの根岸ともみ先生のことについて、少し伺つてもよいですか?」「先生がなにか?」

「ええ」と芳樹は口ひもつた。そして、「実は、田杵のバラバラ遺体遺棄事件の容疑者、青江ダムで水死体となつて発見された今井孝雄の一ー」

といったところに井川拓馬弁護士が戻ってきた。井川弁護士は神原遼子の横に腰を下ろした。

「今井孝雄がどないかしましたんか?」

「ええ。今井孝雄の手帳に、こちらの事務所の電話番号が書かれてあつたものですから」

「えつ?ほんまに?」

と、井川弁護士は怪訝な顔を神原遼子に向かた。

「トシちゃんがいつてた、妙な問い合わせ電話つて、あなただつたの?」と神原遼子。

「はい」

「どうこういふことですやろ?」

ふたりは心配そうな顔で富崎芳樹を、そして佐藤メグミを見た。

「おふたりに心当たりがなければ、根岸先生にお聴きするしかないですね。事前にちょっと調べさせてもらつたのですが、根岸ともみ先生といつのは、以前こちらで事務所を開いておられた城島先生、つまり神原刑事のおとうさまであり、あなたの元夫であられる城島元東京地検検事のもとで働いておられたんですね」

「ええ。そうです」と遼子が答える。

「根岸先生は、希代の謀殺人といわれた青山姪臣^{てつおみ}の双子の姉でした

ね

「ええ……」

「そこ」が解せないのですが、あなた方は本来、仇同士だと思つんですけど、その辺のこだわりはないのですか？

「別にありません。根岸先生は尊敬できる方ですし、友達でもあります。光子は姉のように慕つておりますわ」

メグミは芳樹にもこういう真摯な面もあるんだと感心した。いつくれればこれくらいの情報は教えてあげたのに。光子や東浜検事から聞いていたことだ。

「ところで、根岸先生は遠くへ出張なさることはあるんですか？」

たとえば名古屋や東京なんかに

「どういう意味ですか？ そりやあ、ありますよ」井川弁護士が答えた。

「最近では？」

そろそろふたりの顔が険悪になつた。

と、そこへ、「当人がふたりと現れたのである。まるで立ち聞きしていたかのようだ。」

前触れがなかつたわけではないのに、ふたりが唐突感を抱いたのは、あまりにもイメージが違つていたからである。無論それが今話していた根岸ともみ弁護士であることは、ブルーグレイのスーツの襟に光つている弁護士バッヂですぐにわかつた。

メグミも芳樹もつい見とれて挨拶が遅れた。

「先生、こちらの方々がお待ちかねでしたよ」といつて光子の母親が立つて席を譲つた。

根岸ともみ弁護士のほうも暫らく無言で立つたままふたりを見下ろした。

（キヤハツ！ 超イケ面だわ。カツコイイ……）

若いふたりはようやく気付いて立ち上がり、「印紙署の富崎です」「佐藤です」といつて頭を下げた。

サマースーツの襟からライトブルーの大きなシャツの襟を出したすらりとした長身——富崎芳樹と同じくらいだった——の根岸ともみ弁護士は、「根岸です」といつて右手でふたりに腰を下ろすよう促した。

その柔らかい声に、メグミは腰を下ろしてからハタと氣付いた。（えつ？ なに？ ああ、そうだった。女性だったんだ……）

なんだか妙な気分だつた。芳樹も戸惑つてゐるみたいだつた。

彫りの深い外人のような顔立ち。栗色の髪が、面長の端整な顔を流麗に縁取つて、前髪が左眼を隠すように垂れています。なのに一瞬イケ面だと思つたのだ。でもよく見ると凄い美女だ。

でも宝塚の男役のように、男を感じない。いや、女性だから男を感じないのは当たり前だ。でも、男前。（ああもう、ややこしい……）

根岸弁護士は、井川弁護士の横に腰を下ろし、ソファーにゆったりと背をあずけて座つた。長いズボンの脚を組んで、軽く組んだ両手を膝の上に置いてふたりを見据えた。

「なにか？」

「ええ……」芳樹は気圧されて、上ずつた声を出した。「先生に少々お伺いしたいことがあります」

「なんでしょう？」

そこへぐだんの若いと思つたけど三〇はいつるかもとメグミは思つ。女性事務員が、お茶を捧げて現れて、ボス弁の前に置いた。光子のママはいつの間にかいなくなつていた。事務員はちらちらメグミを見て出て行つた。

「ご承知かと思いますが、臼杵事件の容疑者・今井孝雄の手帳ですね。こちらの事務所の電話番号が走り書きされていたものですから」

「手帳が？ それは初耳ですね。それはいつ押収されたのですか？ 今頃どうして？——という感じを受けますけど」

「最近です」

「どこで？」

「それはいえません」

根岸ともみ弁護士は、若いふたりの刑事の中間に視線を据えていた。恐い眼だなとメグミは思つた。

前髪で顔を隠すのは心の中のなかを隠そうとする心理の表れだと、いつか吉賀の親父に聞いたことがある。吉賀係長はそんな風には見えないけど、あれでなかなかの勉強家で、心理学を勉強していくて、人の風貌や動作に表れる隠れた心理を読み取るのがうまい。

それからすると、根岸弁護士は額半分と片眼を髪で覆い隠そうとしているから、なにか隠したいものがあるのかも 誰にだつてあると思うけれど。ファッショングでさえそうだといわれて、嫌な気分になつたこともある。

現に自分がストレートパーマをかけているのは、みんなと同じよ

うになりたいといつ心理による——といわれても仕方がない。そういういて子供時分に、バアバに取り縋つて泣いたからだ。チリチリの毛が嫌で嫌でしようがなかつた。

そんなことを考えていると、いつの間にか根岸ともみ弁護士に見つめられていた。

そして根岸弁護士はメグミにニーッコリ笑いかけた。

破顔一笑で、それまでの硬質な顔が、恐い眼が、ウソのように消えた。口角を上げて得意然とした少年のような顔になつた。芳樹の話では四十過ぎのおばさんだというのに、とうていそろは見えない。三十前後といつても立派に通用する。笑顔は魅惑的だ。

その笑顔をメグミから芳樹に向けていう。

「それは興味深いことですね。その手帳、拝見させていただくわけには?」

「それはできません」

「そうですか。でも、そういうわれても、しちらはめどつといつてよいか。積極的に宣伝しているわけではありませんけど、一応看板を掲げてますからね。以前は無難な、信用ある方からの紹介案件しか受任しませんでしたけど、この頃はご他聞に漏れず業界も不景氣ですから、飛び入りのクライアントも引き受けることにしてるんですよ。たとえそれが凶悪な犯罪者であつても」

「……」

「でも、その今井孝雄なる人物からの依頼はなかつたですわ。そうですね、井川君」と、隣りのイソ弁にいう。

「はい。ありません」と井川弁護士。

そういうわれてしまえばどうしようもない。常套句を口にするしかなかつた。

「失礼ですが、先生は最近「出張には行かれましたか?」

「ええ、行きました」

「いつですか?」

「え」と、といつて、根岸弁護士はスーツの内ポケットから弁護士

手帳を取り出して調べた。「先月の頭、七月五日から二二日までになつてゐる……」

「どちらまで?」「

「名古屋。そしてついでに東京まで足を伸ばしたの」

「「J用向きは?」

「一足先に弟の墓参りにですね。お盆にはこちらの仕事が忙しくなるから」

「弟さんといふと、双子の弟さんですね」

「よくご存知ね」

「ええまあ」さすがに光子刑事の父親と叔母に殺されたなんていいえない。「墓地はどちらに?」

「本当は岐阜刑務所の無縁墓地に眠る母のもとに、と思つたんだけど、なんだか刑務所に入れるようで可哀想だから、三河湾に散骨したの。だから三河湾を逍遙しながら懐んだのよ——といつても、離れ離れに育つたから思い出なんてなにもないけどね」

言い訳だとしたら、うまい言い訳である。裏を取るのが大変だ。

「東京へはどうして?」

芳樹は執拗に攻める。質問が簡潔なのがいいとメグミは思った。メモを取らずに頭に書き込みながら、根岸弁護士の表情の変化に注目した。根岸弁護士は無表情で淡々としている。

「急に学生時代が懐かしくなつて、それで滅多に出てこれない」とだから、事務所のほうが気になつたけど、井川君がよくやつてくれていたから一一つい足を伸ばしてしまつたのよ」

「あつ、うつかりしてました。足は、そこまでの足はなんだつたんですね?」

「名古屋までは大分空港から飛行機で、東京へは新幹線、その外の移動は電車だつたりタクシーだつたり」

「自家用車はお持ちですか?」とメグミが口を差し挟んだ。

「いいえ?」

あつけなく否定された。

でも疑えばきりがないけど、白いセダンには運転手がいたのかも知れない。もし根岸弁護士が飛行機や新幹線を利用したのであれば、その運転手はセダンで移動したとも考えられる。行く先々で合流し足となつた。もつといえ巴それで拉致した。共犯者は何人いるかわからないのだ。

しかし仮にベルタならそう何人も運べないだろう。四人も運べない。名古屋の失踪現場に、白いホンダのステップワゴンが路駐されていたことが、一瞬メグミの頭を掠めた。

でも、眼の前の女性弁護士がそんな大胆なことをするだろうか。だとしたら動機なんだろう？

さつき発表された三人目の遺体の主も、城島元東京地検特捜部検事に関係ある人物だつた。もし仮に光子のパパが謀殺されたものなら、暗殺に係わつた者が次々に報復されることになる。

でも、根岸ともみ弁護士が報復する相手は、城島一族であるべきである。動機がない。むしろ、光子が犯人であるなら立派な動機がある。けどそんなバカなことは有り得ない。

でもなんだか眼の前の女は不審者と様子が似てゐる。黒っぽい衣服を着て、男のような髪型で、ヒゲを生やしたら、最上七男の妻らが証言したホストのような男になる。喋らなかつたら……。

(――でも？――でも？)

芳樹はもう質問のネタ切れのようだ。麦茶を飲んで一息入れている。

メグミは思い切つて不審者の絵を根岸ともみ弁護士の前に置いた。これは新聞でもお馴染みの足立明君が描いた絵だから、初めて見るものではないはずである。それでも根岸弁護士はじつと見入つた。しかし表情は相変わらず無表情だ。

井川拓馬弁護士もそれに見入つた。

そこでふと、もう一枚の絵のことを思い出した。それを見せようかどうしようか迷つた。そんなに手の内を見せてよいものかという思いもある。

光子がいう通りに描いたのだから光子が描いた絵も同然。姉のように慕つてゐるという根岸に見せてみたい気もした。
その気持ちのほうが勝つた。

メグミはコピー用紙に描いたそれを広げてテーブルの上に並べて置いた。

井川弁護士は興味を示さなかつたけど、根岸弁護士は明らかに反応を示した。

じつと見入つたのは同じでも、そこから発散される氣のようなものがあつた。

ゆつくり顔を上げて——前髪から透けて見える左目に心の内が表れているよつで恐い顔だつた——「これは?」といった。

「このよつな人物に心当たりありません?」とメグミはとぼけた。
「……え

「じゃあこれぐらいにして」と富崎芳樹がメグミを見て切り上げようとした。「先生、大変参考になりました・またなにかありましたら……」

「ちょっと待つて、光子ちゃんのおかあさんに話があるの」とメグミ。

「じゃあ、呼んできましょか」といつて井川弁護士が呼びに行つた。
根岸弁護士も出て行つた。

入れ代わりに榎原遼子がやつてきた。

「参考になつたかしり」

表情は硬い。

「ええ。大変に参考になりました」

「だといいけど、それでなにか?」

不安氣である。

「ええ、光子ちゃんから電話があつて、元氣にしてるからつて、ママに会つようなことがあつたら」

「あら?」と榎原遼子はテーブルの上の絵を見てつぶやいた。

「そういうて欲しいって」ウソでも方便である。

「これは……」

「！」の絵がどうかしましたか？」

「ああ、そういうことなの。光子が東京で竜平に会ったのね。それで竜平の似顔絵を。仲が悪くて、ケンカばかりしてたけど、やつぱり兄妹だわね。ほほほ」

「えっ？」

メグミと芳樹は顔を見合せた。光子ママを安心させてあげようと思つてついたウソだったけど、とんでもないことになつた。

前に続く

帰りは197号線から田杵に向かった。

10号線から吉野経由で帰つて部落の聞き込みにまわる余力はもうなかつた。

「早く帰還して報告書類を書き、一〇時からの会議に備えよう。ほかのみんなも、乗り合わせできていたから、そうしているはずだよ」という芳樹に賛成。メグミも報告書類をたんまり溜めていた。ふたりとも頭の中を整理するのでいっぱい、帰りの車中は言葉すくなく黙り込んでいた。

鶴崎橋にさしかかった所で、「……どう判断したらいいんだろう」と芳樹がぼそつといった。「アリバイとかの状況からすると、限りなく疑わしいけどなあ……」

「心証は白つてことですか?」

「いや、そこまでは。でも、事件の残虐性と、あの美人弁護士とは、あまりにもギャップがある。あの笑顔はいいなあ……なんとい

うか、純真な、いたずら悪戯つぽい子供のような

「ええ、ええ、その素敵なお顔に悩殺されて、肝心な」と、訊き漏らしましたね、先輩」

「どういうこと?」

「だって、わたし達の事件のアリバイを訊かなかつたじゃないですか」

「ああ」

「アアーッ! ほんとだなあ。あらららーーなんてことだろ。——でも、どうして君が代わりに訊いてくれなかつたのーー」

「実はわたしも悩殺されていたんですつ」

「えつ? 相手は女性だよ?」

「先輩には女性にしか見えなかつたですか?」

「当たり前だろ」

家族構成を知るために、ちゃんと戸籍照会をしてあった。しかし

本当のところ、彼も最初は面食らっていたのだ。

「でもわたしには時々イケ面に見えたりして」

「なに赤くなつてんだよ！」

「わたし、面食いですか？」

完全にメグミのほうが優位に立つていた。芳樹をからかう余裕もあつた。

「でも、突つ込みは鋭かつたですよ。さすがだなあと思つた。彼女時々恐い顔してたもの。なにがあるのは感じますよ。全然関係ないとは思えない」

「だよな。でも困つたなあ……裏を取るつたつて、東京や名古屋だろ。それよりヒョウタンから駒が出て、これがホンマもんになつたら、えらいことだぞ」

「ですよねえ、冗談ではなく、枕を並べて討ち死にとこつ」と」「そうなつたら仕方ない。君の面倒はぼくが見てやるよ。おー

ひょひょ…」

「イヤですわ」

もうひとつ問題があつた。

「それよりあの絵だけど。どうして君が榎原刑事の兄貴の似顔絵を持ち歩いてんだよう？」

「彼女に頼まれたから」

「えつ？」

——光子の兄——光子ママは竜平といった——がこの事件に関係しているのだろうか？

絵を見て根岸弁護士の表情が強張つたのは確かだつた。光子パパの時代からの付き合いなら、彼女が長男の竜平を知つていて当然だらうけど、驚きようが尋常ではなかつた。恐いくらいだつた。

今夜にでも光子に確かめようとメグミは思つた。（でもビックリするだらうな）まさか自分の母親にまで見せようとは彼女も思いも

よらなかつただろう。

しかも、自分らは彼女が姉のように慕つてゐるといつ根岸弁護士に疑念を抱いてゐるのだ。

そういうば、不審者の絵を見る時、いつも光子はボーとした目で眺めていた。

「榎原刑事の兄貴が絡んでいるとしたら、動機は充分だな。当時のメディアの記事をネットで調べたけど、城島元検事はなぶり殺しされた——という酷い論調のものもあつた」

「でもどじして今になつてなんですか？」

「それは……背後関係がよつやく明らかになつたからかも——そう、あのメッシュセージの——“老翁も囁田せよ”だ、黒幕の正体は「劇場型犯罪で、壮大な復讐劇を演じてゐるといふんですか」

「だとしたら……ああ一つ！」

急に芳樹が大声を出した。

メグミはビックリしてハンドルを揺らした。

「な、なんなんですか。おどかさないでください」

「これはえらいことだぞ」

「なにがえらいことなんですか？」

「もうすぐ国体が始まるな」

「だからお偉いさん達が焦つてるんですよ。山辺刑事部長が、いいえ、森田本部長までもが、影響を恐れて、ハッパをかけられたじゃないですか。本部長が捜査会議に顔を出すなんて、異例のことじやないですか」

「そんなもんじゃないかも知れない……」

「どういうことですか？」

「これから連中はそこの標準を合わせてくるのかも……」

「……」

「国体には日本全国の注目が集まる。開会式には天皇皇后両陛下を始め、勲章ジャラジャラのお歴々が居並ぶ」

「です……よね」

「老翁もくるかも知れない。……」

「身分の高い人物——ということですから、そういうことも？」

「……そこでなにが起きるか……」

「なにが起きるんです？」

暫しの沈黙があつて——。

「お——ひよひよ！」

と、芳樹が雄叫びを上げた。

「ああもう、おどかさないで、つてば！」

「——生首を！ 生首を早く見つけ出さないと、えらいことになる」
メグミは、この天真爛漫な軽い男が、どうしてか、下川署長に気に入られている。自分もそうだと自惚れてもいた。一端を垣間見た思いがした。

——案外、賢いやつかも。それか、想像力豊かなお調子者の、單なるバカか。

それにしても、三つ年上の兄がいるといつてたから、竜平は二四歳のはずである。そんな若輩者が、そんな大それたことを——仲間がいるにしたつて、中心には動機のある彼がいるはずである——成し得るものだろうか。

それに根岸弁護士がどう係わっているのか、彼女にそんな義理はないはずである。

メグミは城島——いや、榎原竜平という光子の兄がひょつとしてこの大分にいるのかも知れないと思った。でなければ光子があんな絵を描かせて、秘かに頼み込んだりしないはずである。

「榎原竜平についても調べなきやならない。これはもうぼくらの手に負えないな」

「ですよねえ……」

ふと思つた。吉賀係長に相談してみようかと。吉賀係長なら咎め立てしたり、騒ぎを大きくしないで、うまく収めてくれるかも知れない。あの親父と下川署長とは仲がいい。

しかし、そういう思いを打ち碎く事態が彼らを待ち構えていたの

である。

「お前ら、こそこそなにしようるんじゃ！」

バーンと手の平で机を叩いて山崎警部は怒鳴った。

傍には柳井警部補も立っていて、ふたりを睨みつけている。デスクワーク中の連中が、いっせいに振り返って見た。

「富崎！ ゆうてみい！ なにしに法律事務所なんかに寄った！」

太い目を剥いて芳樹を睨みつける。

「……」

「佐藤！」 メグミも睨まれた。

けど返す言葉がない。懸念が現実のものとなつたのだ。

「……」

(どうしてわかつたんだろう?)

脇から柳井係長がいった。

「さつき、根岸法律事務所から電話があつた。若い刑事がふたり聞き込みにきて、不本意な追及を受けた。従業員は動搖している。法律事務所に刑事がくること自体、迷惑千万なのに、こっちの事情も考えず、アポなしでくるとは非常識ではないか——というんだ」

メグミも芳樹もおたれて言葉もない。

「ほんとうに被疑者の手帳は存在するのか。そこに当方の電話番号が記されているというなら、それを見せて欲しい——とな」

「手帳たアなんか？ 今井孝雄の手帳たアのことか？ ——おお！」

とまた警部は机を叩いた。

富崎芳樹はボソボソと一部始終を語った。そして懐からビニール袋に入れられた黒い手帳を取り出して、課長の前に置く。

室内が緊張に包まれた。驚きと、呆れと、憐れみの顔。恨みがましい顔。特に直接の上司である板井部長刑事は、怒りと腹立たしさ

で赤黒い顔を芳樹に向いている。ほとんど嫌がらせで、捜索隊扱いして芳樹にダム周辺の捜索をさせたことは忘れている。

光子の兄・榎原竜平の件に関しては、芳樹は口をつぐんだ。メグミを庇つたのだ。さいわい、根岸弁護士はそのことには触れてなかつたみたいだつた。

でも、メグミのほうは、おつけそれもバレルだらう。バレなくとも、その方面的捜査が遅れることになる。取り返しのつかないことになる。此られるのなら一時に叱られたほうがいい。どんな処分も甘んじて受けようと思つていた。

芳樹が、その思いを押し留めるような目付きで、メグミを見た。その目は、（よせ！ 今はいわないほうがいい。衝撃は分散したほうが緩和される）といつていた。

メグミは呑み込んだ。光子との約束は“内密に”ということだった。この信義を重んじた。少なくとも、いつこう事態に至つたことを光子に報告してからにしようとした。

だが早い審判が下された。

「お前ら、会議に出席せんでよろしい。今日は定時で帰れ。明日署長の処分が決まるだらう。わしはもう知らん」と山崎警部はいった。

みんなの冷ややかな視線を浴びてふたりは席に戻つた。

報告書類を片付けて、一七時半にメグミは刑事部屋を出た。芳樹はまだみんなに取り囮まれていた。

例によつて涙ぐんで交通係に駆け込む。

吉賀巡査部長が執務机で新聞を広げてつくねんとしていた。

「どうした？」

鼻に掛けたメガネの上からメグミを見ていつた。

普段は自分より何十センチも背が高い者でも、見下ろすように見る親父だが、老眼鏡を掛けた時だけ、鼻に掛けたメガネの上から、上目使いに見上げるのだ。そういう時はひどく年老いて見える。度

の強いメガネ越しではぼやけて見えないのだろう。

新聞をたたんで脇に置き、「なにかあったのか?」とメガネを外しながらいわ。

「わたしもうクビになるかも知れません」

「そいつは穢やかじやないな。どうしてじゃ?」

今度はメグミが一部始終を話す番だった。山崎課長の言葉まで付け加えて。

聞き終えると、吉賀は腕を組んで溜息をついた。

「一番やつちやあいかんことをやつてしまつたな。あいつは一体なにを考えてとるんじゃ——」

「わたしも悪いんですね」

といつてメグミは、辺りに人がいないのを確かめてから、声をひそめて、洞窟搜索のことや、そして光子に頼まれた絵のこと、根岸法律事務所での事情聴取の模様まで、正確に、洗いざらい話した。

「う～む

吉賀は腕を組んだまま考え込んでしまった。

五分くらいして——それがどんなに長く感じられたことか——メグミはもうハンカチを取り出して、汗を拭く振りをして目頭を押さえていた。

「よしわかった」といつて吉賀は立ち上がり、メグミの肩を叩いて、「せつかく早く帰れるんだ、ゆつくり休養するんだな」といつて立ち去つた。

メグミは自分がいた頃の部屋を見回し、自分の席だった机を撫で回して、ガヤガヤ入ってきたかつての同僚の女の子らと少し世間話をしてから、チャリで寮に帰つた。

寮に帰つてから再びチャリで出かけた。生協に行って缶ビールなどを買い込んだのだ。これが飲まずにいられよつか。光子に会わせる顔がない。

寮の食堂で夕食をすませ、シャワーを浴びて、サッパリしたところで、パソコンに向かう。

時刻はもう一一時をまわっている。ビール片手にパソコンを開いて、ワードパッドとに新たな情報を打ち込む。

ここで気をつけないといけないのは、缶コーラを倒してキーボードを濡らし、パソコンをパーにした者がいることだ。かつての同僚の中にそういう者がいた。

だから飲み物は机の一番端に置くことにしている。用心してウエスを間に置いてもいる。

でも食べ物——特にオカキなどのクズをキーボードの隙間に詰まらせて失敗した者もいる。「ヨ・よ」を打ち込んで「ン・ん」にしかならず、たとえば「チヨコ」とでも打ち込んだら大変、予期せぬ記事がヅラ・ヅラ・ヅラと表示されるという事態に陥った者もいるから油断できない。

とりもなおさずそれはメグミ自身だったのだが、さいわいそれは修復できたけど、小川巡査の場合は、買って一年と経たない三〇万円もしたノート型パソコンが、復旧ならずに買い換える破目になった。

ちなみにメグミのパソコンは、就職祝いに神戸の叔母から贈られたものである。アダや疎か（おろそか）には扱えない。

? 「赤間中」^{あかもなか}（六一歳）右翼系元暴力団構成員。名古屋刑務所を本年の五月一〇日に出所して、七月七日から行方がわからなくなっていた。上野墓地公園で発見された両腕と、赤間の家族のDNA Aの型が一致して本人確認ができた。

赤間は刑務所の工場で、城島元検事と諍いを起こしてケンカ両成敗、両方とも懲罰を受けたが、城島元検事は腹部への革手錠の絞め過ぎで窒息死した。

裁判で赤間のほうが諍いを仕掛けたことが明らかになつた。赤間と、大野木元大臣の秘書であり、右翼団体主催者の拳銃自決した常

本氏との関係もわかつた。

常本氏を中心にして、大物代議士運転手兼ボディーガードの西塔氏と、赤間とは、かつてはヤジロベイの両腕のような存在であった（でも両者に面識はないという）。

そして刑務官の最上七男も、常本氏と、高校の先輩・後輩という関係から、深い付き合いがあつた。

西塔と最上は、仲良く寄り添うようにして、乙津泊地と龜塚古墳に、上半身・下半身を遺棄されていた。

これで身元確認のできていない遺体は、臼杵事件の両脚のみとなつた。

未発見の残りのパーツは、頭部が四つ、両脚が三つ、両腕も三つ、胴体 及び下半身 が二体——かな？（ああややこしい…）

? 「根岸ともみ」（四一歳） 希代の謀殺人といわれた青山姪ひつ臣おみの双子の姉。容姿端麗。弁護士。東京大学・法学部卒。独身。名古屋事件・東京事件のアリバイはもつかのところなし。臼杵事件のアリバイも未定。大分にはいた。

? 「青山姪臣」「城島竜一元検事」についての情報は不足。ネットで検索の必要あり。

? 「榎原竜平」についても情報不足。

そこまで打ち込んで、メグミは一息入れた。ビールが効いて頭がボーとして心地よい。

シャワーは浴びたし、このままひっくり返って眠りたいところだけどほんとうにもう疲れていた、もうひと仕事残っていた。

光子と連絡を取つて謝つておかなければならない。詫びを入れるのは早ければ早いほうがよいのだ。ついでに兄・竜平のことを訊いてもみたい。

そこで携帯メールを打ち込む。

——光子ちゃん。

「ごめん！ 大変なことをしてしまいました。
まず、あの絵を、根岸ともみ弁護士と、そして、おかあさんにも
見られてしまいました。

実は、今井孝雄容疑者の手帳に書かれた電話番号の中に、根岸法律事務所の番号が記されてあつたのです。それで聞き込みに行つた
わけです。

根岸弁護士は絵を見て明らかに動搖しておりました。おかあさんは
偶然見られたのですが、即座に光子ちゃんのおにいさん、竜平
さんだとわかつたみたい。

でも心配しないでください。おかあさんはあなたが描いた絵だと
思つてますから。

そして次は、悪いことにその手帳は相棒刑事が捜索で見つけたもので、内緒で抜け駆け捜査をしていたものでした。

それがバレて糾弾される破目になり、ふたりともクビが危うい事
態になつております。竜平さんのことは伏せておりましたけど、わ
たしがつい、信頼のおけるかつての上司に漏らしてしまいました。
ほんとうにごめんなさい。

とりあえず、それだけお知らせしておきます。

後日談はまたあとで……。

メグミ

送信してから溜息をつき、芳樹と同じように、城島元特捜部検事が担当した疑獄事件や、青山姪臣殺害事件、裁判の模様、刑務所での獄死事件などを、ネットで検索したり、当時の新聞を閲覧したりして、興奮して眠れなくなつた。

ようやくベットに横になつたのが、明けの日の三時過ぎ、その間に芳樹からのメールはあつたけど、光子からの返信はなかつた。

前に続く（前書き）

前回少し誤認がありました。

刑務官の最上七男とつながりがあるのは常本氏のほうでした。
したがって、こうなります。

——そして刑務官の最上七男も、常本氏と、高校の先輩・後輩と
いう関係から、深い付き合いがあった

六時に設定してあるケータイの目覚まし曲で目が覚めた。ヴェルディの『凱旋行進曲』である。

新しい着信があつたみたいなので見ると、メールが一件入つていた。一件は芳樹からのもので、二件目は五時半に光子からのものだつた。

それによると、

——了解。

とだけ書かれてあつた。光子らしいといえらるいけど、あんまりだ。怒っているなら、そういうて欲しい。そのほうが救われる。たつたのふた文字ですまそなんて——とメグミは腹を立てた。そのふた文字が、中性子星のように重たく感じられたのだ。

(どうせ友達でもなんでもないんだから、別にいいけど——)

かえつてそのほうがよいのかも、とも思う。これから——といつて、どういう処分が下されるか知れないけど——彼女の大事な者達を追及することになるかも知れないのだ。憎まれていたほうが気が楽だ。

いつものようにパンと牛乳で野菜サラダを作るのは面倒だ朝食をすませ、慌ただしく身繕いをして出勤した。嫌なこと、煩わしいことは、あとまわしにしたい、などという心理はメグミにはない。気が重いことほど早く済ませてしまいたいといつほうだった。面倒臭がり屋なのに、そういうところはバアバに似ていた。

その点、富崎芳樹のほうは、嫌だ、嫌だなあと思ひながらぐずぐずしていく、遅刻寸前に駆け込んできた。メグミがみんなからさんざん責められたあとにである。

どういうわけか、板井デカ長の姿が見られない。そのことが余程
気鬱だつたらしく、ホツとしたように芳樹はチラリとメグミを一瞥
してから席についた。柳井係長の姿もなかつた。

やがて山崎警部が出勤してきて、「富崎、佐藤——ちよつといこ
！」とふたりを呼びつけた。

みんなが興味深く見守る中をしずしずと課長の前に進み出る。
「お前ら今日から本部の下郡警部補の指揮下に入つて、お犬様と一緒に遺体捜索にかれ。それなりの衣装に着替えて、一行の到着を待て。いいな」

「はい」「はい」

とりあえず返事をした。とりあえず安心もした。

みんなは、なんだよつーーといつよつな顔で処分の甘さに不満を露わにした。

山崎警部はギョロリとふたりを睨んまま、暫いくの間無言の責め苦を伝えた。

そして、「さつひよむ警部とおへま巡查部長に失礼のないようにな」といった。
つまり犬以下といつことだ。

下郡警部補は細い体の優しそうな親父だった。ショパード犬は二頭とも精悍な顔つきをしていたが、落ち着きがなかつた。

「佐藤君か」と下郡警部補はメグミにいつた。「洞窟に案内してもらおうか

リーダーはぼくのほうなんだけれど、といいた氣な顔で、芳樹が警部補を見た。

「君すまないけど、これを持つてついてきて」

その芳樹に紺の作業服に紺の略帽姿の訓練士が、おへま号のリードを渡した。こちらはがつしりした中年男性だった。もうひとりの

若い女性訓練士は車両のほうに行っていた。

なんでこんなやつに使われにやいけんのか、と芳樹はぶくれている。

ふたりは駐車場の金網のフェンスの所へ行った。どうやら「」でオシッコをさせるようだ。

メスはやっぱりしゃがんでする。人間と同じ。構造上からそうなつたのだろうか。でもバアバは野辺では時々尻を捲つて立ちショーンをした。それが子供心にも体裁悪くて嫌だつた。PTA参観にもきて欲しくなくて、神戸に稼ぐ前の叔母が代わりにきたものである。

車両は鑑識の小型バスで、鑑識さんが運転手を含めて二名、訓練士が男女二名、それに下郡警部補と、芳樹、メグミの、合わせて七名に、犬一頭という陣容だった。

道中、メグミはぼんやり考えていた。頭の中でふたつのことが妙に引っ掛かっていた。同じ人間から同じ言葉が日にちをえて一度発せられた。これは単なる重複なのだろうか？

「ねえ」と、隣で不機嫌な顔して外を眺めている芳樹に声をかけた。「なに——」

「手帳には電話番号のほかになにか記されてなかつた?」「ほかについて?」

「だから、なんでもいいんだけど、なにか?」

「だからそれがどうしたの——」

「どうもしないけど、なにか?」

「家計簿みたいな出入金。随分几帳面なやつで、月々の收支をきちんと記録していた」

鬱陶しそうにいう。

「ほかには?」

「借り出したレンタルビデオとかの——」

「そのほかには?」

「しようもないことだよ——」

「しようもないことでもいいからこいつで、

「ナンバーズの予想とかだよ」

「それで？」

「あとは細々したメモ…」

「どんな？」

「そんなこと一々覚えているもんか——」

「どうしてそう投げ遣りなんですか、先輩。ちゃんと考えて…」

芳樹は初めて怒りを込めた目でメグミを見た。

「なんでそんなこと一々訊くんだけよう」

「そこになにか手掛かりが含まれてるかも知れないじゃないですか

あ

「そんなこたあ、とうごぼく自身が吟味して、手掛かりを掘んで、容疑者にまで辿り着いたじやないか！ それを評価しないで、どうしてぼくだけ責められるだよ！」

「わたしだって責められてますよ。危つい立場に立たせられているから、必死になつてるんでしようが！」

「いいや、君には吉賀の親父様がついてる…」

「先輩だって署長さんの信頼が厚いじやないですかあ…」

とそこへ。

「——うるさい…」と、優しそうな警部補が思ひのほか大声をだした。

芳樹とメグミは驚いて振り返る。

「なに騒いでるんだ！ 君ら。犬が恐がってるじゃないか…」

「すみません」とふたりは頭を下げた。

メグミは声を落としていう。

「根岸弁護士は一度、じつにったんですよ。それを拝見させていただくなわけには… そこに当方の電話番号が記されていると

いうなら、それを見せて欲しい、って。つまり手帳をですよ

「それが？」

「ですから、根岸弁護士が見たいものが手帳に書かれている——と
いうことになりません?」

「考え過ぎだよ。単なる言葉の重複だよ」

「いつから先輩そんなにマイナス思考になっちゃったんです? 能天気なバカ……あ、いえ、……これ、わたしがいつたんじやないですよ、前の課のみんなが……」

「どうせぼくは刑事課でも能天気なバカで通ってるよ。そのバカが考へてもそう思えるんだから、君も相当な能天気だね、バカとはいわないけど」

「わたしの考へのどこが能天気なんですか! 根岸弁護士の知らな情報を探し今井孝雄が知っていた——てことも考へられるじゃないですかあ」

「たとえばどんなことだよ」

「そんなこと知りませんよ」

「それ見る!」

「だからそれを今訊こうとしているのに先輩が不貞腐れて投げ遣りになつてるのでしようが!」

「ぼくのどこが不貞腐れて投げ遣りなんだよ!」

「うるさい!」

とまあ、大変な道中だった。

山は一層秋氣を帶びていた。

名残惜しむかのように、アブラゼミやクマゼミなどが、喧しく喚き立てている。午後になるとヒグラシに取つて代わるのだけど、今を盛りに彼らは短い生命を燃焼しているかのようだ。

一行はふた手にわかれて、残る五つの洞窟に向かつた。

地図を片手にメグミは、安堂富美代訓練士とおへま号、それに下郡警部補ほか鑑識係員一名を案内して、ダムの堰堤の上を歩いて渡り、暮盤ヶ岳山系の急峻な山道を登つた。

宮崎芳樹のほうは、徳本又吉訓練士ときつちよむ号、そして鑑識係主任の村田巡査部長とで、ダムの後方の道路から車でまわり込んで——谷川を挟み、メグミらとは反対の位置になる——姫岳山系のケモノ道に分け入つた。

犬には原臭として今井孝雄の靴のニオイを嗅がせてある。谷川の中でニオイを消したにしても、山に入った時点で、臭氣を残していくはずである。でもまだ犬はなんの反応も見せなかつた。

別ルートからとも考えられるから、それは気にしないでメグミらの一行はずんずん第一目標に向かつて進んだ。犬はシカやキジなどが姿を垣間見せた時だけ騒ぎ立て、イノシシなどの臭氣に鼻息を荒くした。

やがて、メグミらは 芳樹のほうも 地図通りに第一目標の石灰岩の洞窟を発見した。しかし犬は道中がそうであつたように、なんの反応も見せなかつた。中に入つてみても、そういう形跡はない。次に向かつ。

第一目標は崖の下にあつた。高さは一メートル足らずだけど、どこまでも奥深い洞穴だつた。ただし人間が入り込めるのは一〇メートルくらいまで。その奥に鍾乳洞がありそつた。

だが、そこでも犬はなんの反応も見せなかつた。ハンドランプで

隈なく調べても、それらしき形跡は見られなかつた。

一行は落胆の色を深めた。

そしてとうとう、尾根にあつた三つ田の洞窟——これは井戸のように縦に深かつた——どこまで深いのか見当もつかない。犬の反応もなく、あきらめた。

芳樹らのほうに期待しながら山を下りた。

谷川を挟んだ向こうの道に、一足先に下りて待つ芳樹らの姿があつた。芳樹が力なく顔の前で手を振つた。

空振りに終わった現実を受けとめざるを得なかつた。ふたりにとつては重々しい現実だつた。

「考えとしちゃあ、悪くはなかつたんだけどなあ……」と慰めるよう下郡警部補がいつた。「これでもう、この一帯の捜索は諦めにやならんだろうな。考えとしちゃあ悪くない」

「そうなると今井は、なにしにバイクでこんなところにやつてきたんでしょうねえ」と村田鑑識主任がいう。丸い頭と四角い顔をしていた。

メグミは田を細めて青い空を見上げた。

——万事休すだ。

せつかく吉賀係長が庇つてくれたのだろうけど、自分らが犯した罪は計り知れなく重い。

柳井警部補と板井デカ長が、朝一番に大分の合同捜査本部に出向いたとか。さぞかし山辺本部長に大目玉を食らつたことだろ。それをそのまま持ち帰つてきては、誰が庇いられるであろうか。

仮に根岸弁護士が事件に関与していたのなら、まだなんの手掛かりも得られないうちから、手の内をさらしたことになる。証拠隠滅の機会を与えたことになる。

わざわざ電話を寄こしたのは、余程自信があるのか、余程今井の手帳に書いてあることを知りたかったか、どちらかだ。

本部のほうから再度事情聴取に行つてゐるに違ひないけど、成行きから、手帳を見せてしまうかも知れない 実際その通りだつた。

メグミは溜息をついた。

一行はダムの上の駐車場で落ち合い、そこで晩がけの昼食となつた。管理事務所には誰もいないようだつた。バスの中や、日陰に陣取つて、それぞれ弁当を広げた。

メグミと芳樹はコンビニ弁当だつた。堰堤の上でダム湖を見ながら、そして下流の、自分らが搜索した洞窟がある辺りを眺めながら、食べた。

芳樹が口に物を入れたまま、箸でダム湖の堰堤の中程の水門をして、「あつこに浮かんじよつた」といつた。

「なにが？」

「なにがて、今井の水死体がだよ」

「えーっ！」

そうだつた。ここは今井孝雄の水死体が発見された場所だつたのだ。メグミは名古屋にいてその時の臨場感がない。新聞で見る事件記事のような感覚だつた。

途端に幕の内弁当のサバの塩焼きが不味^{まず}くなつた。女たらしのく

せに、デリカシーのない奴だ。

「君はどう思う？ 追い詰められて自殺したか、口封じに殺されたか」

まだそのはつきりした結論は出ていないのだ。メッセージ入りのカプセルを自分で飲んだのか、呑まされたのか。

しかし捜査本部としてはカプセルを呑ませてダムに、この堰堤の上から突き落とされたと見てゐる。一味にとつて、警察が張り付いてゐる今井は危険な存在だつた 呼び出されたかなにかして。

車で横付けだから、犬が臭氣を感じしないのは当たり前——いうのもその理由のひとつだつた。

ちなみに富崎芳樹が今井の手帳を発見したのは、ここから西河野に通じる林道をくねくね上つた山の中腹の、バイクが放置されていた辺りの藪の中である。

そこからここまで歩いてきたのなら——キロは充分あるだろう——犬の追跡を受けるはずだけど、臭気はそこでふつつりと途切れていったのだ。

谷間の陽は陰るのが早い。まだ一四時過ぎだというのに、急速に翳つて、姫岳の中腹を這い上がろうとしている。ヒグラシがもの悲しく鳴き始めていた。

食後休憩を三〇分くらい取つてから、「よつし、今日はもう帰還するぞ」と下郡警部補がいつた。

「ちょっと待つてください！」と、慌ててメグミが駆け寄つた。

「まだあるのか？」と下郡警部補。

「ええ。前にわたし達が調べたところで、気になるのでもう一度お願ひします」

「時間があるから、構わんけど、君らが調べてなんともなかつたんなら」

「いえ、人が入り込んでいた形跡はありました。多分アベックだろうとは思いますけど、念のために」

「遺体を置いてあつたような形跡はなかつたぜ」と芳樹が横から口をだした。

「でも、なにかに包んでいたか、入れていたかもしれないじゃないですか。ドライアイスと一緒に

「よしわかった。案内してくれ」と警部補は即座にいつた。

岩盤を登ると、じりからきひあふむ岬一一通称「あつちよむ警部」の尖った耳が、左右に向きをせわしなく変え、そして岩盤に鼻を押し付けるような仕草をした。

「どうしたの？ なにか感じる？」と安堂畠美代訓練士がいつ。犬は顔を上げて、風を嗅ぐように鼻をひくひくさせた。

一行は固唾を呑んで犬を注視した。

一行といつても、芳樹らの組は、下流の洞窟と、そして無視していたずっと下流の、従妹の輝子が、「あっこにはカンジンが住んじよっていますからね、女の子に悪さする」といった洞窟のほづにも向かっていた。

犬は岩を搔いて猛烈な勢いで登り始めた。

そして洞穴に向かつて激しく吠え立てたのである。

下郡警部補は携帯電話で鑑識の村田主任に電話して、彼らの組を呼び寄せた。

鑑識の連中が鑑識作業中に、下郡警部補と芳樹とメグミは、犬二頭を率いる訓練士とともに、洞窟の奥の探索に向かつた。

トイレ代わりにしていた蓬みを過ぎてから洞穴はふたつに分かれ、左側はすぐに行き止まりになつたが、右側はぐねぐねと狭い空洞を五、六メートルくらい進んで行き止まりになつた。

でも犬らは上を向いて吠え立てた。天井まで三メートル強の高さがある。芳樹が岩をよじ登つて天井近くの横穴に体半分を突っ込んで、叫んだ。

「広い空間があります！ ハンドランプを！」

メグミがよじ登つて手渡しする。

芳樹がそれで照らしてまた叫んだ。

「これはすごいやー！」

這えば人が楽に通れる横穴から一・五メートルばかり下に、四畳半くらいの広さの平坦な岩畳の部屋があった。

天井は先細りになつて高く、わずかな光と、岩を伝つて水滴が滴り、部屋の中央の窪みを流れて、片隅の亀裂に流れ落ちていた。そこからは時折風が吹き上げてきた。

そこできつちょむ警部とおへま巡査部長が、勝ち誇つたように前足を踏み鳴らして、雄叫びを上げたのである。彼らには新たにゴム長靴の中を拭つたタオルを嗅がせてあつた。

とうとう遺体の置き場所を突き止めた瞬間であった。

メグミと芳樹は思わず抱き合つて喜んだ。これでどうにか首が繫がつた！

下郡警部補は冷静に内部の点検をしている。

岩壁の所々に口ウソクの燃え残りと、滴つた口ウの跡がある。岩畳の上に遺体がなにかに入れられるかして、並べられていたのだろう。解体・エンバーミングもここで行われ、中央の溝を流れる水で、解体器具や血抜きの血、吸い出された臓物などを洗い流したのかも知れない。

下郡警部補は携帯電話で山辺刑事部長にこの様子を伝えた。

「ですが、残念なことに、遺体はどこかに移されたあとのようあります。遺体は——」

（遺体は今井孝雄がどこかに移動した！）

芳樹の顔を見ると、芳樹もそう思つてゐるようだった。

（しかし、行確班が張り付いていた？）と芳樹の目が語つてゐる。「失尾したあとに」

「いいや、そのあとは大掛かりな搜索が行われ、検問もあって、そんなことはできなかつたはずだ」

「夜なら」

「夜にこんなとこうわづりできるもんか。それに主だつた道路は深夜も検問した」

芳樹を見つめるメグミのビー玉のようだ澄んだ眸が、右左に目まぐるしく動いた。

(移動した場所は今井しか知らなかつた。その場所が手帳に書かれてあつた。連中はそれを知りたがつた。少なくとも根岸ともみ弁護士は知りたがつてゐる)

その思いは口にださなかつた。

台風が近づいていたこともあって朝から天候は荒れていた。

大分中央署の大会議室にビシッと集まつた捜査員が、ざつと四、五十名。その中に宮崎芳樹と佐藤メグミの姿もあつた。

もう、「あん色ん黒リイの見よ」なんていう無粋な者はいない。本部幹部にも、田杵署に毛色の変わつた女性刑事がいることは周知していた。

挨拶を終えて、居並ぶ幹部の中央に着座した山辺刑事部長も、捜査員らの中にその姿を認めて口元を綻ばせた。

向かつて右隣が下川署長で、左隣が中央署長と東署長の青シャツ組だつた。

捜査員サイドの田杵署メンバーの先頭から山崎警部が立ち、遺体置き場発見の経緯を、前のボードに張られた図面を指し棒で指しながら説明した。

「この洞窟からは都合四名分の遺留物が、つまり、複数人の体液、二名の指紋、三名の毛髪——そのひとつは女性のものと思われる、二〇センチあまりの長さの茶色い直毛でした——それに複数人の排泄物等が採取されております。ただいま割り出しを行つておりますが、今井孝雄の毛髪もその中に含まれておりました。

体液については、精液・唾液・血液・汗等の分泌物であります。バラバラ遺体のものも当然含まれております。

そこでエンバーミングや解体が行われたことは、疑いの余地はありません。岩壁に祭壇のような跡もありました。いよいよカルトの仕業の疑いが濃厚となつてしまひました。

遺体がいつ持ち込まれ、持ち出されたのか、もつかのところ不明であります。近隣の捜査・搜索を徹底して行つております。不審者や不審車両などの情報が五〇件近く寄せられておりますので、その真偽を確かめに奔走しておるところであります。

「ここまでで、なにか」質問が「」でしたら、「

すぐに手が上がつて中年刑事が質問した。

「精液も複数人のものですか？」

「いえこれは単一のものでした」といつて山崎警部はまたボードの所へ行つて、指し棒で洞窟内の略図を指した。「この入り口の部屋——これはこのように長方形にはほぼ一一畳はある空洞でして、中ほどのこの部分に、焚き火の跡があり、コンビニ袋やコンビニ弁当、菓子類、菓子パンなどのビニール袋・及び発泡スチロール容器、清涼飲料水の空き缶等が散乱しております——これらにつきましては、領収書から津久見市内のコンビニが特定されております——それらの「」の中に、使用済の避妊具が混在しております」

「奥の部屋ではないんですね」

「はい」

「ということは、遺体との交接ではなく、その女性との

「まあ、そういうことになりますな」

その手の異常者の性の対象は遺体である、とその捜査員はいったのであればけど、多くの捜査員が顔を顰めた。引いている女性刑事の姿もちらほら見られる。

「女性にはその手の異常者は見られない、男性特有の獲得形質だと思つのですが、そんな陰惨なところに女性がいたといつのは驚くべきことですね」

「女性と、断定しているわけではありません。のような毛髪ですけど、今時それぐらいの長さの髪の男は珍しくありませんからね」

「それもまた恐い話であった。私語が沸き起つる。

別の捜査員が間の抜けた声で訊いた。

「随分前からその地域の捜索はなされておられたのに、ここへきて、急に発見なされたのは——なにかの、情報によるものですか？」

山崎警部は太い目を剥いて、ウンチを漏らした幼児のように白黒させた、下川署長の横顔を見たりした。下川署長は種牛のようにわざわざつてニヤニヤしている。山辺刑事部長は厳しい顔つきである。

「……まあ、そんなところです。……」

「今井孝雄には四六時中、行確班が張り付いていたといつお話ですから、そうしますと、失尾したあの、数日間の間に今井孝雄が遺体をどこかに移動したということになりますか？ それとも一味の別の者が？」

「そこのはまだわかりません。よろしかつたら先へ行かせてもらいます。あまり時間を取りてもなんですか？」

といつて警部はみんなの視線から逃れるように、席に戻った。

しかし、それからがまた大変だつた。いきなり今井容疑者の手帳が現れるわけであるから。その真相が本部幹部にまで上げられるのがどうかもわからないのだ。

当然次のような突つ込みが別の捜査員から入つた。

「その手帳ですが、それもまた急な発見のようですが？」

まさか捜査員のひとりが立ちショーンをしていて、崖の中途の藤蔓に引っ掛けているのを見つけ、秘かに所持していたなんていえたものではない。

「ええ、それが、思わぬところから出てまいりまして、……藪の中からですね」

「それが今井孝雄のものだとどうしてわかつたんですか？ 名前かなにかが？」

「いえ、そういうものはありませんでしたけど、やはり、指紋によつてですな」

田杵署の捜査員らは見苦しい言い訳にみんな下を向いている。その中に針のムシロのふたりがいた。

「その中に記された電話番号から、根岸ともみ容疑者に辿り着いたわけであります。根岸ともみというのは、ご承知のように、すぐそこに法律事務所を持つ弁護士ですが、名古屋事件・東京事件の時にも現場近くについて一々まあ、その辺は、あとから担当の方々からご説明があろうかと思いますが、大方そのような経緯でございました。

これから、できれば目撃者の品川老人——この方は認知症の気がございますのであまり当てにはなりませんけど——そして足立明君にも、面通しを試みようかと、そう思つておるところであります。無論、新たな遺体の隠し場所の搜索には、地元消防団などの協力を得ながら、広域的に展開しております」

前に続く（前書き）

また前のほうに誤認がありまして、改稿しております。
本当にこの記憶力はなんとかならぬにものか。
できれば、差し歯をする前に、頭蓋骨を差し替えたいくらいです。

一五分間の休憩の後、下川署長の隣から本部・捜査一課長の高城警視が立つて、容疑者・根岸ともみ弁護士についての説明を始めた。「山梨県の出身で、東大法学部卒という申し分のない経歴の人物であります。が、これに一卵性双生児の弟がおりまして、これが名高い犯罪者がありました。

まずはこの弟のことから予備知識として頭に入れておいてもらいたい。弟の事件と我々の事件と直接的には関係ないものの、ある人物を介して、微妙にリンクageしている」

高城警視はボードに、「青山姪臣」と書いた。そして、その横に「城島竜一・東京地検特捜部検事」と書いて、そのまた横に「根岸ともみ」と書いた。

「みなさん、十数年前、東京地検特捜部検事が起こした殺人事件について覚えているでしょうか。その時のガイシャが、この青山姪臣——てつおみと読みます——根岸ともみの双子の弟です。希代の謀殺人と騒がれましたね。数々の獄事件の関係者の死に係わっていたことが明るみになつた。

双子といつても、両者は一緒に育つたわけではありません。プリンベービーであり、一年間ほど、施設内で受刑者の母親から授乳・育児を受け、それから乳児園に預けられた。そこから別々に里子に出されております。

敬虔なキリスト教徒の根岸家に引き取られた根岸ともみは、養子となつて充分な愛情と教育を受けて育つた。そして弁護士になり、弁護士としての評判は悪くない。弟の姪臣のほうはと、里親と折り合いが悪く、里親を転々として、最後には施設に入れられて、施設で育つた。

施設でも他人との正常な関係が持てず、様々なトラブルを起こしている。中学・高校と抜群の成績ながら、社会に出ると、社会生活

不適応者でも受け入れられるヤクザになつた。その辺りで、ある政治家の庇護を受けるようになつていた。

頭は驚くほど切れ、独学で薬理学と法律を学び、専門家も舌を巻くほどの知識を利して、巧妙大胆な謀殺を欲しいままにしていた。城島検事も標的にされ、愛妹の城島民子は凄惨な拷問の挙句、強盗殺人の容疑者にも偽せられて、検事は検事で、妹を救い出すために多額の金を要求されて破産状態、追い詰められたふたりは青山姪臣を殺してしまつた。

裁判では、もみあつて拳銃で撃たれようとしている兄を助けるために、妹が無我夢中で包丁で刺した——これを違法性阻却事由となる緊急避難行為と認定、妹・民子は無罪に——しかしこの時はもう兄の潔白を叫んで妹は留置場で自殺していた——兄の城島元検事を殺人罪等で有罪にした。

それからあとの、刑務所内での不幸な事故のことは、知らない者は誰もないね。謀殺説もあるけど」

高城警視は長広舌を終えて腰を下ろした。
場内は静まりかえつている。

やがて、捜査員サイドから質問者が立つた。

「刑務官の最上も、運転手兼ボディーガードの西塔も、受刑者だつた赤間も、城島元検事の死——事故であれ、謀殺であれ——に関係しているのは確かですけど、謀殺人を弟に持つとはいって、どう考えても復讐劇のように見える我々の事件に、根岸ともみ弁護士が関与しているというのは、ちょっと飛躍のように思いますけど、だとしたら動機はなんなんでしょうか？」

高城警視は座つたまま答えた。

「わからない。でもアリバイがない。先ほどもあつたように、今井の手帳に電話番号が記されてあつた。事件現場で目撃された不審人物と様子が似ている」

「それだけですか？」

「それだけだ」

「なにか余程の強い動機がないと、こんな大それた事件は起こさないと思いますけど。ぼくはよく裁判所や検察庁舎で彼女を見かけることがあるんですけど、とてもそんな風には見えませんけど」「美人だからじゃないのか」誰かがチャチを入れた。空気を読めないやつはいるものだ。

高城警視はそれに答えていう。

「君のいうのはもつともだ。強い動機は必要だ。もしかしたらその答えは、本来なら仇同士であるはずの、根岸ともみと城島——いや、榎原親子が仲良くしていることにあるのかも知れない。実をいうと、もうひとつあるんだ」

といって、中央署の権藤警部を指名した。

指名されて、権藤警部が文字通り中央に陣取つた連中の先頭から立つた。

「城島検事には竜平という長男がおります。これは上野ヶ丘高校から東大理学部に進み、もつかのところ眞面目に大学院で生命科学を学んでいるようありました。親思いの優しい子だということでした。

ところがそう思つてゐるのはバカな母親だけで、警視庁から今朝届いた資料によりますと、実際は、親元を離れて東京でのアパート生活を始めてからは、相当乱れた生活を送つたようです。

そして、驚いたことには、東京事件の容疑者にもなつていて、極秘に追尾していたようですが、ここ一週間ばかり前から失尾しているとのことです。我々も急遽捜査員を東京に派遣したばかりですが、向こうからもやつてくるようです」

警部が腰を下ろすと、ガヤガヤ私語が始まった。

それから権藤警部が再び立つて、上野の森の両腕遺棄事件の進捗状況を報告し、次に指名された東署の大津部警部は、乙津泊地及び

亀塚古墳遺棄現場から割り出した不審者や不審車両などを報告した。捜査線上に浮かんでは弾けて消える、それらの泡沫候補を、ひとつひとつ潰していくしかないのである。

「あとは臼杵事件の身元確認だな」と刑事部長がいえば、「城島元検事に関係した人物で、ほかに姿を消している者はいないんですかねえ。わりとわかりそうなものだけど」と中央署長がいう。捜査会議は一〇時に始まって、一一時に終わった。

臼杵署に戻つてからまた小会議が開かれ、また編成を新たにした。それによると、メグミと芳樹は遺体捜索から、本業の不審者及び不審車両の聞き込み——不審車両については、大分東署が手配している不審車で、三菱ランサーカーゴ 15年式・ホワイト、フルスモーク だつた——に戻された。

その不審車は、国道22号線や国道197号線上に秘かに設置されたフクロウの目——遺棄事件が起きた前後の時間帯のシステムの画像解析から割り出されたもので、ここへきて急にその車に不審車のレツテルが張られたのは、ナンバープレートがほかの車両のと、取り替えられていたことが発覚したからである。

「我々の重大なミスでした。車両ナンバーから持ち主を特定、事情聴取に及んだのであります、坂ノ市の旭メディカルにお勤めの方で、身元は確か、非の打ち所のない人物でもあり、アリバイ等に不審な点もございませんでしたので、チェック済みにしておりました。思い込みから、その車の——ホンダのオデッセイでしたけど、ナンバーまで確認しなかつたものですから。

ところがこのほど本人から連絡があり、ナンバープレートが違うというんです。自分の車のナンバーを知らない者は結構いるもので、試しに署員に聞きましたら、半数以上が正確に知つておりませんでした。その方の場合もそうでした。

それがたまたま——その方はたまにナンバーズを買ううそうとして、その際は自分の車の番号で買うことにしていた——ジャスコの宝くじ売り場で買おうとして、そこで、こんな番号だつたかなあというんで、車検証を見たら、よく似ているけど、違つていたというんですね

合同捜査会議の席で、東署の大津部警部は細い目をいよいよ細くしてそういった。

「じゃあ、その不審車両の持ち主は？」といつ当然の質問に対しても、警部は、「それが……行方が知れないんですね」といった。

「なにえ、そる早よいわんかえ」と誰かがつぶやいたのを皮切りに、会議室内は騒然となつたのだつた。

しかし、幹部のお叱りを受けたのか、大津部警部は氣の毒なほど、素直に喜べない複雑な顔をしていた。

その不審車と同車種・同型の写真の「ペリー」と、そしてその車の持ち主の写真を持って、メグミと芳樹は、時間的関係から近場の一一せいぜい見ダムに向かう県道を聞き込むつもりで署を出たのであるがーー。

「ちょっと、寮に寄つて行つていでですか？」

「なに？ 傘でも取りに行くの？」

「つうん、ちょっと」

荒れていた風雨は午後から治まつてゐる。ほとんど氣にならない程度の霧雨である。

メグミは秘かにあるものをネットで購入していた。それを取りに帰つたのである。

車に戻つてメグミがしおらしくいう。

「先輩にプレゼントがあるんですけど……」

「え？ いきなりなに？ 仕事中だぜ」

「仕事中じやいけませんか」

「いやいやいや、そんなことーー仕事中だらうとなんだらうと、貰えるものならなんでも。特に佐藤君のものなら」署内ではそう呼んでいる。「吐いたツバでもいただきますって」
「きつちやな。そういうであつちこいつの女性にツバつけたるんでしょう」

「滅相もない。ぼくはこいつ見えて、結構ピュアなんだけどなあ。どうも人は見かけで判断するから困る」

「見たまんまーーって人もいますよ。でも、これはそんな氣をまわ

すよつなものじゃありませんから」といつてハンドバックから小さな長四角の箱を取り出して芳樹に渡した。

「開けてみて」

芳樹が開けると、中から細長い容器が出てきた。

「なんだよこれ？ 香水みたいじゃないか」

「香水ですよ。ランコム・メンレネルジー。五千円ちょっととしたんだから」

「え？ そんなにした香水をぼくに？」

「ええ。ちょっと二オイ嗅いでみて」

「二オイって……うーん、いい匂いだ」

「わたしにも、……わ～、ホントだ。クラクラときぢやう」

「これをぼくにつけろって？ そんなにぼくの体臭って、気になる？ 煎な臭いする？」

「違いますよう。先輩の体臭なんて、全然。でもこないだ、微かにクリのにおいがしたけど、なんだろう？……生のクリとか食べましたか？」

「……えつ？ ……いや」

「実は、名古屋事件の容疑者が、この香水を使用していたんですねう」

「ええ～ッ！ マジかい」

「死体を運んだりするから、臭いが付くでしょう、消臭剤も勿論使用してたでしようけど。それを誤魔化す意味もあるんじゃない」「まいっただあ。そんなこと秘密にして、君もなかなかの者なんだね」「だから先輩、この二オイを嗅いだ時は、デンジャラスな時だと思つてください。もつと早くに取り寄せてれば、根岸法律事務所に事情聴取に行く時、先輩に振りかけていたんだけど」

寮の前の公道に停めたPCの中で、そんなやりとりをしている様は、端から見れば、若いふたりがいちゃついてるよつに見えたことだらう 実際、夕食時に食堂のおばさんに揶揄なげされている。

車を発信させてからメグミはいった。

「機会があれば、根岸弁護士にこの二オイを嗅がせてみたいものですね」

「その機会は意外と早くくるかもよ

「え、どうして？」

「いつてたじやないか、目撃者に面通ししたいって、課長が「でもそのためには、根岸弁護士を任意で引っ張らないと、そんな口実、ありますか？」

「それもそうだな。相手は法律の専門家だし」

「でも、カオルちゃんなら、カオルちゃんは遺棄者と遭遇した可能性が高いですから、もしか反応を示すかも」

芳樹はメグミの横顔を見ていった。

「こういう時つて、アメリカ人なんかだと、ブラボー！とかなんとか叫んで、やたらキスしない？ ネッキングってえの？」

「しませんよ、恋人どうしじゃないんだから。それにわたし、こう見えて、日本人ですから！」

「あっ、ゴメン！」

メグミはアクセルを踏み込んで市役所前を突っ走った。回転灯を灯して、サイレンをかき鳴らして——というわけにはいかない。署の横から通りに出て、右にまわり、城址公園の下を走つて、個人美術館の所の信号から、急に右に折れた。

「ど、どこ行くの？」

「ちょっと寄り道」

「寄り道つて、もう一五時をまわつてるぜ」「思い出したことがあるから」

今井孝雄のアパートの前でつんのめるよつて止めた。

臼津葬祭場で初めて今井孝雄に事情聴取した時、「窓辺の小屋根の上に猫が一匹いただけ」といつたのを思い出したメグミは、それを確かめるために、アパートの裏手にまわった。

ブロック塀を隔てて入母屋造りの民家が並んでいて、確かにそのうちの一軒の、二階屋の小屋根が、今井の部屋に近接していた。

「先輩、あの屋根に飛び移れませんかねえ」それを見上げてメグミがいう。

「今井の部屋からかい？」

ブロック塀の上には忍び返しのフェンスがあり、合わせて一八〇センチはあるうかという高さ、しかも、忍び返しの部分には三段の有刺鉄線が張りめぐらされているから、アパートの敷地内から出るには表の門を通るしかない。

だから門の前の道路に停めた車から、あるいは斜め前のアパートの一室から、行確班が見張っていたわけである。二階に上がる外付き階段の横が、屋根付きのバイクや自転車置き場で、今井のバイクもそこに置かれてあつた。建物の前が車の駐車場になつていて、一応今井も軽ワゴン車を持っていて、そこに駐車してあつたけど、犯行に使われた形跡はなかつた。

「あれじゃ、無理だろ。飛び移れないこともないだろうけど、その衝撃で瓦が傷んだり、音で家人に気付かれるんじゃないかなあ……。じわっと下りられる距離ではないみたいだぞ」

「まだあの部屋は空き部屋なんですよね。大家さんについて中から見て見ましょうよ」

「そんな風なら誰かが気付いてるわ。気付かないわけはない」「でも、見てみましょうよ」

「またにしよう、もう時間がない。聞き込みに行かなくちゃ」「報告書なんて、適当に書いとけばいいっていつてたじやないですか

かあ、誰も見てないんだからって」

「でもぼくらは色々と問題を起こしてるので、これ以上問題を起こしたら——」

「問題って、なにが問題なんですか。疑問を明らかにしようとすることがどうして問題なんですか。それを見過いりますことのほうがもっと問題じゃないですか」

「だからそういう問題じゃなく、いわれた通りにしないことが問題なんだよ。問題は問題としてなにも今日解決しなくて、明日にしたつて、問題ないじゃないか！」

「だからここにいたはずの今井がどうして遺体を移動できたのかという問題を解決することを後回しにして他所の署の使い走りみたいなことを優先することのほうがよほど問題でしょうが！」

「そんな問題をいつてるんじゃない！ 今は上のゆう」と聞いておくべきだといってるんだ。そしてぼくは少なくとも君より七つ年上だし、刑事の経験も三年は長いしそのぼくがそう判断しているから君はぼくのこいつとを聞くべきなんだ」

「あつ……

気がついたら、フュンス越しにすぐ傍で、隣りの家の住人が見ていた。

ふたりは照れ臭そうに頭を下げる。

還暦は過ぎていそうな老人が、剪定バサミ片手に、庭の手入れの出で立ちでニヤニヤしている。

「家の屋根がどうかしたつて？」

「い、いえ。この娘が、あの部屋から」といつて芳樹は今井の部屋を指す。「お宅の屋根に飛び移れないかなんで、変なこというものですから」

「ああ、その子のことは知ってるよ。交通のオマワリさんだろ。制服姿が初々しくて、お人形さんのように可愛いかったけど、へえー、今は刑事さんかい」

「この子でもその子でもありません。わたし、れっきとした二十歳

過ぎた大人ですから」

「んふふふ。まあ、よかつたらこいつきて、気のすむように調べてみたら。早く事件を解決してもらわないと、気味悪くてねえ」

いわれて芳樹とメグミは隣の家の敷地を調べた。別段変わつたところはなかつた。

「屋根から変な音とかしなかつたですか?」と芳樹が訊き、「犬とかは飼つてないですよね」とメグミが訊いた。

「うん。ばあさんとふたり暮らしだからねえ。ばあさんはすぐ傍に爆弾が落ちてもわからん。わしも近頃は耳が遠くて。猫は飼つてるけど犬はね」

その猫は喋れんのかね?

と吉賀の親父がいった猫だなとメグミは思つた。同じことを訊いてやろうかとも思つたけど、今はそんなジョークをいう氣分ではない。芳樹が自分を子供扱いにしたのだ。

七歳　といえば、小学一年生と中学一年生の違いではないか、中学一年生と……二十一歳の大人?……との違い?

それは大変な違いだつた。自分と従兄弟の中学生・孝之との違い、メグミはようやく芳樹の気持ちを理解した。それなのに随分生意気な口を利いてきたものだ。

「今井がこっちの敷地に下りることができたら、夜半に悠々と出かけ、素知らぬ顔で戻つてくることができるな。その間ぼくらはバカ面下げて、表から一心に見張つてたわけだ」

「でも先輩、下りるのは飛び下りればいいですけど、帰りは一一飛び上がることはできませんよ」

芳樹が顎でフェンス際の脚立を指した。

「あいつを引き伸ばしてアパートの壁に掛け、そこからならこちらの一階の小屋根へ。前もって窓を開けておけば、小屋根から窓枠に取り付いて……」

電撃のように芳樹の脳裏を走ったのは、家宅捜索の時、釣りの趣

味がない今井の部屋から釣り道具が見つかったことだ。そして番線！

思わず芳樹はメグミの頭を掴んで、その日向^{ひなた}のにおいのする髪に

キスをした。

「キャッ！ な、なにするんですか！」

「なにや?」「

と板井部長刑事はいった。

「確かに今井の部屋には釣り道具と、先がフックのよつこなった8番線があつたんでしたよね」

富崎芳樹は——当然名古屋に出張中だつたメグミも——家宅捜索に加わつてなかつた。

「それがどげえかしたんか?」と板井は煩うるさい芳樹を見た。

傍には山崎課長も柳井警部補もいた。というか課長の席の前だつた。三人が揃つているとこりを見計らつてから、芳樹が声をかけたのである。

でないと、陰険な板井にいい加減にあしらわれる恐れがあつた。一応彼の顔を立てておく意味もあつた。

芳樹は昨日のことをかいつまんで話した。三人がいっせいにメグミのほうを見たことから——メグミは席に着いて報告書を書いている——芳樹がありのままを語つてているのがわかる。

「それで、自分らは、お隣の家の脚立を拝借して、アパートの壁に立て掛け、ようとして、長さが足りないことに気付いた。忍び返しのフェンスが邪魔してですね。ところがそんな面倒なことはしないでも、隣りの家の大家根に上がれば、大家根から二階の小屋根に上がるのは簡単そうだった」

「ホントかい?」と柳井警部補が驚きの声を上げた。おあつらえ向きにそんな脚立が……

「ええ。ヤマモモの木を剪定するのに使用していたそうですけど、高枝切りバサミを使用するようになつてからは、ほとんど使用することなく据えたまま放置してあつた」

「そいついえば確かにヤマモモの木があつたなあ……」と警部補。脚立にまで目が行かなかつたのは不覚だった。

板井巡査部長は目を白黒させていう。

「だけどお前、そんな重いものを——」

「それがアルミニ製で軽いんですよ。おあつらえ向きに、足を乗せる所に、リングが付いていた。壁に掛けたりする時ものでしょう」

「そいつを釣り針で釣り上げたといふのか」山崎警部が意気込んでいった。

「実験したわけじゃないんですけど。なにしろ聞き込みのほうが気になつて」

「バカいってんじゃない！ そんな大事なことを差し置いて」と警部が部補。

「先を曲げた番線はタモのよくな役目をしたといふのか」と警部が太い目を剥いた。

アパートの一階窓から脚立を釣り上げて、それを掛けて隣りの家の一階の小屋根に移り、小屋根から一階の大屋根には容易たやすく下りられる、大屋根からはまた脚立を立て掛けて庭に下りた。そして脚立をたたんでヤマモモの木の所に戻しておいた。

帰りは逆のコースで、大大家根には先程の番線を隠し置いていたのだろう、それを使って元の形にたたんだ脚立を、そつと元の位置に吊り下ろした。少々位置がずれていたつて、地面の妙な所に穴を開いていたつて——次の機会に踏み固めておけば、普段使っているわけじやないから、わかりやしなかつた。

一階の小屋根からアパートの一階窓に取り付くのは、そう難しいことではない。何度も評議したことだった。だが、飛び移るのはそういうとうな衝撃を与える。そんな様子は見られなかつたことから、その考えは退けられたのだった。

だが、鑑識が調べれば一も二もなくハツキリする。山崎警部は大号令を発した。

板井巡査部長は、こいつら一体なんなんだ、芳樹を睨み、佐藤メグミのほうを見た。

鑑識はすぐに答えを出した。隣りの家の庭から夥しい数の今井孝雄の靴跡をあぶり出し——土をかけていても誤魔化せない——脚立からは靴に付いていたのと同じ微物も検出された。

大分東署と同じような大失態が明らかになった。失尾したことも加えて、容疑者の行動確認の甘さが露呈された。

それに加えて、例の不審車情報が続々と寄せられるようになり、夜半にアパートをまんまと抜け出した今井孝雄が、その不審車で悠悠と活動していたことが徐々に明らかになった。

だがもっと深刻な事態が勃発したのである。

あの日撃者のふたりが、ほぼ同時に姿を消してしまったのである。未帰宅老人と未帰宅児童の報が、県内はおろか、日本全国を駆け巡ることになった。

それは芳樹とメグミが例の香水でカオルちゃんこと、祇園洲の住人の、品川薰老人を試そつかといふ矢先のできことだつた。

彼らより一足先にその実験を試みた者がいたのだ。そして不幸にして、品川老人は一本歯も露わに、指さして騒ぎ立ててしまつたのである。

その者は同じように足立明君の前にも現れた。衣装が違つていたから、明君のほうは何の反応も示さず通り過ぎた。

だからその者は立ち去ろうとした。そして何気に振り返つた時、じつとこちらを見ている明君に気付いた。

明君のほうも、何気に振り返つただけで、はからずも両者は顔を見合わせる形になつたのである。

距離が変わり景色も変わつていて。その者の肩から上の背景が木立から空に変わつていて。明るい空を切り取るように傾げたその首から頭にかけての様子に、明君はビクッとして立ちすくんでしまつたのだ。

翌朝——といつても午前一〇時は過ぎていたが、津久見島の岸壁

に品川薰老人の水死体が流れ着いていた。

臼杵湾の中央にお椀を伏せたような形で存在する島である。キャンプに来ていた者が釣りをしていて発見した。

一方、足立明君のほうは全く消息が掴めない。首に下げていた携帯電話の電源は切られているのだろう。

メグミは忙しい最中、一日に何度ケータイを取り出して見たか知れない。見なくても肌身離さず持っているからわかるのに。

懐かしい榎原光子からの電話でさえ、恨めしく思った。話している最中に明君からかかつて来やしないかと。

「大変なことになったね」と例によつて低い声でいうのをえ、腹立たしかつた。

「根岸弁護士に会つてみるといいよ」と光子はいった。そして、「メグ、ひとりで行動する時は拳銃を携帯するように」といった。相手が誰であろうと、危険を感じたら迷わず容赦なく撃てと付け加えた。余計なお世話だ。公安と違つて余程の事がないと、刑事は拳銃の携帯許可は下りない。

光子の忠告を聞かずメグミは丸腰で根岸ともみに会いにいった。明らかに逸脱行為だ。うまくいって芳樹から香水を取り上げて、彼には内緒で出かけた。彼を巻き込むことはできない。

メンズコスメを振りかけて根岸法律事務所のドアを開けた。アボを取つっていたから当然根岸ともみはいた。

前に続く（前書き）

前回の間違いを正します。

7歳——といったら小学一年生と中学一年生の違いではないか、
中学一年生と……二歳の大人……との違い……？

それは大変な違いだった。自分と従兄弟の中学生・孝之ほどの違
い…

応対の女性事務員は怪訝な顔をした。

所長のデスクで、根岸ともみ弁護士と話している光子刑事のママが、振り返つて硬い会釈をした。

軽く応じてメグミは応接室に案内されて行く。なにか空氣がピンと張り詰めている。

それはそうだ。日杵市で大変な事件が起きており、そこの所轄刑事が乗り込んできたのである。根岸弁護士が怪訝な顔をしたのは、若い女性刑事が単身乗り込んできたからだろう。

あとからやつてきて、ゆつたりとソファーに体を預けた根岸弁護士はしかし、心持眉根を寄せ、両方の口角を上げ氣味にして——微笑んでいるようにメグミには見えた——おだ穏やかにメグミを見据えた。すでに香水の匂いがブンブンしているはずである。「コーヒーを置いて行つた女性事務員が、あとを振り返つたぐらいである。だが根岸弁護士はそんな素振りは見せない。

そこがおかしい——と吉賀係長ならいうだろう、香水が男性用だろ？と女性用だろ？と、刑事がそんな匂いをブンブンさせていたら——この前きた時はそうではなかつたのに——なんらかの反応を見せぬほうがむしろ自然である。

あえて素知らぬ顔をしているのは、すでに防衛を張つている、微笑で誤魔化そうとしていることになる。

「今日はひとりで？」

「はい。なにぶん忙しいものですから」

「なにか？」

「はい。ぶしつけですけど、先生は昨日おひりにおられましたか

？」

「アリバイですか」

「そうです」

「それなら、わざわざ田杵から出かけてこられるまでもなく、中央署の刑事さんから、すでに尋問を受けましたけどね」

「そうですか。でも、わたしはまだ伺つておりませんから」

根岸弁護士の彫りの深い顔から、表情が消えた。

「午前中は事務所について、午後には田田市のほうへ、係争中の案件の調査に行っておりました」

「お車で、ですか？」

「いえ、電車でした。大分発が13時25分の特急ゆふ4号で、田田着が15時11分。帰りは特急ゆふ5号。田田発が18時41分。大分着が20時24分です」

これは手帳にメモらないと覚えきらない。じつと見つめる根岸弁護士の視線を感じながらメモを取る。

「田田ではどなたに？ 証明してくれるような人はありますか？」

「ええ。熊谷実という方に。でももう中央署か、田田署かの刑事さんが向かつてるんじゃないかな」

「一応身元をお伺いしてよいですか？」

「構いませんけど」といつて根岸はその熊谷実の名刺を見せた。メグミは住所・氏名・電話番号をメモる。肩書きはなかった。

「大分駅に着いてからはどうしました？」

「マンションに帰つてから、それからは、一歩も出でないわね」「証明する方はいますか？」

「いませんわ。独り身ですからね」

「駅からマンションまでは？」

「買い物がてら歩いて」

「歩いてつて、歩いたら中島まで随分あるんじゃありませんか？」

「そうでもないの。一〇分とはかからない」

「買い物はどうちらで？」

トキワはもう閉まつているはずだった。パルコも。中央商店街はどうか知らなかつた。

「シティーで食料品を」

シティーがビルにあるのかも知らない。でも、けれどものない返答であつた。

(違うのかなあ……)

例の魅惑的な微笑で見つめられてメグミは顔が火照るのを感じた。「相棒の刑事さんは今日は?」

「ええ、ちょっと

「刑事さんはふたりで行動するはずだけ?」

「ええ、ちょっと

実家に急用ができたと芳樹にはウソをいつていて。上のほうにはふたりとも足立明君の搜索をしてくることになつていて。

なんの手掛かりも得られず、大急ぎでしゃくひやんから借りたライフを飛ばして臼杵に向かつた。

さくらぢゃんというのは、生協の店員をしている吉賀係長の下の娘で、メグミと同い年だった。買い物をしているうち、上司の娘といつので自然に仲良くなつた。ふたりとも、ほかに友達がいなかつたこともある。

(どうして榎原光子は根岸弁護士に会つようになんて、といったんだろ?)

光子も、姉のように慕つているという根岸を疑つてはいるのだろうか、とメグミは思う。心証としては五分五分だ。でもアリバイが確かめられたら——そうあって欲しいと思う。心が芽生えていた。

きっと、光子もそうに違いない。なにかそういう状況がある、

でも信じたい、自分に確かめてもらいたいのだ。

と、坂ノ市の飛鳥会館のどこでいきなり内ポケットが震えた。マナー・モードにしてあつたケータイの着信振動である。

開いて見ると、メールが一件の表示、メールを開けると——。

——おねえさん、助けて!

足立明君からだつた。

メグミは車を道路の端の広まつた所に止めて、大急ぎで返信メールを打つた。

——今どこ?

すぐに、返信がきた。

——はやく! こわいよう、ころされちゃうよう。

それからは、若い二人のメールの早打ち競争のよひだつた。

——だから、どこの? 今いくから。

——やまのなかのこや。

——どこの山?

——ここにきたことある、えんそくで。

——どこ?

——くろくいさんキャンプじょうこくみち。

の、どのへん?

——とうづからキャンプじょうこくみちをみぎにはいったとこのこや。

——そこにだれかいる?

——いまはない。

——わかった、すぐいくから、なにがあつたらまたメールして。

九六位山キャンプ場なら知っていた。ここからそう遠くはない。キャンプ場とは名ばかりで、眺望はよいけどキャンプする者などほとんぢないという話。海拔四〇〇メートルくらいの高さ。行つたことはない。

九六位峰なら何度か通つたことがあった。県道21号大分臼杵線にある。メグミは新しくできた道路をあまり知らないので、坂ノ市からTOTOの前を通る旧道を走つて向かつた。

車を走らせながら富崎芳樹に電話する。ワンプッシュで通じるようになった。

しかし、“電源を切っているか、圈外にいるか”——と例の音声がいう。

捜査本部に電話しようとしたが、止めた。言い訳のしようがない。勝手な行動をしていたことがバレたら、今度こそクビが危ない。コンビにならなくとも、刑事課からは追放されるだろ。コンビの芳樹の責任も問われるかも知れない。

ここはもう単身乗り込むしかない、メグミは覚悟を決めた。今更悔やまるのは、拳銃を携帯してこなかつたことだ。光子の忠告を守つていれば——いや、そうなると、携帯理由をいわなければならぬ——どっちみち、それは叶わぬことだった。

そもそも、単独行動したのがいけないのだ。

ここで頼れるのは芳樹だけ。もう一度かけてみた。やはり、空しい音声。電源を切っていることはあり得ないから、電波の届かない所にいるのだろう。

(肝心な時に役に立たないんだからもう! —)

途中で広い交差点に差し掛かった。案内板には左折が富河内インターになっているので、迷わず左折した。随分遠回りしたことになるけど、そこからは早かった。

広い道路をすっ飛ばして、インターまで行かないつむじ、臼杵方面という表示板があつたので、すかさず左折した。

県道21号に出てからは知った道なので安心、広内から狭く急なくねくねした山道を上って、九六位峠に出た。そこまで一台の車ともすれ違わない。日中でも気味悪い所だ。そこでも、芳樹に電話したけど出ない。

そこから左折した。右折すると坂ノ市方面という案内があり、鋭角に下ると臼杵市に向かつ。

この辺りの山林からはよく白骨死体が見つかる。谷が深く切れ込

んでいて、白山・若山に向けて林道が縫うように走っているから、死体を遺棄するには持てこいの場所だった。県道21号自体がメツタに車が通らないだけに。

そこからくねくね左折道路に注意しながら進む。まだセミが鳴いている。時刻は一一時をまわっていた。午前中にといふ約束だったから、それを過ぎると芳樹のほうからかかつてくる可能性はあった。それに期待してマナー・モードになっているのを確かめた。

メグミは武器になりそうなものを、車内を見回して搜した。さすがに女の子の車である、ボックスも開けて見たけど、そんなものはなかつた。

いよいよとなつたら、棒切れでも石こりでも武器にして闘おう。命懸けで明君を守らなければならない。と思えば震えがきて、もうから心臓がバクバクした。口を開けると、お尻が飛び出しそうだつた。命の危険に晒されることなんて——警官になりながら——考えてもみないことだつた。

最初の右折は、道路ともいえない、小さな坂道だった。ほとんど獣道のような——バスした。小屋があるくらいだから、ある程度の広さの道だと思った。

次の道はもっと急な坂道だつたしこれも狭い——バスした。

大きくカーブした所に、二メーター幅くらいだけど、いかにもそれらしい道が斜めに上つていた。昔なら馬車道。そういう中央が盛り上がつた轍わだちの跡の凹みさえあつた。木材を運び出す時の道だろう、山小屋があつてもおかしくない。

ほとんど離合もできない狭い簡易舗装道路を走ってきたわけだけど、その湾曲した部分だけ車を停めて置けそうなスペースがあつた。離合退避場所に相違いない。

反対側になるけど、そこに車を停めて、また芳樹に電話した。やはり、例の音声。いざとなつたら心細くなつた。最初の意気込みはどこへやら、捜査本部に応援を要請しておいたほうがよいのではないかと、思つ。

そこでまた、吉賀係長を頼つた。ほんとう泣きやうな声で、今までのことを手短に語つた。

「バカ！ なんちゅうことを！」初めて吉賀が荒声を出した。「そこを動くな！ いいか、そこで待機しろ！ 動くんじゃないぞ！ わかつたな！」

「でも、明君が！」

「いいから、そこで見張つておれ！ ドアをロックして、見張つておれ！ 車から出るんじゃないぞ！ わかつたな！」

耳が痛いほど怒鳴られて、メグミは泣き出した。

そこへ、キャンプ場方面から白いワンボックスカーが道いつぱいになつて走ってきた。

メグミは手を振つて止めた。

窓には黒いフィルムが張つてあって中がよく見えない。ツーツと助手席のガラスが下りて、若者が顔を現した。
「なんですか？」

吉賀巡査部長から連絡を受けた刑事課の刑事——といつても山崎警部ら三名は覆面車に飛び乗り、サイレンをかき鳴らして九六位山に向かつた。

勿論、交番を含めた パトカー全車両が回転灯を灯し、サイレンをワンワンいわせながら、賑やかに続いた。

県道21号を数珠繋ぎになつて進み、主だつた分岐箇所に一台ずつ配しながら、末広ダム辺りまでくると、そこからは峠まで一本道、サイレンも回転灯も消して、忍びやかに坂道を上つた。

そのあとからも続々と、各地に展開していた組が指令を受けて駆せ参じた。富崎芳樹も最後部からミニパトで追い駆けた。彼は世界の外にいたのである。

佐藤メグミとは——メグミは佐伯から10号線を通つて野津経由で河野にいる自分と落ち合つ予定だつた。それがとんでもない抜け駆けをしていたわけである。あきれてものもいえない。

早稲^{わせ}を機械で刈り取つている農民が時ならぬ喧騒に驚いている。

次から次にやつてくるから、何事かえど、物見の年寄りまで家から這い出た。

大分市サイドからも、戸次・吉野・大在・坂ノ市の交番のパトが道路封鎖に向かつっていた。東署・南署・中央署からも援軍が続々と向かつてきていた。

九六位山を取り囲んで袋のネズミにするつもりだった。

いよいよ見えない敵が姿を現す。誰も彼もが興奮していく、足立明君や佐藤メグミの安否まで思ひが及ばなかつた。

芳樹と、署に残つてゐる吉賀だけが、胸苦しい不安に急所を噛まっていた。まだ少女の面影を残すメグミの顔がチラついた。カリブ海のような青い目が——。

一番手の班長車が、約十五分で現場到着した。

吉賀がいつ通りの所に黒いライフが停まっていた。

山崎警部と柳井警部補、それに運転手の後藤刑事が車から降りて、それを取り囲む。

だが、中には誰も乗っていなかつた。辺りを見回しても佐藤刑事の姿はない。

そういうしていふうちに後続のパトカーが続々と到着した。制服姿の防犯係長の上田警部補が敬礼しながらやつてきた。

「この上ですか？ 佐藤刑事も？」

「ああ。そつらし」山崎警部は後藤刑事に向かつていう。「キャンプ場のほうを見て來い」

「はい」後藤刑事は班長車に乗り込んで向かつた。

上田警部補に顎で命令されてパトニー缶がそれに追尾した。

「これじゃあ、車では無理ですね」

「そつ遠くはないところに小屋があるはずだから、見つけたら包囲して、知らせてくれ」

「はい！」

上田警部補を先頭にして、警官らは革帯から拳銃を取り出して安全装置を外し、背を屈めるよつとして雑木林の中の坂道を上つて行く。

後ろから、「課長！」と、柳井警部補が押し殺した声でいった。

「なんだ」

「見てください。これは血じゃないですかねえ」

見ると道路脇の湿氣た土に黒いシミが幾つもある。草についているのは明らかに赤みを帯びた血だ。土も草も踏み散らかされて、明らかに争つたような形跡がある。

「あつ！」

「どうした？」

「じれ？」

といつて警部補はライフの黒いボディーを指した。運転席の後ろの辺りに、刷毛^{はけ}で掃いたような跡があり、掌紋のようなものもあつた。

「これは……細いから女性の手ですね。……これは男の手の平のようです。ホシの掌紋ですよ、指紋もある。佐藤刑事のは、これは血紋ですよ！かなり負傷してますね」

それから血の付いた瓦礫や髪の毛が付いた棒切れなどが見つかつた。そして佐藤メグミの携帯電話も近くの草むらから見つかつた。そういう状況から、佐藤刑事が何者かと争い、負傷して、拉致されたことは明らかだつた。

山崎警部は、緊急配備と、鑑識班の出動と、応援部隊の増強を、合同捜査本部に要請した。

しかしながら、深夜にかけて行われた付近一帯の捜索からは、佐藤メグミも、足立明少年も発見されなかつた。緊急配備の網にも一味の車は引っ掛けられなかつた。

不思議なことに、小屋らしきものさえなかつたのである。携帯電話の発信元も足立明少年の携帯からではなかつた。従つてメールを打つたのが明君かどうかも怪しいことになつた。

そして鑑識が調べたところでは、佐藤メグミは重症を負つており、靴跡から相手は少なくとも二人以上であることがわかつた。相手のひとりも負傷しているはずだつた。掌紋・指紋は複数あつて、佐藤メグミの血紋以外は、必ずしも犯人のものかどうかはわからない。

翌日行われた捜索でも佐藤メグミの行方は掴めなかつた。

根岸弁護士に会つた直後なだけに、佐藤刑事は罠に嵌められたのではないか、という見方もあつた。けど、根岸弁護士が、品川老人と足立明少年の殺害・拉致に係わつてないことは、アリバイが証明した。その時彼女は日田にいたのである。

それでも、彼女に尾行が付いたことはいうまでもない。限りなく

怪しいのだ。

そんな時、希代の謀殺人・青山姪臣^{ひづる}根岸ともみの双子の弟^{てつ}を
よく識^しる、警視庁の本母^{ほんぼ}警部^{けいぶ}が、合同捜査本部に姿を現したのである。

そのゴシイ顔と巨体は、イタ高のゴンタクレで鳴らした権藤警部^{ごんとうけいぶ}
が可愛く見えるほどだった。

ほかの小説と間違えたので、さしがえるまで、しばらくお待ちください。
わい！

さしがえましたので、お読みください。
短いですナビ、とります。

小学生児童に続いて現職の刑事まで何者かに拉致されるという報道が、秋季国体で盛り上がりかけていた大分県民に冷水を浴びせ、東京・名古屋を跨ぐ広域的な劇場型犯罪のエスカレートぶりに、日本全国の注目が集まった。

捜査員が犯罪に巻き込まれ、犠牲になるなどどことは、法治国家の根底を揺るがし、国家の威信に係わることであり、あつてはならないことだった。

いかなる犯罪組織も、この条理はわきまえていて、これを踏み越えることはない。だから公然と存在しているのであり、彼らにひとつも警察力を増強され兼ねない 許されざる異端であった。

この異端はもつかのところカルト以外には考えられなかつた。しかし、これだけの事件が、警察庁によって広域重要指定事件に指定されないのは、不思議なことだつた オウム事件もそうだつたけど。

拉致された佐藤メグミは拉致現場に夥しい血液を残していた。車のボディーに、刷毛で掃いたように付着していた血液などからみて、衣服にも相当量沁み込んでいると思われ、致死量に達しているのではないかと、仲間内では懸念されていた。

詳しい事情を説明すべく、相棒の富崎芳樹が家族の元に派遣された。

蒲江の実家には、家族がみんな集まっていた。日中でも暗い居間に暗い影をなしていた。

みなもつ涸れたような目をショボショボさせていた。小さい子供らが思い出したように泣いた。

身を切られるような思いでいることは痛いほどわかつた。

芳樹は事情を説明しながら、何度も、「心配しないでください。彼らはこれまで、女子供には手をかけていませんから」と繰り返した。

そんなことはなんの氣休めにもならないと、いつてる本人が思つているのだけど、家族はそれに縋り付いた。瞳を光らせて芳樹を見た。

育ての親の そう聞いていた 老夫婦は、痛ましいほどに憔悴していた。

「心配ねえち。じいちゃん、ばあちゃん」

そういうて頻りに慰めてくるのは、神戸から急遽帰郷してきた和佳子という下の叔母だった。

「うん。 そうぢや。 メグミはシンの強い子じやけん」と、津久見の弥栄子もいつ。

メグミに似た高校生の女の子と中学生らしき男の子もいた。

芳樹は逆に励ましたような気持ちになつて、その家をあとにした。

(そつぢや。^{つぶや}あこつは賢い……)
と、呟いた。

くねくね折れ曲がった急勾配の峠道を、どのよひに上り下りしたのか記憶にないほど、芳樹の心は思い乱れていた。

よく事故を起こさなかつたものだと思つ。テッペンで茫然と海を見つめたことだけは鮮明に残つていたけれど、あとは無意識に反応していたのだろう。

彼が正気を取り戻したのは、平坦になつた所のカーブで、ふくらみ過ぎて、対向車 軽乗用車 と接触しそうになり、クラクションの連打を受けてからだつた。

——いかん！

危ういところだつた。冷や汗をかいて、意識を運転に集中する。

それも長くは続かなかつた。注意を運転に置きながら、心はまた様々に思いに絡め取られた。

呵責の念に苛まれる。

香水をなにに使うのかもつと追求すべきだつた。

物事を曖昧に受け止めて深く追求しようとしてない、いい加減性格を腹立たしく思つ。

なんでもハツキリしないと気がすまない、佐藤メグミとはまるで正反対だと思う。

その性格から彼女の暴走は予見できたはずだとも思う。

七十も年上なのに頼りにされていないことを情けなく思つ。

ふいに、この間初めて接触した髪のにおいが蘇つた。田向のにおいはアメリカのにおいだつた。エキゾチックにおいがした。
そして、なんといつてもまだ二十歳を過ぎたばかりの娘なのだ。
——どんなに怯え、痛い、苦しい、恐い、思いをしていることだ
る。

死に直面した人間が、どんな恐怖を感じるのか想像もつかないけど、それらのことを思うと、肉親が感じているのと同じ　とまではいえないかも知れないけど、身を切られる思いがした。

そういえば彼らも小刻みに震えていた。

どうしようもなく自分が愚かしく、腹立たしい。腹立たしくてならない。

無暗にスピードを出したり、弛めたりした。

前からくるダンプに突っ込んで行きたいような衝動に駆られた。

捜査会議で、警視庁からやつてきた、ゴツイ警部はいった。

「アリバイなんて、そんなものはクソみたいなものだ。偽証する者はごまんといる！　いいですか、みなさん！　やつは悪魔だ！　人を操る天才だ！　死人だつて操る傀儡子師なんですよ。やつに魅入られたら、どんな謹厳居士の男でも、貞節な女でもイチコロ——いや、それは弟のほうの青山姪つね臣おみの場合だけね。

おまけに大胆不敵にして才知才略にたけ、指紋はあるか気配すら残さない。あいつを縛り首にできるのは、神様しかいない。

——そこの人、今笑ったね？

——それならやつを殺した城島兄妹は神様なのか？

といいたいんだろう。そうとも！　彼ら一族は、日本民族の底辺の底辺を這いずりまわって生きてきた一族、神様ってえのは、そういう差別された者たちの味方なんだ。エジプトの奴隸だったユダヤの民が選ばれたように。

まあ、それは冗談だけど。要は、あの悪魔がまだ生きていたのかどうかということだ。死んだのは双子の片割れ、根岸ともみのほうだったのかも知れないということだ。

いや、そうでなくとも、そつくり同じ遺伝子を持つ姉の根岸ともみに、悪魔性が目覚めたとも考えられる。これは容易なことではない。やつの行くところ死屍累々だつた。まだまだ死人がでますぞ」

そういうて、本母とかいう警部はヒグマのような顔でみんなを睨みまわしたのだった。

それに対して、「見分ける方法はないんですか?」と捜査員から質問がでた。

「ないことはない」

「えつ? あるんですか」

「だけど、それについては今はいえない」

「勿体ぶらずに教えてくださいよ」

「いや、勿体ぶつているわけじゃない。さるお方に確かめてからにしたい。間違ついたら、捜査の行方をも過つことになりかねないさるお方とはどなたのことですか?」

「大分大学に、元警察庁の野島警視監が客員教授として勤務しておられるはずだ。検死のエキスパートであり、検視で氏の右にでる者はいない。青山姪臣を検視したのも、氏だ」

エエーッ!

と一同は驚きの声を上げたけど、幹部連中は先刻承知のようだつた。そんな偉いさんが地元にいるとは知らなかつた。

しかも、警視庁・公安部長の野島警視監のお父君でもあるといつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6168p/>

バニシング・ツイン

2011年11月23日18時48分発行